
ハイドロゲン～雲となり、雨となる～

椎野 千洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイドロゲンと雲となり、雨となる

【Nコード】

N8691H

【作者名】

椎野 千洋

【あらすじ】

すべての事象を管理された時代、国の概念がない世界、水が何よりも尊い日常。少年カインは雲を奪われた空に思いを馳せる。空を飛び世界を見ると。少年は「鍵」と言われる少女と出会い、世界へ飛び出してゆく。そして不毛の戦いに巻き込まれていく。少年が「雲」を管理された世界の仕組みに気づいたとき世界は動き出す。今の延長線上にあるかもしれない別世界。荒廃した大地と異常発達した水素文明を舞台にした長編SF。第一部【空想科学祭2009】参加作品

序章

希望の光が、遮るものを無くした天空の闇を流れ墜ちる。

「被弾したのか！ ダメだ操作できない！」

二人乗りの飛行艇は人の操作から解放されたかのように不安定な上下動を繰り返す。

被弾した爆発音は一時的に操縦者の聴力を奪い、意識を散漫にさせる。

乗っていたのは二人だった。一人は若いパイロットの男で、もう一人は少女である。

「そんな！ 飛行は出来るの？」

少女は不安定に振動する機体に不安を感じながらも、気丈に現状を把握しようと男に聞いた。男は被弾の影響で少し意識が朦朧していることを認識しつつも、少女にこれ以上不安を抱かせぬよう、極めて平坦な声で答える。

「大丈夫だ。被弾したこの機体は水素金属で造船されている。構造上、温室超伝導で浮遊しているんだ。水素エンジンの推進力もある。一発の被弾があったからと言って、すぐに墜落するわけではない。水素金属の超伝導浮遊効果でしばらくは凧のように浮遊しているはずだ」

しかし、意識を保ち、被弾部に視線を向けると事の重大さが理解できてしまった。

水素金属の飛行艇。つまりは全てが水で構成された機体。それが固体から徐々に気体である『雲』へと変わっていた。

「……どうやら状況は芳しくないな。私は現状で操縦が出来るか模索する。君はすぐに周囲の確認を」

「了解！」

二人は互いに状況が最悪なことを認識し行動を起こす。操縦桿を握る男は何とか落下を防ぐ為に機器の操作可能部分を模索し、少女

は目視とレーダーを交互に使い分け、周辺の状況を確認していく。星明りの中では複数の敵機が後方から隊列をなして飛行していた。二人の乗る機体の外装からは水滴がウィンドシールドへ飛沫していく。顔を青くした少女は通信機のマイクをオンにした。

後部座席から操縦者へ通信が入る。

「だめっ！ 雲化現象が起きてる。被弾したのは媒体弾よ。水素金属が溶けてこのままじゃ空中で水になっちゃう！ 浮力がなくなっているわ！」

瞬間、二次攻撃が襲いかかる。機体から放出される『雲』は満天の星空の反射でダイヤモンドダストのように光り輝いていた。それが敵機に存在を知らしめている。

操縦者の男は結果的に動かない機体の機械的操作を放棄し、風流を利用する形で自由落下の速度を落とすことに手動操作を集中させた。その間も絶えず弾丸は機体の横をかすめていく。機体は徐々に平行になり、なんとか左右に機体を振る動作だけは出来た。

だが、落下していること、機体の位置が把握されていること、これらの点において絶望的状况に変わりはない。

「……このまま抵抗をし続けてもいずれ落とされる。どうするかは君が決める。私は決定に従う」

操縦者は覚悟が出来ていた。後部座席にいる少女の耳には、スピーカーにより電気変換された音声から操縦者の恐怖は伝わってこない。少女は考える。潔い死を選ぶのは簡単だ。だが、自分は死ぬわけにはいかない。死ぬことは許されない。どんなに無様でも、絶望的な状況であっても可能性に賭けなければならぬ。

「いいわ、今は翼なんて要らない！ この『雲』ひとつ無い世界に少しでも『雲』を放出してやりましょう！」

必死に機体を振って媒体弾をかわしていた男はスピーカーから流れ出てきた答えに一瞬後ろを振り返った。

ガラス越しの僅か一メートルにも満たない先で、その上を弾丸が飛び去っていく中で、少女は微笑んでいる。一瞬たりとも諦めては

いない。死など考えてもいない表情がそこにあった。

「放出か。なるほどそれはいい」

男は同じく微笑んだ。そして機体を精一杯横に振る。操作は簡単だった。敵は絶ずこちらの位置を把握して射撃を繰り返している。ならば最も面積の広い部分を敵に見せてやればいい。

一発、二発、三発と機体の側面に媒体弾が被弾する。その瞬間、水素金属は圧縮された金属から爆発的な量の『雲』へと化学変化を起こす。水素金属が失われ、浮力の変わりに重力が機体にかかり始める。『雲』は機体を完全に覆い隠す。今だと言わんばかりのタイミングで男は燃料タンクのバルブを解放する。放出された水素燃料は灼熱のスチームとなってさらに『雲』を増幅させた。

「よし！　しっかりつかまってるよ。命がいくつあっても足りないんだ！」

男はそれだけ同乗者に伝え、操縦桿を精一杯前に押し込む。機体は平行状態から垂直になっていく。同時に男はあらゆる機構を停止させる。音もない、光もない。闇に溶ける金属の塊となって、巨大な雨粒となって、最速の落下を始めていた。

その自発的な墜落を許した後方を飛ぶ機体群は、発生した雲によって視界を奪われていた。複数いる機体の中で、暗闇の夜空とは場違いな深紅色の機体に乗る男が、コクピットの中で、同じく場違いな奇声を異常に歪んだ笑顔であげていた。

「っはああああ！　やってくれるね落下たあー。出来の良いゴミ屑にしては上等な覚悟だ。翼を失った鳥は家畜になるのがお似合いさー。せいぜい地べたに隠れてニワトリみたく醜く泣き叫びな」

機体が列を成して飛び去っていく。遠くの空が徐々に青の色彩を

広げてゆく。星が消え、太陽が世界を支配し始めていた。

第零章

「やあ、久しぶりだね。最後に君に会ったのはもっと小さい頃だったよね」

「……なに、しに来た」

そこはドーム状に建造された一室、壁面には円形の建築に合わせて歪曲したガラス窓が設けられており、絶え間なく光が注ぎ込まれている。無機質なデザインの灰色の石で作成された床の上には、複雑な模様で編みこまれた絨毯が、部屋の円形に合わせて、美しい円縁取って敷かれている。上には訪問者を迎える黒皮製のソファと、その後ろには事務処理を行うための金属製デスクが設置されていた。二人の立ち位置、呼んだ者は金属製のデスクの上に腰をかける形で、子供のように座っている。呼ばれた者は、無然とした表情でソファーには座らず、その前で腕組みをしていた。

「うん。少し問題が起きてね。この地区はそんなに詳しくないんだ僕は。だから知人である君に助けを請いたくて、来てもらったんですよ。なに、話を聞いて欲しいだけです」

呼ばれた者は不満を一切隠さない。

「……関わない約束はどうした？ あんたなんか知らないね。問題ってのもどうでもいい。勝手に動き回ればいいさ、ここを。巻き込むんじゃない」

二人の間に沈黙が流れる。光が窓の反射でゆらゆらと影を揺らす。デスクに座った人間の方が先に表情を崩す、微笑みながらその沈黙を破った。

「こちらから関わるつもりは無いですよ。親切心なんですこれは。昨日少し事故が起きてね。とある人間……まあ君になら話してもいいか。『鍵』を乗せた飛行艇が墜落してね。ここのすぐ近くに」

「それが、どうした？」

くだらない事で呼ばれた。その者には不快以外のなんにでもなか

った。

デスクに座る者は、含みを帯びた声で笑い。答える。

「ふふっ。実はね、君の大切なモノがそれに関わってしまったて——」

「手を出すなっ！」

怒りに任せて叫び、目の前にあるソファァーを蹴りつける。それを見ても、デスクに座る者は微笑み続けた。

「手なんて出さないうですよ。だから親切心なんです。僕はね教えてあげただけ。未来は君の考える方向を示していない。君の自由にすればいいです」

呼ばれた者は怒りに震え、今にも殴りかかりたいという感情を何とか抑える。

「いいだろう。あんたがそういう方法で、縛るって言うなら、おとなしく従ってやるよ。ただな、絶対にあんたが思ったように巻き込ませたりしない。責任は自分が請け負う」

それだけ言って、早足でその者は部屋を去っていく。打って変わったかのように、ドーム状の部屋には静寂が訪れる。

微笑みながらその光景を見ていた者がデスクから降り、窓へ向かう。視界に入るものはどこまでも澄んだ空のみだった。

「君はそうやって未来を形成する歯車になるのかな？ それとも——」

第一章 壱

旧オセアニア圏に属するケルマディック海溝、数世紀以上前は豊かな大洋であったこの地域は、見渡す限り水源など一切なくなっていた。海溝という呼び名は単なる旧時代の地域的名残に過ぎず、海とはどこまでも広がる枯れた大地の、光さえ届かない海溝の最深部に流れる川とも言えない存在の呼び名でしかない。

切り立った崖と岩山のように見えるこの一帯は、世界的水素需要を満たす為に必要な、水から水素を取り出す際に使用する、媒体物である鉱石の鉱脈が広がっているのだ。このため多くの人々が旧海溝に人工の洞窟を掘り、掘削と採掘を生活の糧としていた。

海溝には無数の洞穴が広がり、その中で人々はコミュニティを形成し、居住空間を設けている。まるで巨大な蟻塚のように。

岩肌には酸素を取り入れる為の、さび付いた何基もの巨大換気扇が設けてあり、絶えず断末魔のような金属の摩擦音を発している。温度調節のために設けられた無数の鉄製パイプ管が生き物のように呼吸を繰り返す。町の日常には当たり前のように爆発物の轟音が響き、噴煙を撒き散らしていた。

カインⅡバイゼルは坑道に設けられた休憩施設である食堂の、長テーブルの椅子に腰を下ろしながら、聞きなれた轟音と換気扇の間から現れては消える木漏れ日のような光を浴び、嫌気を隠すことない表情で最後の水を飲み干していた。

「なんだ、なんだカイン、水は貴重なんだぞ？　まずそうに呑むんじゃないよ」

まるで棚から荷が崩れ落ちたような音と共にカインの前に腰を下ろした男は、筋骨粒々な肉体を煤で汚れた茶色のツナギで包んだ格好をしている。この仕事の特性上仕方のない出で立ちとはいえ、カインは自身も似たような格好であることに考え至り益々嫌気がさしていた。

今年で十五の年月を生き抜いたことになるカインは、まだ幼さの残る小柄な肉体にサイズの合わないツナギを着て、なれない仕事をこなしている。だが鉱夫の仕事を始めて、半年も経たずして先の見えない生活にうんざりしていた。そのせいか、癬毛ではあるがきれいな栗色の髪は老人の白髪に見えなくも無く、漆黒の瞳は輝かしさの全くない未来を直視しすぎて、濁ったガラス球と化している。

「……また穴を広げてんだ」

カインの幼さが残る少し高めの声には若干の諦観が聞いて取れたが、男は気にすることなく手にした水を、最高の瞬間と言わんばかりに表情を崩して飲み、答える。

「当然だろう？　しかも今回は大規模なものになるらしい。なんでも、もう少し深いところに巨大な鉱脈があるとからしいぞ」

カインはさらに暗い穴に自身が入っていく姿を想像し、思わず頭を抱えて俯いてしまった。

「何だよ、うれしくないのか？　この時代に水素産業に関わるなんてどんな仕事よりも花形だし、ケルマディックといえど世界でも最大級の鉱山なんだぞ」

たしかに、とカインは思う。人類が化石燃料の枯渇から大戦を起こして数世紀。代替燃料として、量と質、地球にあった大量の水から作れ、二酸化炭素を排出しないクリーンエネルギーである水素はあつという間に普及をした。もはや現在では欠かせないものになっている。

だが、カインはわかってはいても今の仕事を否定したかった。だからふと思いついた超巨大企業の名前を口にする。

「水素に関わるならイズモカンパニーに所属するのが一番じゃないか。あそこを除いて花形なんて言えないよ」

カインの反論に男は異議を唱えることはない。代わりに二回ほど深く頷き肯定の動作を示す。

「言うとおりでな。イズモこそ一番だ。あそこのおかげで“過ちの歴史”を乗り越えられたんだからな。そういう意味でも俺は今の仕

事を誇りに思うね。イズモに貢献してるって事は世界に貢献しているのと同義さ」

カインは話題を振ってから過ちに気がついた。イズモの話題をカインが話す。それはカインにとって禁忌なのだ。男が次の言葉を発する前に、カインには何を言ってくるか、どのような話の展開となっていくのか、それが手に取るようにわかった。

男は言う。カインにとってはすでに常套句のように聞き飽きた話を。

「でも、まあお前は変わり者だな。お前イズモの学院機関に進学の申請を出したんだろ。そりゃ無謀だ。こういっちゃ悪いがお前の両親の活動を考えればスパイと思われたって仕方がないくらいだぞ？

何でまたそんなことしたんだよ」

カインは仕事の不満程度で、こんな話をせざる終えない状況にしまったことを本気で後悔した。男の興味を前面に押し出した視線が痛い。

「……あの人たちのせいで俺まで同じに見られなくなっただけだよ。別にイズモへ行きたかった訳じゃないんだ」

あの人たちの話。その話題だけでカインの心は引き裂かれそうな怒りと憎悪で充満される。

「あの人たちねえ……まあお前の気持ちは分からんでもないからな。親が反イズモ組織の元リーダーじゃあ世間の目は厳しくはなるはな」
当然の考え。人がカインを見ると、彼の意思とは関係なく反イズモという呪縛が付きまとう。カインはこれに苦しみ、そして慣れていた。

「あの人たちと俺は何の関係もないんだ。俺は確かにあの人たちから産まれたけど、それだけの関係だよ。もう死んだ人たちだし、いつまでも同列で語られたくないんだ」

そう言うと、空のコップを手にしたカインは、まだ話しをしたような男に目を向けることなく立ち上がる。何かが切れてしまった気がした。だから仕事場とは反対に設けられている外へ通じる通路へ

歩き出した。

「お、おいもう休憩時間は終了だぞ！ 外に出てたら間に合わねえって！」

構うもんか。カインは聞こえないふりをして休憩施設を出ていった。

海溝を出て最初に視界へ入ってくるのは、どこまでも続く空の青。雲ひとつない晴天はカインが生まれる前から続いている。カインの出た場所は丁度海溝の頭頂部にあたり、辺りを見渡せる展望となっていた。

空が好きだった。

幼い頃から澄みすぎた空を眺め、鳥のように飛ぶことを想像して育った。空を眺めている時にカインには必ず思い出す記憶がある。記憶はあの人たちに関する唯一といってよい好意的な記憶であった。決して色あせない記憶は、どこまでも続いているアスファルトと、心地の良い風を感じさせる。談笑する男たち。こちらに向かって穏やかな笑顔を向けて手を振る女性。それに答える自分。アスファルトを風のように走り出す機体、眼前に広がる機器の駆動音。自分を体の前に乗せ操縦桿を握る大きくて頼りがいのありそうな手。一瞬間の浮遊感と共に一気に空へ近づいていく感覚。

目を閉じて、そして開く。一瞬にして記憶はよみがえる。輝きを失った瞳に力が戻る。カインは飛行艇乗りなるのが小さい頃からの夢で、今現在鉱夫として働いてはいても諦めてはいなかった。むしろその夢をかなえる為には資金が必要であるからこそ、空とは正反対へ進む穴掘りの仕事にも耐えてきたのだ。先ほど男にはイズモに行きたかったわけではないと答えていたが、実際は淡い希望を抱い

てもいたのだ。カインが受けた学院は飛行士科のある所だった。それが叶わなかった今、だからこその必要なのは資金なのである。

空を見て先ほどまで高まっていた感情が落ち着いたのか、カインは仕事をすっぽかしてきてしまったことを後悔した。もう戻ろうにも戻れないのだ。坑道は深く、作業場に行くにはエレベーターを使せねばならない。だがエレベーターは一気に作業員を運ぶような大型である為、決まった時間でないと動かないのである。

今更後悔しても仕方が無いと諦めるしかないのだ。楽観的に考えれば午前中は働いていたわけであり、あくまで乗り遅れたと言い訳をすればその分の給料が天引きされるだけである。カインとしては間抜けの烙印を押されようが一生の仕事と考えていない分、何と思われようがどうでもよかった。

空を見ていてもしょうがないと考えたカインは、簡単な買出しだけを済ませて早めに帰宅することにした。

ケルマディックは地域的に土地が豊かではない為、生活物資の他地区に対する依存度が高い。そのため、坑道の生活居住区とは別に、屋外に各地域から取引にやってきたキャラバン隊が広大な土地にテントを張り商いをしている。基本的には代表者が必要に応じた物資を一括で取引を行なうのだが、通常では手に入らない品々などを個別に買い付ける者も多く、一種の市場として賑わいを見せていた。

カインもここではそれなりに常連であり、他民族ながら知り合いは多かった。日焼けした皮製の小さなテントや、木材で組み立てた骨組みにビニール製のシートを掛けただけの、簡易的な建物が不規則に並ぶ光景は、決して良い景観ではなかったが、カインからしてみれば蟻塚のような薄暗い居住区より、遥に人間味のある場所に思

えた。

少なくとも先ほどの食堂へ戻るよりは気分がいいと思いながら、見慣れた景色に溶け込んでゆく。

何かしらの商品売りつける声が響く通りをいつものように歩きながら、カインは一軒の加工食品を扱う店を目差していた。

程なくしてたどり着いたそのテントは、お世辞にも食料を扱うには好ましくない外見をしている。薄汚れた布が幾重にも重ねられた屋根は風になびいて、枯れた巨大植物を連想させる。その屋根を支えているのは何十本と並べられた鉄骨だ。鉄骨が一列に並んで壁を形成し、柱と二重の役割を担っている。入り口には大きな木製の看板が掲げられていた。

カインが毎度の事、建物がどうして崩壊しないのか疑問に思っているくらいである。

だが、驚くのは最初だけで通いなれてしまえば気にはならない。カインは臆すこと無く建物の中に足を踏み入れる。同時に前後左右から人々の喧騒が耳に入ってきた。ここはキャラバン隊専用の食堂で、他民族が一堂に会しているのである。各テーブルでは神秘的な顔で商談を行なっている一団もあれば、昼間から顔を赤らめて夢心地になっている者もいた。感覚としては通常より二割り増しで騒がしいくらいであり、その点が若干カインには気になった。

しかし特に確認することも無くカインは今日の晩飯を調達するため、食事を販売している売店へ足を運んだ。

店番をしている女は顔見知りで、カインが近づくと声をかけてきた。

「やあカイン、今日は随分早いね。なにか用事でもあるんかい？」
女性にしては恰幅の良い体型と不釣り合いな白いレースのエプロンが目に入る。顔を見ると歳相応にあるシワを引き伸ばしているかのような笑顔でカインの方を向いていた。

「いや、まあちょっとね……それより食べ物欲しいんだけど。できれば夜まで持つやつでね」

「なんだいまう家路に着く気かい。まあ詮索はしないさ。そうだね、コレなんてどうだろう」

女が出してきたのは乾燥肉を日持ちの良い野菜で包みパンで挟むという、とても簡素な料理であった。カインは一瞬迷ったが、新鮮な食料は水分のないこの土地ではすぐ乾燥してしまう事実が存在する為、即座に気持ちに折り合いをつけて差し出された食料を受け取った。

「ありがとう。これが支払い分。それと……ついでに聞くけど今日は何かあったの？ 妙に騒がしい気がするけど」

女は一瞬視線を斜め上に向け、考えている仕草から解答を出す。「ああー原因かどうかは分からないけど、昨日の晩ちよいとした事件があったらしくてね、皆その話で盛り上がってるのさ。なんせ辺りは岩山ばかりの殺風景と来たもんだからね、噂話が大好きなんだよここの連中は」

顔を横に二度ほど振り、やれやれと言葉を発しながら笑みをこぼす女とは別に、カインは噂の方が気になっていた。

「その事件ってのはどういう話なのか教えてくれよ」

今度は女は得意そうな顔でカインを見る。カインは知っているのだ。キャラバンの人間は皆、知りえない情報を自慢げに話すのが大好きなことを。

「あたしも詳しくは知らないんだ。けれど聞いた話だと昨日の晩“森”に謎の飛行体が落ちたのを見た奴がいるらしいんだ」

「森だって？」

カインの異常な驚きに対して、売店の女はそれほど反応を見せない。驚くのは無理もない話なのである。

「みたいだねえ。幸い森に被害は無いって話しだけど、見た人間がいるわけじゃないから実際はどうだか。まあ森の管理はイズモがしているし、問題は無いんだろうよ。あれば今頃避難勧告で仕事どころじゃありやしないでしょう」

お互いに沈黙する。カインとしては実に気になる話だった。森

に影響が出る。これは現代社会において最もおそろいし事故と言っても良いものだった。数世紀前とは環境が変わり、海も森も人口も大幅な減少に見舞われている昨今においては、近隣の森は重要な生命維持装置の役割を担っているのである。その管理をイズモカンパニーが執り行っている。この話題に敏感になるのは当然なのだ。

だが、カインの興味は他にあった。

謎の飛行体が墜落したかもしれないという情報である。

おそらくは貨物船か何かであるとは思うが、飛行艇であることに間違いはなさそうだとカインは思った。同時に危険な興味をそそられる。

どんな飛行艇が落ちたのか見に行きたい、と。

本来であれば森に近づくことは出来ない。それはイズモの管理下にある為であり、イズモが絡むということは進入が極めて困難であることを意味している。実際森は陸地の孤島とも言える、かなり深い断崖絶壁の海溝に囲まれているので、徒歩による進入は絶対不可能になっていた。

しかし、カインには進入しようと思えば出来なくはないという確信に似た思いがあった。あったからこそ、話を聞いた瞬間からすぐにでも自宅に帰りたいという欲求に駆られ始めていた。

「ありがとう！　じゃあまた明日も買いに来るよ。出来れば温かい食べ物がいいねっ！」

それだけ挨拶をするとカインは足早にその場を立ち去った。後ろでわかったよと返事をしてくれているようにも聞こえたが、あえて確認はしなかった。一步一步進むにつれて足が速くなることに気がつく。心臓の鼓動も比例して早まっていくのが分かる。まるで今着ているツナギそのものが脈打っているかのようであった。

心は決まっていた。軽い冒険心と悪戯心ではあったが決まっていた。

森へ行って飛行艇を確認しよう、と。

鉦山で働く人間は皆洞穴を居住空間として改築し、生活を営んでいた。理由としては移動の事情や外界の環境が水分を帯びていないという、厳しい状態の為でもある。洞穴であれば気温も外界より遥に低く、また水分も若干ではあるが地中の方が豊富であることが一番の理由とも言える。現在の世界では人間が外に住まうのは決して楽なことではないのだ。

だが、カインの住居は外界にあった。それもケルマディック海溝の頭頂部にある小さな家屋である。外観はとても珍しく、整った楕円形の二階建てであり、色は乳白色で材質は金属とも粘土ともいえない物質でできていた。表からはそれなりに大きくも見えるカインの住まいは、一階部分を全てとある物を管理する為の格納庫として使用しているので、実質二階部分だけが生活空間となっていた。屋根部にあるさび付いた風力発電用の風車が勢いよく回転しているのが一番目立っていた。

カインは知らないが、カインが住まいとして建物を使用しはじめる前、それも遙に昔の頃、その建物は深海探査艇と呼ばれる乗り物であり、大洋の神秘を調べるべく、深く光の届かない世界を行き来していたのだ。現在は光を遮るものの無い世界において、住まう人を守るという全く違う役割を担っている。

そんな過酷な状況と加護の下にある自宅にたどり着いたカインは、硬化セラミックスの壁面に場違いな形で設けられているレンガ製の階段で、直接二階の居住空間へ向かう。扉は水圧に耐えられるように設計されていたので、分厚い金属とバルブによって錠がされていた。それを慣れた手つきで回し、扉を開け中に入る。内部は至って質素であり、窓際にベッドがあり、ペン立てと旧時代の白地図だけが広げられている小さな机と、飛行艇についての書籍を多く収めた本棚

が目立っているくらいである。入ってすぐカインは台所に設けられている旧式の冷蔵庫へ先ほど手に入れた食料を納める。コレで腐ることは防止できる。

ついで鬱陶しいだけのツナギを腕部分から大雑把に脱ぎ、腰のベルトを外す。サイズの合っていないツナギは誰に触られること無く床へすどん、と落ちてしまう。ツナギをブーツのつま先で引っかけ、蹴り上げるように近くにあったカゴへめがけて放る。ツナギはカゴに入らず淵に引っかかったただだが気にはしない。

中に着込んでいた濃紺のタンクトップと黒のトランクスにブーツという他人には見せられないであろう格好でカインは一階の格納庫へ通じる階段を下りた。すぐにでも森へ行く準備に取り掛かりたかったのだ。

カインは一階に降りると光を取り入れる為、締め切られたカーテンを縛り、大きな窓を開けた。光はすぐに部屋を照らし、深緑色のシートに覆われた大きな縦長の物体を露にする。空気の流れが生まれ、辺りにはオイルの香りが一緒に漂いだす。足元に散らばった無数の工具を一つひとつ拾いながら、それを工具棚へしまい込んでいく。

それから部屋の大部分を占拠している物体に近づきゆっくりと、でも丁寧に深緑色のシートを外してゆく。仕草は常に愛でるように。

カインの夢の結晶がそこにはあった。飛行艇である。薄っすらと残る記憶の中に出てくる飛行艇と同型の形状は、飛行艇としては小型の方であった。材質は強化カーボンを使用し、真新しい木炭のように黒く鈍い光沢に包まれている。緩やかな曲線を描く機体の中心にはコクピットが設けられ、沈黙している機器が通電のときを心待ちにしているかのように存在している。両翼は折りたたまれ、羽を休めている渡り鳥を彷彿とさせた。

早速カインは作業に掛かる。機体の下部に潜り込み、ハッチを開放する。内部にはエンジン部や駆動に必要な電機部が構造的に存在している。その接続部を丁寧に外してゆく。

軽量化が必要だった。カインの森潜入に対するアイデアは、上空からの進入というものだった。ただし、二十四時間体勢でイズモの熱感知レーダーが作動している為に、通常の方法で飛んでもすぐにレーダーに引っかかるだけなのだ。そこで考えたのが飛行艇をグライダーとして乗り、進入するというものだった。

カインが森に対する防衛システムの知識として知っていることは二点。一つは熱感知レーダーの存在。もう一つは人間による巡回である。つまり、熱感知レーダーでは人の体温までは感知しない事をカインは知っていた。

あとは森より高台から滑空すればよいのだ。幸いカインの持っている機体は強化カーボン製であり、かの有名な”過ちの歴史“に起きた大戦時、開発さされた機体としては最軽量を誇る機種であったのだ。そして船底部には貴重な水素金属が使用されていた。よって機体自体に僅かだが室内超伝導の浮力が存在している。

カインは丁寧に外した部品を一つずつ台車に載せ、格納庫の隅へ運んでゆく。外界に住まう者の定めかの様に、額から滴り落ちる汗を片腕で拭う。それを繰り返し、太陽が地平線へ沈む頃になってようやく作業を終えた。重い機器を外された機体は水素金属の浮力によって通常時よりわずかに宙に浮いた状態で停止している。

ふと窓の外に目を向ける。眼前に飛び込んできたオレンジに輝く大地と、濃紺に包まれて広がっていく宇宙の入り口を眺めて、カインは綺麗だと思った。やはり人間は穴に住むものではないと。

だが、過去に美しい水平線へ太陽が沈んでいく光景を、大洋に浮かぶ船上の同じ窓から眺めていた人が大勢いた事を、カインは知ることができない。

第一章 式

夜とは音のない世界だった。見渡す限り広がる地平線には生命の息吹さえ儚いものでしかない。雲のない夜空には満点の星空が広がり、世界は深い濃紺の色合いに包まれる。カインの住まう高台からは、ケルマディックの人工的な光が聖夜のイルミネーションのように輝きを放っていた。

カインはフライト用の軽量で頑丈なツナギを着て、軽量化を済ませた機体に取り込み、大きな風を待っていた。軽くなった機体は少しの風でも振動を起こしていた。コクピットに座り、簡易的な銅線に繋いだ筒状のスイッチを片手に、カインは眼前に広がる空を見据える。銅線は両翼まで伸び、その下部に取り付けられた極小のダイナマイトに繋がっていた。

無音の世界に一瞬の音が発生する。風が大地を撫でるかのように上空へ道を作り出し、機体は大きく揺れる。操縦桿を引き倒し、両翼が風に逆らわないよう調整をする。徐々に前進を始めるのを確認しながら、カインはさらにタイミングを計る。もう一度、風によって音が世界を支配し機体が揺れた瞬間、カインは握ったスイッチを強く押した。前進する推進力に上昇気流が後押しをし、ダイナマイトの爆風が機体に浮力を与える。

水分を失った空気は抵抗が少なく、機体はスムーズに風に乗って上昇して行く。カインは暗闇の中で笑顔になる。重力から解放された浮遊感は何ともいえない感情をカインに与えていた。このままどこまでも高く昇って行きたいという思いを何とか抑える。操縦桿を操り機体を水平に保つ。

カインは何度もこのグライダーの方法で空を飛んでいた。燃料がほとんど要らず飛べることが一番の理由だった。機体を推進エネルギーもなく自由に飛ばすことは本来高い技術が必要になるが、カインにとっては飛ぶという感覚より飛ばすという、言うなれば風を揚

げている感覚に近いものがあつた。下から風の流れを見極めて、風に乗せるイメージこそカインは重要だと考えている。

その風に乗って、機体は岩肌しかないケルマディック海溝から少し離れた森まで飛行する。星々の輝きによってカインの目でも辺りをしっかりと辺りを確認することが出来た。それでいてカーボン製の機体は闇にまぎれて地上からでは目視し難いことを何度かのフライト経験からカインは知っている。

徐々に森へと近づき、その全容が確認できた。一帯を囲う大海溝が、何者もの進入を拒む重圧感に包まれている。決して犯してはならない領域のように、静かな木々のざわめきが闇の中に蠢いている。念には念を入れてカインは機体を上昇させていく。どれだけ上昇しても大海溝の底は見えない。それでもリーダーに、人間に察知されない機体は、風に乗った鳥のように森の領空に侵入した。

夜とはいえ、星の明るさで見える森の広さと瑞々しさにカインは思わず息を呑んだ。土と岩と僅かな水で生活していた人間にとって、豊富な水分を有する森は宝石のように輝いて見えた。

しばらくその森を眺めながら楽しく飛行したが、飛行艇が墜落したと思える痕跡は見当たらなかった。地上から大幅に減少した植物ではあるが、その分嚴重に管理された圧倒的な広さを誇る森は、飛行艇の落下など覆い隠すには充分なのだ。

高度を上げて上空からも面で搜索を行っていたカインだったが、どこを見渡しても同じ風景であるようにしか思えず、森の中に存在する違和感を感じられなかった。

我慢強く飛び続けて、漆黒の森をくまなく探し続けたが、ここに来てカインは少し後悔をした。さすがに落下地点さえ分からずに行動を起こすのは無謀であつたと。また、森への落下物という話しは決して少ない話では無い事をカインは考える。森は生活を営む上で欠かせない、空気を作る聖域である。色々な噂が立つことはよくあつた。火事や落下物に関しての噂は特に多い。そのほとんどは流れ星や、森の管理に必要な、巨大スプリンクラーから放出される水が

生み出す霧を見間違えた人間が、尾ひれをつけて話すことから始まるのだ。今回もその噂の一つに過ぎないのかもしれない。

カインは思わず操縦桿を握る両手を離して、頭を抱える。夢の間は終わったのだと誰かが語りかけているようであった。もう家に帰って眠れ、そして続きは夢の中でも見ればいいと。

己の無謀さと無力さに思わず力の無い笑みをこぼす。こうやってまた空から地上に戻り、朝を待って穴に潜るのだ。

機体を大回りでターンさせ、進行方向をケルマディック海溝に向ける。

ふと、諦めたくない感情からなのか、自暴自棄になっているからなのか、カインは森を水平に見てみたいという感情が襲った。それには高度を限界まで下げ、木々に接触しかねない飛行をせねばならない。とても危険な行動であった。カインも飛行に関しての技術は基本的に身に着けている。それゆえに推進力の無いグライダーで低空飛行をすることは危険であることを知っている。風の力を利用することで浮力を得ているので地面に接するとその風の力が弱まるのだ。水素金属を一部使用していなければすでに墜落している状態である。

わかっている。わかってはいるが、カインは高度を徐々に下げていった。風力が弱まっていくせいで、推進速度が著しく低下してゆく。水素金属の浮力によって、まさに凧のような感じで上空にふわりと浮いているだけの状態になる。

初めて海を見た。黒い海だった。風の流れによって森が波打つかのように蠢いている。木々が擦れあい、ざわざわと穏やかな音色を奏でる森は、まるで獲物を誘い込む蜘蛛の巣のような妖艶さで、不気味さがあった。

どこまでも続く森の波はカインに冒険心から沸き起こる感動を与えていた。世界にはまだ見ぬ光景がいっぱいあるのだと。そしていつか世界中を見て回るのだと。

飛行艇は見つからなかったが、広大な森の海を見れて満足だった。

ところが、ふとした瞬間、その森の海に一部流れの途切れている部分があることに、カインは気がついた。同時に体内で心臓が大きく一度脈打つのを感ずる。上空からは見えなかったが。撫でるように一部分だけ森の木々が傾いていた。

カインは森の波に呼応するかのような心臓の鼓動を感じながら、墜落を避ける場合に、いかにして速度を軽減させることが重要であるかを思い出す。もし墜落は避けられない事態になった場合、そのまま落下するのが普通ではある。避けることの出来ない死を迎えるだけだ。だが木々の先端を機体の腹に撫でさせて、クッションのように活用すれば、あるいは助かる可能性を少しでも引き上げる事は出来る。少なくとも自分ならそうすると考えた。

カインは少しだけ高度を上げ、違和感の中心へと向かった。

あった。予想通り木々をクッションにしたのであろう痕跡が。木々は同じ方向に倒れ、道しるべのように墜落した飛行艇の方向をさしていた。木々が倒れ、一部地面が露出していった。

「よっし！ 着陸できそうだ！」

カインは着陸が出来そうな状態の森を見て思わず声を上げた。でこぼこの地面では本来着陸など不可能なのだが、水素金属の浮力を持つ機体は地面に接地することが無いのだ。常に浮いた状態をキープできる。あとは着陸の技術だけが必要だが、何度も着陸をした事のあるカインには簡単な操作だった。

自信の通り、着陸は枯れ葉が地面に落ちるかのように、スムーズに風の流れを利用する形で成功した。すぐにコクピットから降りたカインは、地面の感触を確かめるかのように何度かその場で足踏みをする。それだけで地面に一定の水分が含まれていることに気がつく。体にまとわり付くような暑さを感じるのも初めてのことだった。目的が無ければ木々に触れてみたかったが、今は別のことに興味があった。おおよそ五十メートルは木々が傾いていた。周辺には折れた枝が散乱している。カインは落ちている枝を道しるべにし、墜落痕と思える箇所を進んでいった。

すぐに墜落の痕跡は見つかった。上空より辺りは暗く、視界はあまり良くはなかったが、自然の森の中に人工的な飛行艇の残骸があるのはすぐに分かった。所々に金属片や部品と思われるものが折れた枝と共に散乱している。

異常な光景がそこにはあった。近づかなければ分からなかったが、残骸であると思われる金属類や部品類、そのすべてが僅かではあるが空中に浮いていた。

部品の一つを拾い上げてよく観察をしてみる。カインは、それが水素金属である事をすぐに理解し、驚愕した。拾い上げたのは飛行艇の内部に使用されている機械部を固定する部品の一部だったのだ。「これ、もしかして全部水素金属で出来てるのか？」

通常ではないとカインは思った。水素金属は現代社会では貴重なものだ。大量の水から抽出された水素をさらに圧縮することによって、ごく僅かに生成できる水素金属は驚くほど高価で取引される。水は現代経済そのものと言ってもよい。水素経済とまで言われているのだ。ましてや水を金属化したことによってその価値は不変のものだとされている。室内超伝導の性質もあり、別名浮遊金属とも言われている。それが外部の板金に使用されているのであれば、カインの乗る飛行艇のように浮力の補助として役立つのだが、この墜落した機体は内部の部品にまで水素金属が使用されていることになるのだ。ただ事ではなかった。

墜落したと思える機体はさらに奥にあった。カインは機体に近づくのを少しためらった。全て水素金属で建造された飛行艇ならば、墜落しても搭乗者は生きている可能性があると思った。

機体は酷く損傷し、両翼は折れて歪んでいた。おそらくは修復不可能であるとカインに思わせる。形状はカインの乗る旧時代の飛行艇とは違った。所々損傷はしているが、全体的に薄く、中心部だけが人が乗れるよう膨らみを帯びている。カインは比喻として具を詰めて生地を上下に挟んで合わせたパンを想像した。もしカインが海を良く知り、そこに住まう生物を知っていたのであれば、きっとマ

ンタの形状に似ていると表現出来たろう。

カインは恐る恐る剥がれかかった板金部分を足場にし、コクピットに上ってみた。中には誰の姿もない。だが、まるで幽霊船のように人がいたと思わせる気配が漂ってはいた。カインは背筋に冷たい何かが走るのを感じ、すぐに機体から降りた。遺体がない。この事実が何を意味するのか、考えるだけでカインは不安になった。もしこの機体が単なる輸送機の類ならば、生きているであろう乗員を助けるべきだと判断できた。だが、水素金属で建造された飛行艇の乗員など、普通であるはずが無いのだ。

辺りを警戒するカインの手は濡れていた。水素金属が水へと変化しているのだ。その部分に触れた箇所が全て湿っている。カインとしては全身から汗が噴出しているような錯覚がして嫌な気分になった。

早めにここを離れたほうがいい。そう思って、足早に自分の乗ってきた機体に戻った。暗闇に散乱した小枝を踏み荒らす音を響かせながら思った以上に警戒しつつである。顔から血の気が引いているのが分かる。きっと鏡を見れば仮面のように真っ白になっているだろうと思った。後悔もした。軽率すぎたのだと。せめて武器になるものでも持ってきていれば、そう思った。僅か五十メートルの距離ではあったが、機体が見えて触れられる距離まで来ると酷くほっとした。

こういう気分ときはすぐに家に帰って服を脱ぎ、エアースバスに入る。そして風に当たりながらケルマディック海溝の人工的な光を眺めるに限る。

そう思ってすぐに機体に取り込んだカインは再び離陸する為の風を待った。

機体の側面に陰が一つ存在している事には気がつかなかった。

気が、つかなかった。

風を待ち、機体が振動する事と、風の音だけに集中していたから。そして大きな風が機体を強く撫でた瞬間、影は動き出した。

カインは風による振動で影の動きには気がつかず。浮力を与える為のボタンを握り締める。

影は機体の振動に合わせるかのように死角へ移動をしていく。

機体は不安定に揺れるが、一瞬の水平をカインは見逃さない。右腕は操縦桿を強く握り、左腕でボタンを押そうとする。

影は不安定に揺れる機体を物ともしない。影の右腕が腰にぶら下げた鋭利な金属を握り締める。

カインは空を直視し、凧が舞い上がる様をイメージする。

影が身に着けている鋭利な金属が光り、一瞬で背後に回り、コクピットに入り込もうとする。

気配はしない。だが幸運にも月明かりは空を直視しているカインの目に、一瞬だけ光の反射を察知させた。

カインは心臓が一気に大量の血液を体に循環させたことで気がつく。まるで無意識の危機感が体を動かせと命令しているかのようだった。影は右手のナイフをためらうことなく、カインの首筋に下ろした。しかし寸前のところで振り返ったおかげでカインの首にナイフは当たらない。操縦席の肩口が大きくナイフによって裂かれただけだ。

影を見た。驚愕だった。カインには眼前の影が物の怪の類にしか見えず、影は異常な形容で次の一撃を繰り出そうとする。胴体は太く、腕のようなものが四本も見えた。目の錯覚でなければ、顔があるべき場所に二つの顔が見える気がする。眼は月明かりで鋭く光る。カインは慌てて足元に設置してある工具箱から小ぶりのスパナを取り出し、影へ向かって力いっぱい投げつけた。必死さの中に、化け物へこんなものを投げても意味はないだろう、などと考えている自分に驚いた。

だが、思いのほか効果があった。スパナは回転しながら化け物の

胴体部分に向かって飛んでいたが、化け物はまるで胴体に当たれば致命傷な、銀の弾丸でも飛んできたかのような反応を見せ、コクピット内部から飛行艇の右翼へと跳び退いた。

化け物の跳躍により、機体が小さく揺れた。しかし化け物はすぐにこちらへ向かって動き出す。カインには時間が無かった。次、攻撃を受けたら殺されてしまうとさえ思った。背中に冷たい汗が流れ、血の気が引いた顔からさらに血の気が引いていくのがわかる。

偶然だったのかもしれない。恐怖により体が小刻みに震えていたから。あるいは、力いっぱい拳を握り締めていたからかもしれない。

カインは左手に握り締めていた、浮力を得る為の起爆スイッチを押していた。

木々の揺れる音が一瞬でかき消される。大きな爆発音と共に、機体は前部だけが浮遊し、右へ傾きながら地面を大きくバウンドした。風力を得られず、異物が右翼に乗っていた為離陸までは出来なかった。だが不安定な右翼にいた化け物を機体から振り落とすには充分な振動だった。

化け物は落下した。おかしな落下だった。背中から落ちた化け物は、まるで弱点である背中を庇うかのように空中で回転し、うつぶせのような形で地面に衝突した。

すぐに森には木々のこすれる音だけの静寂が訪れる。コクピットから恐るおそる下を覗いていたカインは、化け物が地面から一切動かないことを確認し、大きく息を吐いて座席へ崩れ落ちた。

「た、たすかった……」

一瞬気持ちは緩んだが、カインは一度両腕で顔面を叩き、もう一度気を引き締めた。化け物に止めを刺さねばいけない。そう思った。座席から立ち上がり、すぐに工具縛から一番威力がありそうなハンマーを取り出し、ゆっくりコクピットから降りた。

警戒しながらカインは化け物に近づいた。襲われているときは見えなかった影の正体が、月明かりによって露になっていた。その姿

をみて、カインは啞然とした。

影の正体は二人の人間に過ぎなかった。大きな胴体は、ロープで括り付けられた二人の男女が合わさったもので、四本あると思っていた手も、二人のものだった。

カインは混乱した。男は地面に落ちた衝撃で気絶している。その背中に覆いかぶさる形で少女が気絶している。化け物だと思っていた男は確かに背中が弱点だったのだ。少女を背負って戦っていたに過ぎなかったのだ。その事実、なぜか化け物の存在が否定されたことよりカインを安心させた。落下の際、背中を庇って見えた事にも納得できた。

もう少し近づいて様子を見た。男の方は短めに刈り揃えられた短髪で黄金色の髪の毛が月明かりで輝いて見えた。顔は大人びてはいるものの若く、力強い眉が意志の強そうな印象を与えている。格好はパリッとした新調のスーツのように、しっかりとした作りの制服を思わせる。色などは暗闇で判断できないが、少なくともケルマデックで働くような格好ではないなと思った。おそらくどこかに所属する軍人だろうとカインは当たりをつけた。

背中 of 少女はカインの着ているツナギに似た、軽量化されたフライトスーツを着ていた。体は小さく、身長はカインと同じか少しだけ高いくらいに見えた。顔も幼く、小さな唇と筋の通った鼻は計算された造形のように整って見えた。薄い眉と瞑っていてもわかる目の大きさのせいで、気絶している顔は赤ん坊のような愛らしさを携えていた。少なくとも大人には見えない。

ふとした瞬間キラリと光る物が視線に入った。どうやら男が使っていた刃物のようであった。カインはその刃物を地面から拾い上げ、ゆっくりと月へと掲げてみた。この光るナイフが先ほどまで自分の命を奪おうとしていたかと思うと、酷くぞっとした。

「う……んっ」

足元で少女のほうが少しうめき、カインは思わず叫びだしそうになるのを堪えるのに必死だった。

よく見ると男の胴と括られているロープが食い込んでいて、苦しそうな様子である。それが可哀想に思えたカインは、ゆっくり腰を下ろし手に取ったナイフでロープを切断してやった。固定された状態から解放された少女は男の背中から崩れ落ちるかのように地面へ転がった。

その瞬間ナイフを握るカインの手を、気絶していると思っていた男が勢いよく掴んできた。カインは余りに一瞬の事で何の反応も出ない。

「そ、そのナイフをどうする……気だ」

男はうつぶせの状態から腕だけはしっかりと握り締め言った。落下のダメージが大きいのか体を動かそうとする気配は無かった。しかし顔だけはしっかりとカインのほうを向いていた。カインは慌てて男の腕を振り払おうとするが、

「は、放せっ！」

しっかりと手首を握り締めた男の腕は、まるで万力で締め付けられた拘束具のように微動だにしない。

「こ、殺すなら私を殺せ……！ あの子は何もしてはいない。実行者は私一人……だっ！」

「な、なに言ってるのか分からないって！ いいから放せよ！」

男はダメージで喋るのもきつそうだったが、それでも喋り続けた。自分以外の者を対象にした命乞いだった。

「イズモに差し出すのは私の死体だけで……充分だと言っている！」

カインは困惑しながらも男の言葉を理解するのに務めた。

「イズ……モ？ 何のことだよ。俺はイズモの関係者じゃないし、君たちを差し出すことなんかしないよ。もちろん殺したりもしないって。だから手を放してくれよ」

少しだけ男の握力が弱まった気がした。だが放しはしない。

「本当、か？」

カインは慌てて何度も頭を縦に振る。

「本当だって。俺は近くの鉱山で働いている鉱夫でイズモの人間な

んかじゃないんだよ。ここにきたのだって何かが森に落ちたって噂を聞いて来ただけなんだ」

「……………」

男とカインの間に緊迫した長い沈黙が訪れる。先に喋ったのは男の方だった。

「イズモの関係者じゃないなら……頼みがある」

何を言っているんだと思ったが、今の告白で少しだけ雲行きが変わったのを感じる。男は目を閉じたままの少女に危害を加えるのを防ぐ為に握っていた腕を、今度は思いを伝えるために握り締めてきたのがカインにはわかった。

「あの、子連れで、ここから少しでも早く逃げ……てくれっ！」

「逃げる？　　どういうことだよ。誰かに追われてるのか？」

男の声にはさっきまでは無かった凄みがあった。

「あの子を失えば……もう、終わりだ。だから早く行ってくれ。逃げてくれればそれでいい」

既に会話になってはいなかった。男は思いを伝えるのに精一杯の様子で、まるで今にも事切れそうにさえ思えた。カインとしても襲われた恐怖は既になく、男の必死さは自身の行動を『協力』に向かわせるのに充分だった。ただ、

「と、とにかく聞いてくれよ。俺の乗って来た飛行艇は一人乗りなんだ。エンジンでも積んでいれば飛ぶことぐらいできるんだけど……三人は無理だよ。救助を呼んでもいいけど、ここはイズモの管理下にある森だし、それだと君たち困るだろ。つれて逃げろなんて言われても俺どうしたらいいか……」

カインの知る事実は顔をしかめざる終えないものだった。

「……………」

男との間に今度は一瞬の沈黙が訪れる。

「私の、胸ポケットに入っている物を……」

カインは少しためらい、男の胸ポケットに手を入れる。長方形の透明なケースが入っていた。ケースの中には楕円形の金属が入って

いる。鈍く銀色に輝くそれは、カインの決して大きくはない掌に収まるサイズであるにもかかわらず、かなりの重量で、まるで一杯に水を入れてあるバケツのような手ごたえがあった。カインは驚きながら聞いた。

「な、なんだこれ。金属なのか？」

「そいつは純度九十九、九九九パーセントの水素金属だ。特殊なケースの重量で浮力は抑えてあるが、開ければ一人分くらいの……浮力になる、はずだ」

高純度の水素金属。見るのも触るのも初めてだったが、普通の水素金属さえ高価なのだから、今手にあるその価値は凄まじいものに違いない。そう思った。

カインは困惑気味に楕円形の金属と男の顔を交互に見たが、男はもう目を開けていなかった。ゆっくりとカインの手首から腕が離れる。男はうつぶせのまま力なく頭をたれる。

「そいつを持って早く行け……。私はここに置いていってかまわない。たいした怪我じゃないから……。一人でも……。逃げ……。きる、さ」

そのまま男は何も喋らなくなった。カインは男が死んだのではないかと思って焦ったが、離れた腕には確かに生命の鼓動があった。少しほっとしたカインは、これからの行動について考えねばならなかった。一人乗りの飛行艇しかないこと。横で眠るように目を瞑る少女。足元で死んだように頭をたれた男。手の中の水素金属。とにかく問題は山済みだった。木々の海ともいえる森は相変わらず波間のような音を発し続けている。空がいつも通りの満天の星空である事が唯一の救いのように思えてならなかった。

だが、自分の中で何かが始まった気もした。少なくとも目が覚めて、暗澹たる鉱山の作業に赴く明日はやってこないだろう予感はある。

それは喜びだったかもしれないし、あるいは不安だったのかもしれない。しかし、今のカインに出来ることは、これからどうやって

一人乗りの飛行艇で『三人』を運ぶかを、精一杯考えることだけだった。

第一章 参

夜が明け、ケルマディックにはいつもと変わらぬ日常が動き始めていた。機械技師たちは鉦山の機構を朝一で点検するために巨大換気扇をハンマーで叩き、キャラバンの人間は朝市を開く為に早くから準備に動く。鉦夫たちは目を覚まし、体をほぐす者、朝食を取る者、二回目の眠りにつこうとする者などなど、それぞれが予定調和で動く歯車のように活動した。

しかし、ケルマディックにおいて、ただ一箇所のみ普段と違う動きが生まれ始めていた。海溝の頭頂部に存在するカインの住居では、胸を強打して負傷した男が部屋唯一のベットで死んだように眠りにつき、介抱と慣れない飛行で疲弊したカインが冷たい床で静かな寝息を立てている。その横で、薄い布を引いただけの床（カインとしては精一杯の配慮）の上で墜落からずっと目を閉じていた少女が、窓から差し込んでくる朝日によってゆっくりと目を開けていた。

「んっ……ん？」

ゆっくりと上体を起こした少女は、辺りの眩しさと周りがいまいち把握できず、そして頭の中も霧が出ているかのようにハッキリしていなかった。

私、一体なにをしているのだろうか。たしか飛行艇に乗って、彼らから逃走している途中だったはずで……。

そこまで思い出し、少女の頭の中が一気に覚醒した。よみがえる危機感、暗闇に中を落ちていく浮遊感と強烈な衝撃。少女はその場ですぐに立ち上がろうとし、床に引いてあった薄い布（カインの配慮）に足をとられ空中で半回転したかのように盛大に尻餅をついた。「痛った」

部屋には天井の一部が剥がれ落ちたかのような崩落音が響き渡る。普段一人で生活をしているカインにとって、疲れていようが目を覚まさせるには十分な音量だった。

「な、なんだ？」

すぐに上体を起こし、寝起きで細くなった目を無理やり見開いてあたりを見回した所で、でん部に手を当てうずくまっている少女と目が合った。

「……………」

「……………」

一瞬の静寂、そして、

「だ、誰っ！」

「あ、起き……ふわっふ！」

少女は動揺して足元にあった布（カインの配慮）をカインに向かって投げつけていた。

寝起きで動かない体に頭から布を被せられ、カインは身動きが取れない状態となった。

「むぐぐ、ちよつとまって！ 話を……」

「うるさいっ！」

少女は即座に立ち上がり、安いお化けの仮装をしたかのようなカインに対して、正確に背中へ水平蹴りをした。少女の蹴りとはいえ、体の小さなカインからすれば、軽く吹っ飛ばされてうつ伏せにされるには十分な威力があった。

すかさず少女はカインの背中に馬乗りになる。

「うっぐ！」

「ここは何処なの！ シルバは……一緒にいた人はどこですか！」

「……………うえっほ！」

「なに？」

「ヴェッホ！」

カインは口周りに絡みつく布をこじ開け、力いっぱい肺を動かして言った。

「ベット！」

少女はあたりを見渡し、狭い部屋の隅にあるベットの上にいる男を見つけた。同時にカインなどすでにいないかのようにベットへ走

り出した。眠る男の顔を見て、一瞬死の恐怖が脳裏をよぎり、呼吸を確認して安堵した。

床でうつ伏せ状態だったカインは、胡坐をかいて布を遠くへ放り投げる。表情も心情も不満でいっぱいだった。

まったく、寝起きにこんな暴れる人間始めてみた。せつかく苦勞してここまで運んでやったのに。

その表情も、少女が再びカインにきつい視線を向けることで変わった。

「あなた誰？　なぜ彼はこんな状態なの？　ここはどこか言いなさい！」

じりじりと距離を詰めてくる少女に対し、これ以上攻撃されてはかなわないと思ったカインはすぐに立ち上がり、白旗を揚げる代わりに両手を広げて顔の横まで上げる体勢をとった。

「ス、ストップ。えっとここはケルマディック海溝で、君たちは墜落した飛行艇から見つけた。怪我をしていた（正確には怪我をさせた）から俺の自宅まで連れてきた。彼は治療中……Ok？」

「……あなたは？」

「俺はケルマディックの鉱夫。ここは鉱山なんだし、普通でしょ？」

「ケルマディックに、鉱夫。それならあなたは、私たちを捕らえていると言うわけでは無いと？」

カインはすばやく頭を二度縦に振る。

「もちろんだよ！　第一、囚われの身だというなら君はなんで俺に攻撃してくるのさ」

「た、たしかにそうですね……」

「敵じゃないよ」

カインは呼吸さえしないで少女の動向に備える。

「……敵じゃない」

ここまで話して、ようやく少女の攻撃姿勢が解かれた。同時にカインは安堵のため息をする。そしてゆっくり少女に近づいた。

「俺はカイン。カインⅡバイゼル。君はなんて名前？」

「……アカネⅡクロウサーです」

「アカネさんか……えっと彼はなんて呼べば？」

「彼はシルバと言います」

「そっか、とにかく目が覚めてよかったよ。彼はともかく君はぜんぜん目覚めなかったから」

二つしかない椅子まで話しながら近づき、一つを対面に置き直し、カインは対面の椅子に座った。

「ま、まあ座ってよ」

アカネはまだ完全には信用はしていないというメッセージ付きの視線をカインに向けながら、対面にある椅子へゆっくり腰をおろした。

どう見ても同年代にしか見えない少女に怯えている自分が、ひどく情けなく思えるカインだった。だが、寝ていても分かる幼くも整った美しい顔立ちの少女に、これでもかと言う位やられてしまった後では、どうしようもないとも納得させた。

「えっと、お互い状況が良く分かっていないと思うんだ。だからさ、まずはそこを埋めていくことにしない？」

朝を迎えて間もない静寂の中で、アカネは宝石のように透き通った目でカインを見る。カインにはその目が心の中まで見ているような気がして、変に勘ぐられたくない気持ちで無心になろうとした。

一瞬のようで、長く感じられたその視線を送るアカネは、目を閉じて深呼吸をし、もう一度カインに視線を向けた。敵対的な視線はそこになかった。

冷静に考えて、カインの言ったことは筋が通っていた。第一、囚われの身なのであれば、この状況はありえない事くらいはアカネにもすぐに理解できた。

「……状況から考えても、あなたは敵では無いようですね。ごめんなさい……私でつきり敵に捕らわれてしまったのかと思って」

アカネは深く頭を下げてカインに謝罪をした。

先ほどまでの攻撃的な表情とは打て変わったの、申し訳なさ一杯

である表情を向けられたカインは、逆にどぎまぎしてしまった。

「いや、いいよ、いいよ。事情は深くは理解してないけど、彼……シルバさんだっけ、彼から少しだけ聞いた話だと誰かに追われていたみたいだしさ、仕方がないんじゃない？」

「シルバと話したんですか？」

「うん。俺が墜落した飛行艇を見に行った時にね。ほとんど話せないままになっちゃったけど、とにかく逃げたがっていたみたいだからさ。それならここに匿おうって思って」

「そう……」

アカネは額に手を当てうずくまった。その仕草にカインはどこか痛いのかと思ったが、

「うう、もういや……私一人だけ勘違いして暴れてたなんて、恥ずかしすぎます！」

どうやら先ほどカインに行った暴挙を悔いている様子である。励まそうとカインは思ったが、アカネの立場からして、暴挙を振るった相手に慰められるのもどうかと考えてしまい、躊躇した。

「い、やあ、もうその話はなかった方向で。みたいな？」

沈黙が二人の間に流れる。

「笑われるから、シルバには言わないでほしい……」

「もちろん言わない、言える訳がない」

女の子に一方的に蹴られて、馬乗りにされたなど情けなくて言えるはずもない。二人は小さな心の傷を共有することで決着をつけることにした。

気を取り直したのか、頭が鮮明になってきたのか、アカネは思い出したかのようにカインに語りかけた。

「ここはケルマディックってさっき言いましたよね？　ということは、たしかここはイズモの管理下にある地域のはず。なんであなたが私たちをここに連れてこれたんですか？」

カインは対面に座り、どぎまぎしながら答える。

「君は気がつかなかったかもしれないけど、墜落した場所は『森』

だったんだ。イズモが管理はしているけど、広すぎて墜落現場までは把握してないと思う。そこを偶然見つけたんだ自分が」

『森』に侵入したという点はあえて伏せておいた。

「そっか。ならあの人たちは、まだ私たちが生きている事を知らないんだわ。逃げ切れるかもしれない」

「あの人たちって、君たちを捕まえてイズモに差し出すとかいう連中のこと？ よく状況が理解できないんだけど」

アカネは視線を一度ベットのほうへ向け、カインに向きなおした。「シルバがどこまであなたに話したかが分からないと、私からは何にも教えられないの。そうしないと、あなたまで巻き込んでしまいます」

アカネは申し訳なさそうに言い、カインもあわてて承諾をした。

「了解了解、それなら無理には聞かないよ。ここは人里はなれた場所だし、自分以外の人間がここにいるなんて誰も思っちゃいないしね。まだ巻き込まれていないと言えるよ。何より事が複雑そうだから、俺が聞いてもきつと意味なんて……」

そこまで話したとき、ベットのほうから突然声がかかった。

「いや、君には聞いてもらいたい」

突然の声に驚いたカインだったが、アカネはその声に反応してすぐにベットへ駆け寄った。

「シルバ！ 目が覚めたの？」

男の突然の覚醒に驚いたが、われに返ってカインもすぐに動いた。「水もってくるよ！ ちょっと待ってっ！」

すぐに水の貯蓄タンクへ向かい、コップに水を入れて男の元へ向かい、それを渡してやった。痛そうにだが、上体をベットの上に起こした男は、すぐには口をつけず、カインの目を見る。

「貴重な水をすまない。感謝する」

男は律儀に礼を述べ、水を口に含む程度飲んだ。

何か話したような表情を浮かべていたアカネだったが、先にカインは状態だけでも確認したかったので、話しかけていた。

「結構派手に落ちたみたいだけど、怪我はどう？ 悪いけど、ここじゃ患部を冷やすことぐらいしか出来なかったんだ」

目を瞑り、体を少しずつ動かしてみたら男は答えた。

「たぶん肋骨を痛めているんだと思う。だが自業自得だ。一般人に危害を加えようとしたんだからな」

「こっちこそ振り落としたいね。暗闇で彼女を抱えているのが見えなかった」

「いや……ん？　そういえばなぜ私が君と話せているのだろうか。うつすらとしか記憶にないが、たしか森で捨て置いてもらうと決断したはずだった」

カインは胸ポケットに入れておいた高純度水素金属を取りだしながら言う。

「返すよ。たぶんあなたは暗くて俺の飛行艇を見れていなかったんだと思うけど、俺の飛行艇は一部水素金属が使われているんだ。飛行艇の飛行性能で一人分、装備している水素金属で二人分。そしてあなたに渡されたこいつで三人分ってわけだ。まあ人三人を乗せるにはかなり狭かったんだけどね」

視線を一瞬アカネに向けたカインは、アカネが大きな瞳でその真意を感じ入ろうとする前に、視線をシルバへ向けなおした。と、言うのも実際はコクピットに二人までしか乗らず、体の小さかったアカネをエンジンのあったハッチ内に押し込んで飛んだという事実があったのだ。しかし先ほどの蹴りを見ているカインはあえて無かった事とした。

「そうだったのか。私は命を救われたというわけだな。それと、暗闇で気がつかなかったが、君は若かったんだな。その若さで飛べるのか？」

「命を救ったただなんて大げさな。それに飛べるといっても水素金属の浮力で補助してもらっている状態だし……」

などと真摯な意見と謙遜を言い合っていると、アカネがそこまでと言わんばかりにシルバの座るベッドへ両手をかけ、顔をカインと

の間に割り込んできた。

「ストップ！ シルバ、悪い癖が出てる。飛行艇の絡む話になるといつも脱線していくんだから。ごめんなさいカインさん、でも確認したいことがいくつかあるから」

「いや、どうぞ」

アカネの只ならぬ剣幕に、カインはその場を大人しく譲り、一歩下がった。

「シルバ、肋骨を痛めたって言ってたけど、現実的に考えてみてどう？ このまま行ける？」

シルバは右手の掌で口元を覆って考えこんだ。

「無理をしなければ。だが私たちは、普通に考えて無理な事をしようとしている」

アカネがその美しい顔に渋い表情を浮かべる。

「つまり厳しいって事ね。でもそれを理由に彼を巻き込むの？」

「これからする事に犠牲の出ない終わりは無い。ここはイズモの管理下だ。現地の人間の助けがいる。彼に事情を話すべきだ」

「それはそうだけど……だからといって子供を巻き込んでいいはずないじゃない」

子供。カインにとってあまり好きな言葉ではなかった。自覚はあるが。

「君だって充分まだ子供だ。私だって子供を卒業した一人の人間に過ぎない。彼らから見たら命知らずなだけの若者に見えているだろうな」

「私には覚悟があるもの！ きつとあなたにだってある。でも私たちの話を聞いて覚悟を決めて協力してくれる人がどれほどいると思う？ 忘れてはいないでしょう。もしそんな人が大勢いたなら、私たちは二人だけでイズモの影響力が強いこの地区を突破しようなんて考えていなかったはずよ！」

「……………」

「……………」

二人の間に気まずい沈黙が流れる。一步引いて聞いていたカインはすこし無然としていた。自分と同じくらいの年頃と思える少女に子供扱いされた事もそうだが、まだ聞かされてもない話なのにも関わらず、覚悟がどうこう言われていることにも腹が立ったのだ。

まるで自分が臆病と言われているみたいだ。

「たしかに君の言うとおり覚悟は必要になるだろう。だが状況が理解出来ていない者に覚悟など求めようも無いのは事実だ」

このタイミングだと言わんばかりに、シルバはカインへと視線を向ける。

意志の強そうな瞳、決断を迫る者の姿がそこにはあった。

横では申しわけなさそうにアカネが俯く。

「聞く必要なんて無いです……私たちが出て行けば」

迫られた、聞か聞かないかの二択、カインは既に答えを選んでいた。臆病ではない。

「別に出ていく必要はないよ。さっき言ったけど、周辺には誰も住んでいないし、俺以外の人間がここにいるなんて誰も思わないから覚悟……なんて言われても良くわかんないけど、相談くらいなら乗るよ。それなら俺は巻き込まれない。でしょ？」

正直、誰かに追われイズモを警戒している人間など、胡散臭い上に危険なことは何となく分かっていた。だが、聞かずにはいられない。

幼さの残る外見と同じく、子供じみた冒険心も枯れてはいない。

冒険心が危機感を上回っていた。

アカネが決意を込めてカインの瞳をのぞく。澄んだ空のような瞳だった。

「わかりました。でも話をした上で、少しだけ私たちを助ける情報をくれるだけでいいの。あなたが巻き込まれる必要は無いんです」

カインは好奇心を抑えながら、頭を縦に振る。

二人のやり取りを聞いたうえで、シルバは言う。

「飛行艇に乗っているんだ。命を賭けるだけの覚悟を既に経験して

いるという人間はそうはいない。彼は信頼に足るよ」

アカネはため息をつく。

「そうやって何時も飛行艇乗り、飛行艇乗りって、いつかそれが致命傷にならないといいけどね」

第一章 肆

立って話をするには時間が掛かりそうという事もあり、動けないシルバもいたので、アカネとカインが向かい合って座っていた椅子を持ち寄っての場となった。

カインはおとぎ話でも聞くかのような心境で、二人は不治の病を告げる医者のような面持ちで挑んだ。

シルバが探るようにゆつくりとした口調で話し始める。

「まず、私たちがどこから来たかだが、アカネも私もイズモの学院機関に籍を置いている。所属は空挺士官学校、私が大学二年で、アカネは高等部に通っていた」

アカネは軽く補足を入れる。

「ちなみに私は高等部の二年。基本はナビゲーターだけど一応飛行艇の操縦も出来ます」

イズモの学院機関、それも士官学校となれば、エリート中のエリートが所属する所だった。カインが申請を出し、門前払いされた飛行士科の学校の遙に上を行っている。それだけでも驚きだったが、意外なことは他にもあった。

「え、じゃあアカネさん俺より年上なんだ。全然そうは見えないや。同年か年下くらいに思ってた」

これから話す重大なことの前の、あまりに突拍子もないカインの言葉、年下という部分に、アカネはすぐに食いついた。アカネは自分の容姿を余り好ましく思っていなかった。幼く見えてしまう部分が特に。

「な、い、いくら幼く見えるからって年下は無いでしょ？ 十六歳なんだから、地域によってはもう立派な大人としてみなされる場合だってあるわけだし……」

「十六なんだ。じゃあ俺と一歳差しかないね。俺は十五だし」

「二歳差です！ 私は今年の誕生日を迎えれば十七歳になります！」

シルバは二人のやり取りを見て思った。
どっちも子供だ。

「アカネ、その話、まだ続くのか？」

「くっ………続きません！」

きょとんとしていたカインは、アカネの頬を膨らませた顔と鋭い視線を受け、思わずシルバへ困惑の表情を向けた。

シルバはそれに軽く首を傾げて答える。

いつものこと、気にするな。

「話を戻すが、学院機関はイズモの本部にある。本部のことは知っているか？」

「詳しくは知らないよ。旧ユーラシア圏のイーストアジア地区にあるって事ぐらいかな、知っているのは」

「そうだ。つまり私たちはイーストアジア地区からここまで来た。

飛行艇を一機強奪してな。話というのは何故私たちが、そういった行動を起こしたかだ」

それは追われて当然だとカインは思った。イズモの飛行艇を強奪など考えられない行為である。

まるで、あの人たちが行なっていた活動みたいだ。

「かなり信じがたい話になる。それも昔話のように古い話した。人類が化石燃料の枯渇で、世界中を巻き込んだ大戦を起こしたことは知っているね」

それは誰でも知っている。過去の人間を蔑み、哀れんだ出来事――

「過去の歴史」

「そうだ。あの時代に水素エネルギーの有用性を説き、実用化に成功させた企業。それがイズモカンパニーだ。枯渇しかかった化石燃料の奪い合いが戦争の火種となり争奪戦となった中、地球上に豊富に存在した海水からエネルギーを得られるようになったのだ。戦争はすぐに終わった」

まるで歴史の授業のおさらいだった。今更幼少期に嫌というほど聞かされた話になんの意味があるのか、カインにはわからなかった。

「それで次は水を奪い合った大海戦があったって言うんでしょ？

この歴史がどうしたのさ。その大海戦で地球上にある三分の二の水、森、そして人が消失した。そして再度、表舞台にイズモが現れるって話だよ。以降、地球の水循環機構である『雲』をイズモが管理し始め、世界から争いは消えて平和になりました。誰でも知っている歴史じゃないか」

訝しげに問いかけたカインに対し、答えたのはいまだ不満を表情に残すアカネだった。

「その誰でも知っている歴史、おかしいって思いませんか？ 化石燃料の枯渇で起きた戦争は、国というシステムが生み出した貧富の差が根幹にあって、豊かさを一部の国が維持しようとした結果でした。次の大海戦も同じ。化石燃料の戦争より、さらに進化した兵器と潤沢にあった水素での戦争。史実通り多くの人が犠牲になり、森林は焼けてしまっています。戦争に使われた水素燃料の影響で海も大きく減りました。間違いないです。でも、その三つの減少したモノの中で、明らかに減少しすぎのモノがある」

明らかに減少しすぎなモノ。それが彼らの逃走劇と繋がっているようには、カインには到底思えなかった。第一減りすぎといえば、全てが減りすぎに思えた。戦争が無い世界で生まれたカインにとって、三つの対象物の減少は異常以外の何物でもない。

「分からないよ。人だって昔はもっと大勢いたって言うし、森も身近にあったて聞いているよ。ここケルマディックだって昔は海の底だったらしいしね」

「分かりませんか？ いい線いっているのに。答えは海です」

答えは海。見たことも無いその単語が意味する光景。カインは海を想像することも出来なかった。ましてや海の減少が異常であることなど考え至るはずもない。

「君も本当の海の姿を見れば、どれだけ海が異常な減少をしたのかが分かる」

シルバが、海を想像も出来ないでいるカインに助け舟を出す。

「海ってあるんですか？」

「ある。現在、海と呼ばれる水は世界のほとんどに繋がっている、海溝の底を流れている。言うなれば地球の毛細血管のような形で。だからほとんどの人は海を知らない。でも海はある。ここから一番近い海だとツバル地区だな、機会があれば見たほうがいい。その広さと深さを知れば、見識が広がる」

見たい。是が非でも見たい。カインは心の底からそう思った。カインの冒険心が生み出す白地図に、絶対にいつか行く場所として海が刻まれた。

そんな姿を見たアカネは、とてもやりきれない気持ちだった。

「分かりますか？ 海を見たことが無い。そんな人間が世界のほとんどなんです。人類は一度犯した大戦の過ちをもう一度犯しました。でも、それでも海が無くなるなんてありえないんです。確かに大海戦は大量の水素燃料を消費して行なわれたけど、海は化石燃料とは比べ物にならない質と量を誇ります。それだけで遥太古の時代から存在した海は、無くなったりはしませんよ」

まだカインは、この話しが彼らの暴挙に繋がるとは思えないでいた。話しが壮大すぎるのだ。

「その無くならないはずの海と、実際は消えてしまった事実の、一体どこに君たちの行動との関連性があるんだよ。全然分からないや」

一瞬であり、長い沈黙が場を支配している。一度アカネは天井へ視線をやり、次にしっかりとカインの目を見つめた。

「つまり、海は消えたのではなく、奪われたんです」

「奪われた？」

その言葉に何も実感は得られなかった。奪われる。カインにとってこの単語が意味するのは、せいぜい金品が奪われるだとか、食料が奪われるなどという、身の回りにある危険を表している程度である。それが事もあるうか海という漠然とした存在の、さらに見たことのない広大な存在を対象に言葉として使われても、全く笑えない冗談にしか聞こえなかった。

「奪われたって海を？ 一体どうやって。そりゃあ見たことも無いんだけど、でもケルマディックをすっぽり覆って、さらに空まであったって聞いている海を、奪うなんて出来るものなの？」

「そう、海とはあまりに大量の水です。普通に考えれば世界から海を奪うことなんて出来ませんよ。でも、その水を圧縮する技術が開発された」

カインはすぐにピンときた。

「あ！ 水素金属か！」

アカネは正解として頷く。

「つまり広大な海を元素に分解して、原子レベルで圧縮をかけることによって海は水素金属になってしまったの」

信じられない話であった。カインからしたら、どこが疑問であるかと問われても、答えられないほど疑問しかない。

「で、でも待ってよ。確かに水素金属を精製するには大量の水から水素を取り出して、さらに大量の水素を圧縮しないといけないから、海を奪うって表現も出来くはないけどさ。昔は世界中に海が広がっていたんだよね？ だったらその水素金属の量だって尋常じゃないんじゃないの？ そんな物がどこにあるのさ」

三人の間に沈黙が流れる。アカネとシルバはお互いに視線を合わせ、頷く。どうやらカインの質問こそ、二人が話すべき理由のようであった。

疑問に答えたのはシルバだった。

「大量の水素金属がどこへ消えたのか。カイン、君の疑問は正しく射ているよ。その答えこそ、私たちが行動を起こした決定打だ。さっきイズモ本部の話をしたね？」

「ええ、イーストアジア地区にあるって」

「実はその答えは正確では無いんだ。正確には、今の時代ではイーストアジア地区にあるという表現が概ね正しい」

カインは水素金属の話とイズモ本部の話になんの関連性があるのかわからず、少なからず混乱していた。

「今の時代はって、本部は時代によって所在地が変わるとでも？
それと水素金属に何の関連が？」

ゆっくりとシルバは言う。

「関係は大ありだよカイン。言葉通りなんだ。イズモ本部は特定の場所に所在地を設けない。常に移動を繰り返しているんだよ。イズモ本部の大きさを知っているかい？」

「ええ、企業を中心に流通、経済、生活と、その他全てを兼ね備えている場所だって聞いている。あまりにも巨大な町だとも。なんでも大戦前の繁栄を極めた都市の面影がある唯一の場所だって……」

カインの回答を補足するようにアカネも答える。

「それだけじゃない。海も、森もあって、人だって大勢住んでいます。空には常に『雲』があって、雨だって降る。雨って知っていますか？」

二人の顔を交互に見ながらカインは答える。

「雨くらい知ってるよ。ケルマディックだって年に数回、大地に水分を含ませる為にイズモが雨を降らすからね。空から大量の巨大飛行船団が来て水を撒く姿は壮観だよ！ でもそうか、雨の降る町って凄いいね。そんなに巨大なのかイズモ本部は」

陽気に答えるカイン。アカネとシルバはその明るい声を聞くだけで使命感をより強くする。

「……なんとなくでも、イズモ本部の大きさを分かってもらえたかな。ではカイン、そのあまりに巨大なコミュニケーションをどうやって移動させる？ どれだけの労力が必要だと思う？ そのメリットは？」

矢継ぎ早の質問。カインはわからない。答えられず沈黙する。

「答えられないだろう。その通りなんだ。答えなんてあるはずが無いんだよ。移動させるにしてもきつと一世紀以上掛かるであろうし、その労力など今の人口数ではまかなえるはずもない。それでもイズモ本部は移動する」

分からない。何も分からない。

「考えるんだカイン。莫大な量の水素から生成された大量の水素金属。水素金属の最も優れた特徴は浮遊金属という事だろう？」

ただ、聞くだけだった。

「いいか、カイン。イズモ本部はね、大地には無いんだよ」

「……は？ え？」

カインは話すシルバの顔を見て、アカネを見る。アカネはその視線に頷いて答える。

「海を使い切ってまで生成された、圧倒的な量の水素金属。その量であれば、凄まじい質量を室内超伝導の浮力で支えられます。それこそ巨大な町だってね。カイン、イズモ本部は……空にあります」
完全に下手な冗談である。今時低学年の子供でさえ信じない話だった。

海を奪った技術。水素金属。

空に浮かぶ町。イズモ本部。

カインの少ない知識からして、確かに話しほどの水素金属があれば、相当巨大なものを空に浮かすことが出来ると考えることができた。でもそれはあくまでやろうと思えばの話であって、実際は出来るはずは無いと考えるしかなく、存在しているとは思えなかった。

そして、海を奪ったという話。莫大な量を誇る水素金属を有して、出来るはずもない机上の空論ともいえる事をしているという企業。

これら繋がりを考えると、カインの脳内には一つの結論が生まれた。「そんなことあるわけ……でも、もし本当だとしたらさ、さっき言った海を奪ったって話、イズモが実行したってなるんじゃない……」

二人は答えない。その沈黙が答えだと言わんばかりに。

ばかな、世界を救った超巨大企業が海を奪うなんてあるはずが無い。戦争を二度も終結させた存在が、この荒廃した世界を生み出したなんて。ありえない。そう思った。

「嘘だ、そんな話が大きすぎる！ イズモが一体なんの為にそんなことするっていうんだ！」

カインの反応を見た二人は、無理も無い、そう思った。現代社会

において、イズモこそ社会に安定と秩序をもたらす象徴なのだ。幼い頃からそう教えこまれている人間には信じがたいことだった。

「カイン、嘘ではないんだ。君はイズモ本部に行った子供で、帰ってきたのを見たことがあるか？」

ただただ無心で答えるしかないカインは、どうにも混乱を抑えられず、上の空で答えるしかなかった。

「な、いよ。それが？」

シルバは、カインが落ち着けるよあえてゆっくりと、優しい口調で話す。

「一度本部に行ったらね。成人するまで外には出れないんだ。時間をかけてゆっくり教育されていく。イズモ本部が空に浮く『理由』をね」

「理由？」

「そうだ、ここで話しても仕方が無い、どうしようもなく真実味のある『理由』だ。イズモを信じている人間が聞かない方が良いほどにね」

真実、あの人たちが常に口にしていた言葉だった。カインにとっての否定の対象。それが肯定に変わってしまうような気がした。

「だから私たちは既に例外となっている。特にアカネは未成年だからな、追われている理由の一つがそれだ。そしてイズモが一体何を目的にそんなことをするのか。君の疑問もそこに行き着くだろう。私たちも同じだった。つまり、私たちが行いたい事とは真実の解明なんだ。イズモが言う『理由』ではない、本当の意味においての『理由』を知りたい。だからイズモは私たちを追う」

理由、海を奪って、大地を荒廃させた原因。理解も共感も出来るはずのない事実だった。イズモは常に正しい。それが常識なのだ。否定をすれば、即ち今まで構築してきたアイデンティティーの崩壊を意味する。

無言で俯くカインを見て、優しくアカネが声をかける。

「信じられないよね？ だから無理に信じなくてもいいんです。た

だ、私たちはその信じなくてもいい話が理由で追われていると思う
てください。あなたの現実を無理に曲げないで」

その言葉はどこまでも優しかった。信じなくてもいい真実。可能性の一つとして捉える考え方。たとえ受け入れられない話でも、可能性としてだけなら、カインは考えることが出来た。

「そうか……もしそれが本当なのだとしたら、確かに行動を起こすのに覚悟が必要だね。イズモを敵に回すなんて、考えられないものな」

あの人たちのしていた事も可能性としてなら考えられる。今更ながらカインはそう思った。決して肯定はしたくないし、あの人たちの行動がカインをずっと苦しめた事実は消えない。でも、それでもきつと、あの人たちにもシルバやアカネのような覚悟があったのだ。そう思った。

「うん、話はわかったよ。すぐに信じることなんて出来やしないけどさ、可能性として頭に留めとく」

シルバは深く、本当に深く頭を下げた。

「すまない。こんな話を聞かしてしまって。だからアカネがさっき言った通り、物理的な協力はしてもらわなくていい。君が巻き込まれる必要は全く無い。少しでも情報を頂きたいんだ」

アカネもシルバとは違う方法で、しっかりとカインの目を見つめる形で、謝罪と協力を仰いだ。

「お願いします。巻き込まないほうがいいなんて言ってたけど、翼を失った今、少しでも情報が欲しい。汚いと思うけど、話を聞いてください」

カインは逆に困った。誰かにここまで頼られたことなど無かったから。

「うん。俺の知っている情報ならいくらでも教える。それに、あまり力にはなれないかもしれないけど、協力するよ。今ある情報の提供だけじゃなくて、欲しい情報があったら仕入れてくるくらい出来ると思う。正直言えば全然理解できないことの方が多いと思うし、

使える情報も無いかもしれないけど、アカネさんの言ってくれた、信じなくてもいいってので楽になれた気がする。気負い無く動けそうだしさ」

カインはアカネをしつかり見据えて言葉を伝えた。思った通りに。「そう、ありがとう!」

アカネの笑顔は、目を瞑って寝ている表情より遥かに綺麗で、悲壮な表情より圧倒的に強かった。カインは思わず見とれてしまった。「ん? どうしたんですか?」

ふと我に返り、見とれてしまったこと恥ずかしく思い、顔が赤くならないように、意味も撒く顔を両手で叩いた。

「なんでもない! なんかやる気が出てきただけ! アカネさんもシルバさんも、聞きたいこと、やってほしいことがあるなら言うてよ! 意見でも何でもいいからさ」

アカネはカインの不可思議な行動に首をひねり、シルバは声も無く笑った。

「では一つ意見を言おう。カイン。情報提供してもらうんだ。さん付けはいらない」

「……あー。え?」

「そうですよ! 呼び捨てでかまいません」

少し考えて、頷きカインは答える。妙に恥ずかしく、そしてうれしかった。

「わかった、シルバ、アカネ」

三人は顔を見合って微笑んだ。シルバは今後の方向性に希望を見出し、アカネは本部で誰も協力をしてくれなかった中、新たに仲間が出来たことを心から喜んだ。カインは規則正しい日常の歯車から外れてしまった現実を、少しだけ不安に思いつつも、喜んだ。

多様な面持ちの三人が、ではどういった情報をと、具体的な話し合いを始めようとした時、最初の最も重要な提案を出したのは、空腹を示すアカネのお腹の音だった。

第一章 伍

形だけの憤懣な表情を浮かべて先を歩くアカネを見ながら、シルバとカインはキャラバン隊が管理する露天商の喧騒をカモフラージュに、逃走と情報提供についての話し合いをしていた。

「で？ 具体的には何を知りたいのさ」

「そうだな、なるべく早くここを去るべきだと考えたと、一番知りたいのは移動手段の有無だな」

「移動手段か。それだと通常は航空機を利用すると思うよ。ケルマディックでは陸路の移動は、ほぼ無理だしね。起伏が激しすぎるから」

カインの答えに対し、シルバは顔を左右に振る。

「一般の航空機ではダメだ。管理しているのはイズモだからな。記録も残ってしまうし、追跡者もそんなに甘いものではない」

「難しいね。それだとあとは個人所有の移動機械に頼るしかないか。このキャラバン隊はそれぞれが色々な地域から来てるからね。移動手段はいっぱいあるよ。ただ、飛行艇に飛行機、飛行船なんかもあるけど、どれも一応簡単な積荷検査がある。密航を交渉することになると思うけど、密航ともなると普通は避けられるかな。中にはお金次第で請負うって話も聞いたことはあるけど」

「金か、厳しいな。手持ちはあまり無いんだ。金に換えられそうな物も、墜落した飛行艇にほとんど積んでいたから、有るのは水素金属くらいか……」

水素金属、おそらく例の高純度水素金属の事だろうとカインは考える。たしかにキャラバンの人間なら水素金属に食いつくことだろう。価値の変動が無い水素金属なら最高の取引材料となるし、例の金属は特殊だ。通常の流通にはまず流れない代物。誰だって興味くらはある。だが、

「あの水素金属のことを言っているなら止めた方がいいよ。特殊す

ぎるから、取引した相手が入手経路を調べられてしまう可能性があるんじゃない？」

あえてカインは否定をした。シルバも同意をする。

「確かに。あれは特殊なものだ。売ったり買ったりなどが出来る代物ではない。それに持っていれば役に立つこともあるだろう。情報提供だけで巻き込まないと約束したから、あまり深くは話せないが、あれは用途によってはとても危険な代物なんだ」

きつとイズモ本部からの逃走に関する事なのだろう。追求すべきではない。配慮を感謝すべき、そう思った。

「それなら益々大変じゃないか。絶対に売るべきじゃない。でもお金が無いんじゃ、それこそ本当に陸路をいくなんて選択肢しか無くなるんだよね。死に行くようなものだよそれ。俺の飛行艇を少し改造して三人乗りにしてもいいけど、それでも燃料の問題があるからあまり遠くへは行けないし、ここを離れたら情報提供しか役に立ってない俺なんて、足手まとい以外の何者でもなくなるからね」

自嘲ぎみのカインに対し、シルバは優しく笑いかける。

「そんなことは無い。今朝方話しをしたが、君の歳で飛行艇を持って、実際に空を飛んでいる人間などそう多くはない。君ならイズモに来ればあつという間に若手のエース候補になるだろう。進学を考えたことは？」

嫌な話題が二日連続で来たことに、少しかけ気が減入った。しかしカインは、シルバに話す程度ならまあいい、そうも思えた。

「はは、落ちたんだよね俺、それも書類で。一応進学の意思はあったんだけどさ。だからここで働いているって訳。正規の飛行士にはなれなくても、俺には飛行艇があるからね。維持費や燃料費を稼がないといけないから」

笑いながら話したカインはシルバの顔を見て少し驚いた。シルバは啞然としていた。

「馬鹿な……その歳で飛行経験のある人間を落とすなんてありえない。しかも書類で落ちたの？」

経験者だと書いたのか？」

「か、書いたけど……」

シルバは首を傾げる。

「どういうことだろう。書類にも書いてあるのなら、よほどの嘘つきか、有望な人材の二択になるから、一応見ておくという判断にはなるはずだが」

少し気まづくなったカインは、慌てるようにこの話題を終わらせようとした。

理由。あの人たちの活動。カインにはこの話をする勇氣はなかった。

「もういいんだって！ それにほら、今朝の話だとむしろ行かなくて正解じゃないか。何も知らないでいて、空を飛ぶことばかり考えるよりさ、何かしながらでも、色々考えながら飛ぶ方が俺は好きだよ。それより移動手段の話！ 全然解決してないよ！」

一瞬の沈黙、露天の喧騒だけが二人の耳にこだまする。

「進学する必要など何もなさそうだな。既に飛行士だよ君は」

その言葉に、ちくりと心が痛んだ。本当は学びたかった。飛行士として飛ぶことをずっと考えていたかった。そして、あの人たちの話を、勇氣があればしたかった。今朝のイズモについての話を聞いた今なら、シルバは理解をしてくれるかもしれない。蔑み、哀れむ事をしないでいてくれるかもしれない。そう思った。

ふと我に返って気がつく、シルバがカインの様子を伺っていた。どうやら無意識のうちに立ち止まって変な表情をしていたようだ。

「どうした？ 急に押し黙って、お姫様のように空腹に耐えかねて

――」

我に返ったカインは、自分が考えていた事を押し殺して、なんとか心の発露を表してしまったのであろう表情について、誤魔化そうと口を開いた。

だが、声を発する前に、立ち止まる二人の前で腰に両腕を当て、形だけではすまない憤懣の表情を浮かべているアカネが、先に言葉を発していた。

「シルバ！ 別に私は空腹に耐えかねていたわけじゃないの！ 何よ歩くのが遅いから心配になって戻って見たら、人の揚げ足を取って、さらに軸足まで払うような話をしているし。女の子に配慮が足りない人はキライ！」

かなりの剣幕だった。シルバはやれやれと声にならない声を発し、カインは二人の顔を交互に見ていた。アカネと目が合う。

「カイン、誤解しないでくださいね？ 私はそんなに食欲旺盛って訳じゃないですから。ただ、イズモを出て何も食べていなかったから、油断して……はあ」

今度は一転、アカネは赤面し、しょげた。

「誰だってお腹が空けば、ね。でも、そう言えば……ははは」

「わ、笑いました？」

アカネの言動に思うことがあり、カインはつい口に出して笑ってしまった。アカネは悲壮とも驚愕とも言える顔をカインに向ける。

「違う、違う！ ごめん、その、別にお腹の音が可笑しくって笑った訳じゃなくて、たださ、俺とシルバを相手にするのだと、口調が違うなーって思ってた。それがなんか可笑しくって」

アカネは百面相のように、今度は困惑顔のまま停止している。代わりに話したのはシルバだった。

「はっはっは、カインは人が良く見えているな。アカネは幼い頃から一人で居ることが多くてな、誰かと仲良くなるのが苦手なんだ」

「苦手なんかじゃない！」

怒涛の剣幕でシルバに食って掛かるアカネであったが、シルバは涼しい顔でそれをいなす。

「その口調が慣れない人間に出来ていないから、カインに指摘されるのだろうか？」

「むう……」

アカネは唇を尖がらせた状態で停止する。

「これだから。学院でも浮いているんだ、アカネは」

苦笑いのシルバと、苦虫を噛んだような表情のアカネ。

「話を逸らしたいだけでしょ！ シルバに配慮が無いって話したのに。それがなんで私の学院生活に――」

「カイン、アカネと仲良くしてやってくれ」

シルバは抗議の声に耳を傾けずカインに語りかける。

カインとアカネの目が合う。カインは引き攣ったような笑顔に向けた。

「そ、そんな同情めいた関係なら要りませんっ！」

耳を真っ赤にして、アカネは二人を置き去りにどンドン歩き出していつてしまった。

そんな後ろ姿を眺めながら、シルバはさらにカインに語りかける。「家庭の事情が原因なんだ。アカネの周囲は人間関係が特殊だね。

私は事情があって幼い頃からアカネと接してきた。だから彼女の他人行儀な口調の対象外なんだ。今は無理かもしれないが、時間が経って、アカネが家族について話した時は、カイン、君も対象外になってあげてほしい。お願いすることではないんだが、アカネはああいう性格だからな」

シルバの愛情のこもった願い入れを聞き、ふと朝方にアカネが目覚めた時のことを思い出した。目が覚めて、アカネはすぐにシルバを探していた。二人の関係、決して切れない絆なのだろう。カインはそう思った。

「誰だって心に壁くらいあるよ。でも案外、アカネの壁って高くって薄い気がする。感情が高ぶると、本質が見えちゃっているような気がするしね」

微笑みながら答えるカインに、同じように微笑んでシルバが返す。「そうだな。きっと慣れてないだけで、アカネも歳が近いカインの存在をうれしく思っているんだよ。だから本音を言いそうになる」

人ごみが徐々が増え、先に進むアカネが段々見えなくなるので、二人は話を切り上げ、歩みを速める。少し目を凝らすと、初めて来た場所で進む方向が分からず、仕方が無いという表情で足を止め、こちらを睨みつけるアカネの姿が確認できた。

二人は笑う。

三人はキャラバン隊専用の食堂で朝食をとった。周囲は相変わらずの喧騒に包まれ、それぞれが個々の話に没頭している為、誰が何を話しているのかは、ある意味密閉された個室で話すより聞き取れない状況だった。

各々の食事を三人が座れる丸テーブルまで運び、食事を取りながら話は続いた。

「結局、移動手段はあるにはあるのだけれど、それには少なからずお金がいる。そういうことでよろしいですか？」

腹の虫の件を気にしているのか、決して早くないペースで、むしろ必要以上に遅く食事を口に運ぶアカネ。そして必要以上の他人行儀な言葉使いである。

「だね。結論はそうなると思う」

カインは口に物を入れながらも答えを返す。

「ならば考える方向を変えねばならないな。移動手段をどうするかの前に、資金をどう手に入れるかという話だ」

傷が痛むのか、シルバはあまり食べていない。

「そうですね。何か物を売ることが出来ればいいのだけれど、今は何も持っていない状態だし、別の手段を考えるしかないかも……です。すね。」

「働くってこと？　ここケルマディックで？」

アカネは少しだけ気分が沈むのを感じる。

「時間はあまりないですけど、方法がそれしか無いのであれば……」
「あるいは、不法な手段を用いるかだ」

シルバが坦々と話し、アカネは啞然とする。

「不法ってシルバ何を……」

「言葉の通りだよアカネ。善悪の区別を考えないのであれば、すぐにでもここを発つことは可能だ。金品の強奪だって出来るし、極端な話飛行艇をまた盗めばいい」

すぐに否定の表情と声でアカネは反論した。

「だめよ！ 捕まりでもしたら、終わりじゃない。第一出来るわけがない！ 飛行艇を盗んだといっても、私たちはイズモ所属の飛行士訓練生よ。支給機なんだから完全に盗んだわけじゃないわ！」

「分類すれば同じことだ。それに、正当な手段でお金を稼いだとして、移動方法は密航しかないんだ。そうだったろうカイン？」

「あ、ああそうだね。」

カインはただ相槌を入れる。

「密航も立派な不法的手段だと思うが？ アカネ」

「それはそうだけど、でも誰にも迷惑は掛けたくない！ 私たちに時間が無いのはわかっていているつもり。でもそれを理由に突き進んで、誰かを傷つけて、きっと私は大事なところで頑張れなくなる……」

最後は力なく言葉を発するアカネに対し、ただ見つめるシルバ。

カインはなんだか居た堪れなくなってしまった。

「俺が口出することじゃないけどさ、アカネの言うこと、正しいと思うよ。そりゃシルバの言いたいことは、部外者の俺でも分かるけどさ。急を有する事態が起きた時にさ、アカネが手段を選ばず動けるような人間だったら、そもそもイズモの信じがたい事実を知っても、きつと動かないんじゃないかな。内容は知らないけど、イズモの言う、どうしようもなく真実味のある『理由』を、戦争だったんだから仕方ないって考えると思う」

シルバは二人の言葉を聴き、軽くため息を出す。やはり子供だ。そう思い、でも笑う。

「ならばより強固な覚悟が必要になる。まったく、とんでもなく困難な選択だ」

アカネはカインの顔を見て、小さく言った。

「カイン、ありがと……」

カインは謎のむず痒さを覚え、力なく微笑み返した。
ただシルバはあくまで冷静である。

「しかしだ、そうなるのと益々事態は厄介なことになる。最低限可能にしたい理想を上げれば、正当な方法を用い、資金を確保し、移動に用いる翼を手に入れると言った所か。こんな理想を叶えるうまい話をカイン、君は知らないかな？　もし知っているのであれば、君は情報提供をしただけと言うには、あまりに憚られる。最高の協力者になるだろう」

三人は沈黙する。

そんな話があるはずも無い。もし知っていれば、シルバとアカネに出会う遥か前に、自らが手段を行使している。カインの本音だった。

第一章 陸

決定的な解決策を得る事無く、食事を終えた三人は、持ち寄る情報では不足していることを悟り、情報収集へ行動指標を切り替えることにした。

食堂を後にし、向かった先は職業斡旋所。ケルマディックで働けなくなった者、事情により所属のキャラバン隊を脱退した者などが利用する。そんな場所であった。もちろんカインたちの目的は仕事の斡旋を受ける為ではない。あくまでも、移動手段の確保が目的である。

「しかし職業斡旋所で本当に、移動手段の情報を得られるのだろうか？」

斡旋所へ向かう途中、シルバはつい疑問を口にした。

「うん、下手に移動手段を聞きまわるよりはいいと思うんだ。だってキャラバンの基本的な仕事は他地区からの物資を買い付け、売り捌くことだし。つまり仕事内容には、この地区からの移動が条件に必ず含まれてくるからさ。もしかしたらイズモの検査対象外の、簡易的な仕事があるかもしれない。そう思ってたさ」

カインの回答に、アカネは感心の表情を隠さない。

「へえ、確かに仕事としての移動なら、案外カモフラージュになるかもしれませんね。たとえ検査があっても、仕事の許可が下りていれば、きつと移動できますよね？ 最終的に記録を調べられても、最初は彼らも通常の移動ルートから調べるだろうし、私たちの存在の発覚が遅れることは確かでしょう。とてもいい案だと私は思います」

かゆくも無い頭の後ろをかきながら、カインは二人を先導するよう歩いた。

職業斡旋所は、あくまで通称であり、本来はキャラバンを統括する施設である。ケルマディック側との交渉や、各地区からやってく

るキャラバン隊同士の衝突などを仲介するなど、役所的場所でもあった。人の出入りも激しく、食堂ほどの喧騒は無いまでも、人口密度的には何倍もあった。

その人通りの多さを利用しつつ、三人は職業斡旋所へ入ってゆく。食堂とは違い、割としっかりとしたその建物は、カインの自宅同様の、茶色く薄汚れてはいるが乳白色で、十倍はあろうかと思われる大きさの、ドーム状の建築物であった。三階構造であり、まるで何かの乗り物が出入りする、ドックの入り口をそのまま活用したような表玄関が存在する。そこから中に入ると、おそらく後付けと思われる大きな窓から光が取り込まれていた。一階の空間には、どこか重厚な空気があり、人は大勢いるが、あまり口数は多くない。三人はまっすぐ突き進み、正面にある受付へ職業斡旋の旨を伝え、二階へ上がる許可を貰った。

二階のフロアは、半分が職業斡旋所となっている。求人方法は多様で、各種掲示板に張り紙をするという古めかしい方法もあれば、電子掲示板のディスプレイを活用し、その場で登録をするということも出来た。また、採用者側が直接呼び込みをしている場合もある。一階の受付に流れていた、重厚な空気とは打って変わって、忙しく人々の声が行き来していた。

眼前に広がる光景を物珍しく眺めていたアカネは、思わず声を漏らす。

「うわー大勢いますね。あの掲示板にあるのが求人なんですか？

あの電子掲示板は？ あの人たちは何を？」

カインはそんなアカネの興味を軽く流す。別に悪気が合っている行動ではない。ただ、アカネに対するシルバの対応を少しだけ真似てみたのだ。

「まあ説明より、とりあえず回って見ようよ。条件に見合う仕事を探さなくちゃ」

シルバも確信犯的に微笑み、右に倣う。

「そうだな、手分けして見て回ろう」

興味津々のアカネを他所に、シルバとカインは互いに別々の求人案内を見始めた。

「ちょっと、私も見るって！」

アカネは慌てて二人の後を追った。横目に二人は微笑む。アカネは少しだけ天然な部分がある。カインはそう思った。

しばらく三人は辺りを見て回った。カインは張り紙を一つひとつ注意深く見て行き、シルバは電子掲示板を操作して検索をする。アカネはそのどちらとも付かず、求人呼び込みに四苦八苦を繰り返していた。

しばらくして、互いに情報を得た三人は合流し、二階の隅に設けられている、簡易休憩所に集合した。共に浮かない表情を突き合わせていたので、状況の芳しく無さが、すぐに伝わる。

最初に口を開いたのは求人書類を幾つか抱えているアカネで、「どうでした？ 何か移動手段になりそうな仕事はありましたか？

私の方は正直あまり良い話は無いです」

申しわけなさそうに俯く。シルバは軽く微笑む。

「口頭での情報収集をしようとしていたのは見ていたよ。アカネにしてはめずらしいが、なにサボっていたわけではないのだ、気に病むな。私の方もあまり芳しい話は無かった。強いて上げるのであれば、水素産業に関わる仕事は避けて探したのだがな、これが実に少ない。精々、食料の買い付けに行くというものくらいだったな」

両手を広げ、半ば諦めに近い仕草をしてみせる。カインの表情も浮かない。

「みんな似たようなもんか。俺の方は仕事のほかに、条件なんかも見ただけどさ、まず男女二人同時に募集してる仕事があり無いやね。シルバの言った食料関係みたいな、移動の条件ありつてのもあったけど、ほとんどは見習いとして、しばらく留守中の商店管理をするって内容だったよ」

三人は設けられていたベンチに横一列で座り、沈黙する。

「やはり、密航しかないか……」

「シルバ、それは！」

「まってよ、俺もう少し探すからさ」

同時に三人はため息をした。

あそこまで深い話を聞いたカインとしては、どうしても有力な情報二人に伝えてあげたかった。二人は表情に出さないが、森でのシルバが見せた態度を考えれば、決して時間に余裕があるわけではないのだ。ましてや相手はあのイズモである。

ここでただ座っていても、事態は何も解決しない。分かっているが、動き出すことも出来ない。三人は誰が喋り出すことも無く、ただ、新たな案は無いのか模索を続けた。

この沈黙を破ったのは、一旦自宅へ戻って別の案を考えようと提案するつもりであったカインではなく、もう一度、内容を絞って求人を探すことを考えていたアカネでもなく、最終手段も視野に入れておかねばいけないと判断しかけていたシルバでもなかった。

「あつれーカインじゃん！ 何してのさこんな時間に、こんな場所で。ははっ！ さては仕事クビになったなー。やっぱりな、あんたじゃさ、あんな仕事無理だと思ってたんだ。半年だろ？ 根性ねーなあ」

三人の座るベンチの前で、両手を腰に当てながら喋るその人物は、短めの黒髪を後ろで結わっただけの短いポニーテールと、凛々しくも美しい顔立ちが特徴的であった。格好はなぜか全身を覆うように薄汚れた布を巻きつけている、世を忍ぶような格好だった。背にたれるフードを被ればさながら魔法使いのような出で立ちなので、いかにも怪しい。その反面、耳や首周りに木や石で作られたアクセサリーを控えめにも着用しているので、ことさら怪しかった。

三人のうち、アカネはどこと無く気品がある男性だと思ひ。シルバは活発そうな女性だと思ひ。カインは良く知るその人物に対し、露骨に嫌な顔をする。沈痛な空気に場違いなテンションの声。

「なんだよ、ただでさえ辛気臭い顔してんのに、さらに磨きをかけようってのか？ そんな怒るなって、仕事なんていくらでもあるだ

ろ。なんだったらうちの仕事やる？」

「勘違いだよ！ 辞めてないし、根性なし呼ばわりされる覚えはないね。ちなみに辛気臭い顔ってのは否定しないよ。お前が俺の目の前に居るからな！ それになんだその格好、放浪者のつもり？」

カインの言葉を笑いながら聞き流し、今度は置いてけぼりな二人に視線を向ける。

「それで？ いつもの冗談はここまでにしてさ、そちらの二人は誰かな。カインがあたし以外と連るんでるのなんか珍しいじゃなか」

カインは思わずベンチから立ち上がる。

「お前と連るんでないし！ そして、二人の素性を聞く振りをして、さも俺が知り合いの少ないかのような方向に話を持っていくな！」

カインを無視。自己紹介を始めた。

「自分はレンカアカミネ、レンって呼んでよ」

レンはおもむろに右手を差し出す。シルバは若干困惑しながらも、握手で答える。体格的にはアカネと同じぐらいの身長で、立ち上がると見下ろす形となった。

「私はシルバと呼んでくれ、こちらの女性はアカネ。昨日ケルマディックに着いた流れ者同士だ」

「ど、どうもアカネと言います……」

レンは二人に顔を近づけて、じっくり見回す。

「へー今時ね！ めっずらしいんだー。なんでまたケルマディックなのさ。いきなりこんな職業幹旋所へ来る辺り、商売人ってわけじゃないんだろ？ なんで、ねえなんで？」

困惑する二人、たまらずカインが間に割り込む。

「もう！ いいだろそんな事！ 何か用でもあるのかよ。無いんだったら俺たちもう行くぞ。忙しいんだ」

レンに関わると真面目な話などほぼ不可能。それが今までの経験から来る結論である。適当にあしらってこの場を去るべき、カインは冷静に判断した。

レンはカインに対し、わざとらしく驚きの表情を向ける。

「ほー仕事サボってる奴にしては偉そうなセリフだな。何か事情ありかい？ お姉さんに相談してみな」

「同年だ！」

レンは屈託なく笑う。

カインは冷静さを装っていたが、この場を去るという案がすぐに消えてしまった。レンのふざけた態度を毎度のことだと理解しながらも、つい感情的に反応してしまう。反応した時点で、優位に立たれてしまう事を知っているのに。

だが、斜め前で座るアカネの口走った一言が、小馬鹿にされる立場を逆転させた。

「じよ、女性だったんですね……」

突然の発言にアカネ以外の三人が思わず啞然とする。

「……アカネそれは無礼だ」

「……ぶふっ！ よく言った！」

「……えーまじ？」

片手で目を覆うシルバ、笑いが止まらないカイン、呆然とするレン。

三人の反応を見て、アカネはいかに自分が失礼な事を口走ったかを理解した。

「す、すすす、すみませんっ！ 私なんて事を！ いや、ちょっとかっこいいなーって思っただけで。違う違う！ き、綺麗だなと……」

混乱しながら、言い訳をするアカネに対し、レンはあえて得意顔で肯定をした。

「まあ、あたしもキャラバン隊の中で一番の男前、腕っ節と言われているくらいだからな！」

「それ、皮肉だよレン……」

レンはすまし顔でカインに微笑む。

「腕を上げたな、カイン。中々切れのある返しだったよ。もう教えることは何も無い」

「師匠ヅラかよ！　そして何の腕前の事だよ！　だいたい教えなんて……はあ、いいやもう。シルバ、アカネ行こう。キリが無いよ」

その声で、シルバはカインの後ろ側まで移動する。

「そうだな、やはり一度戻って考えをまとめてみるか。すまないなカイン。手間を取らせるが、また自宅を貸して欲しい」

「そりゃ全然いいよ。俺もそう提案するつもりだったんだ。シルバ、どこか戻る前に行きたい所は？」

シルバは一瞬考え答える。

「そうだな、出来れば飛行機械の離着陸場を見ておきたい。最悪の場合もあるんでな」

最後の部分は小声であった。アカネに聞こえないように。

当のアカネは、レンに対して執拗に頭を下げていた。近くに居るのに、こちらの話など聞いてもいない。レンは調子に乗って落ち込んでいる振りをしている。カインにはわかる。

「本当にごめんなさい……」

「いや、謝ってくれるな。誤ってと掛けて二倍へこむ」

「ほっといていいよアカネ、行こう」

カインが肩を落とすアカネに声をかける。しかし反応したのはレンだった。

「待って。別に用も無く話しかけたわけじゃない。ちょっと聞きたいことがあったのさ」

無愛想な顔でカインは対応する。

「なんだよ」

「いやな、あたしはARRの出場登録をする為にここに来ただけだし、登録名簿にカインの名前ないじゃん。今年は出ないの？　登録期限明日までだけど」

「あ、もうそんな時期か忘れてた」

思い出したと言わんばかりの表情を見せるカインに対し、アカネは疑問顔であった。

「カイン、ARRってなんですか？」

答えたのはレン。

「知らないの？ エアーズロックレースの略称だよ。飛行機械でオーストラリア大砂漠大陸を舞台にして、大陸を横断するレースさ。レース名の由来は地名の場所を通るからってのらしい。ロックでイカれた風乗り連中の祭典ってのが由来だって噂もあるけどな！」

シルバも会話に参加する。表情がうれしそうなのを、アカネは見逃さない。

「ARRなら知っている。アマチュアも参加できる飛行機械レースの中では、たしか最高峰の部類に入るレースだったはずだ。とても危険なレースだと聞いている」

カインも話しに乗っかる。

「シルバ詳しいね。そうなんだよ、結構危険なレースでさ、武器の使用は禁止だけど基本は何でもありなレースだからね」

「だろうな、オーストラリア大砂漠大陸自体かなり危険な場所だからな。大砂漠大陸、飛行訓練で何度も飛んだが、岩と旧都市の残骸を障害物に、水分の少ない環境が拍車をかけて飛行の困難さを増長していた事を覚えているよ。大陸の横断は大変だった」

坦々と経験を語るシルバに対し、カインが尊敬の目で見つめる。

「飛んだことあるんだ！ それも横断してるなんて！」

アカネがいつ、この飛行機械談義を中止させるかタイミングを見計らっている中、レンもシルバに対しての意外さを感じつつ、意地悪く笑う。

「目輝かしちゃって。カインは目標が、完航！ だもんな。やれやれだぜ」

「お前もだろがっ！ 何さりげなく上に立とうとしてやがる！」
とにかく無視。

「シルバだっけ？ すごいね横断した経験があるなんて。もしかしてプロのレーサーか何か？」

レンの質問に、シルバは少し回答を困る。

「プロというか……まあそんなものだと思ってもらっていいか。レ

ンだったね。カインが同じ年と言っていたが、君も飛行経験があるのか？」

見た目よりも実は立派な胸をはり、レンは答える。

「まっねー！ ケルマディック一のスピード狂たあ、あたしの事さ」シルバは苦笑い。その態度にではなく、事実。

「カインといい、その年齢で飛ぶ人間がこんなに多いとは……」

「へへっ。で？ カインどうするのさ参加。するんだったらいつもみたく、うちのキャラバンに来なよ。どうせ一人での参加だろ？」

カインはその場で考える。本来レースの参加はチームであるのが基本であり、今まではレンのキャラバン隊が組織するチームに所属して参加していた。出来れば今年も参加したい。だがレースは僅か五日後なのだ。今の状態を考えると、参加は出来そうもなかった。

「残念だけど、今年は無理だと思——」

「ストップ！」

カインが話し終える前に、タイミングを計っていたアカネが割ってはいる。話の腰を折るタイミングは間違っていた。

「あ、いやその話は終わり！ だとタイミング的になんか変か。えっと、カインはそのレースにいつも参加しているんですよね？ だったら参加すべきですよ！ 私たちはその、気にしないでください」カインは困惑する。

「いやそんな……」

「そうだな、参加すべきだ。私たちの事でこれ以上自分を犠牲にするな。私たちはすぐに立ち去ろう」

シルバもアカネに同意する。

考えるまでもない、カインはそう思った。

「いや、参加しないよ」

「何故だ？ 気にすることはないんだ」

「そうですよ！」

信じられない話を聞いて、別に正義感が目覚めた訳ではなかった。使命感でもない。ただ、興味があった。青すぎる冒険心、それだけ

がカインを駆り立てていた。

「二人に協力する。もう決めたんだ」

「……………」

「……………」

二人は何も言わない。否定をしなくてはいけない、だが協力をし
てほしい。複雑な心境があった。

そんな沈黙もレンの破天荒さには何の関係もない。

「えー参加しないの？ もったいない。今回の優勝者はさ、賞金だ
けじゃないんだ。副賞で中型の飛行艇がついてくるんだぞ！ うち
の連中なんかも躍起だよ。優勝候補になってから騒げてんだよ
な」

中型の飛行艇。正直あまり魅力は感じなかった。キャラバンの人
間からすれば、新たな移動手段の確保は大きいのだろうが、カイン
のような個人からすれば、使わない飛行艇があっても維持費が掛か
るだけで、メリットはない。そもそもレンの言う通り、あくまでカ
インの目標は完航であり、優勝など考えられる立場ではないのだ。
だが、カインは何か引かなかった。

優勝賞金と副賞の飛行艇。本来狙うことなど出来ないのだが、い
つか完航出来たときは狙いたい。夢であった。

実現に必要な事はなんだろうと考える。一つは完航して得る、地
理感覚。もう一つ高い飛行技術。プロレーサー級か、あるいは軍隊
の士官クラスの――。

「そうだ！ あったよ移動手段の確保方法！」

カインはレンから聞いた話と、今取り組んでいる問題とを結び付
けていた。

話を理解していないレンは、会話になっていない発言をしたカイ
ンに対し哀れみを込めて眺め、話を絶望的に思慮している二人は、
突然の希望的な発言に驚いた。

「本当？ カイン、どんな方法！」

アカネは興奮して薄い心の壁を崩落させる。

「レースに参加する。そして優勝するだけさ！ 飛行艇を手に入れて、ついでに賞金も手に入る」

発言に対し、レンは開いた口がふさがらなかった。

「は？ 何を目開いて寝言を言ってるんだよ。あたしゃお前をそんな楽天家の大馬鹿者に育てた覚えはないよ！ 顔洗ってきな！」

「母親かつ！ て、どうでもいいよお前とのやり取り。ややつこしくなるから黙ってるよ！」

カインはシルバの方へ力強く、尊敬の念を込めた視線を送る。

「シルバ、さっき横断に成功しているって言ってたよね。所属は飛行士の最高峰で間違いないよね？」

ここまで話し、アカネもシルバもカインの言わんとしている案が読めた。

「わかった！ シルバね！ うん、いけるいける。なんて言っても次期エースのナンバーワン候補生だもの。そこらのアマチュアやレースのプロなんかには負けやしないわ！」

アカネはまるで自分のことのように、シルバの実力を自負してみせる。シルバへ視線を送る。

「いい案よシルバ。だってオーストラリア大砂漠大陸なら、訓練で教えられた専用空路を使える！」

シルバは即答しない。考える。案はどこまで現実的で、どこまでが実現可能かを冷静に。

「なるほど、悪くはない。問題は色々あるが、今は手がないからな。その案を検討してみる価値はありそうだ」

三人はお互い目を合わせ、頷く。決まった。

一人だけ全く会話について行けないレンは頬を膨らませ抗議する。「三人で納得するなよ。あたしも混ぜて話せよな。何かやらかす気だろ？ 面白そうじゃなか」

カインは神妙な顔でレンの方に手を置く。

「ありがとう。初めてお前に感謝するよ。今度なんかあったら言うこと聞くよ」

レンも負けじと神妙な顔で返す。

「それはあれか？　ここを去れと暗に示しているのか？　まあいい、じゃあ言うこと聞けよ。お前あたしと結婚な！」

「どんな答えを求めてんだよ！　突っ込みのハードルが高すぎるだろ！」

レンは優しく微笑む。

「今度、書類関係提出しないといけないな。奴隷契約書持っていくから判子用意しとけよな」

「最低な奴だなお前！　てかそんな凶悪な書類あるの？　そっちにビックリするよ。今すぐ一階に下りて俺が裁判の書類を出したいよ」カインがアカネとシルバの関係を強固なものに感じたように、二人から見て、カインとレンは血の繋がった兄弟のように思えた。

二人は希望が出てきた事に対し、力が湧き出てくるような感覚を覚える。

だが、明るい希望は、手探りであったが見えてきた光明に、暗い影が覆うかのような情報で先細る。時間は差し迫って、アカネとシルバを追い詰める。

四人が話し込んでいた休憩所、常設してあるのはベンチと冊子類を置く棚、そしてテレビ。その中のテレビから、緊急の放送が入る。緊急放送用の警報音がスピーカーから流れ、画面が緊急放送に切り替わる。映像では、キャスターと思われる女性が一礼をし、放送の旨を伝える。

四人は音と映像の切り替わりに反応する。

『緊急ニュースをお伝えします。今朝方、ケルマディック近郊の森に、何者かの不審者を乗せた飛行艇が墜落をしたと思われる痕跡を発見したと、イズモオセアニアの報道部が発表しました。発表によると、機体は損傷が激しいが、森に被害はないとの事です。しかし、

搭乗者の遺体はなく、憶測ではまだ森に潜んでいる可能性があるとの事です。原因は分かりませんが、ケルマディックの稼動を停滞させ、イズモの管理する水素抽出を阻止しようとする、テロリストの犯行の可能性もあり、森に放火、または直接ケルマディックを襲撃してくる可能性も予想されます。今後の情報に注意し、外出を控えるよう心がけてください。また、不審者を発見した場合は、直接的な行動は控え、速やかにイズモ管理局に通報をしてください。繰り返し、お伝えします。今朝方――」

口を真一文字に閉め、それ以上動揺を出さないようにするシルバ。顔が青ざめて、俯くだけで精一杯のアカネ。カインはただ発見の早さに苦悶の表情を見せていた。

一人笑顔ではしゃぐのはレン。

「おっと、こりや大変だ。イズモの公式情報じゃ真実味は高いな。面白いじゃないか。テロリストだって？ この話しじゃ森に落ちたって言うてるけど、あの森、大海溝に囲まれてるから、ここまでは来れないんじゃないかな。でも来れてたら、結構大変だよな？ どう思うカイン？」

カインはなんとも言えず。ただ誤魔化する。

「無理だろ、徒歩で海溝を越えるのは……。きつとまだ森の中だよ」
レンは残念そうに小さな顔を横に振る。

「つまんなーい。その反応は零点だよ。どうした？ いつもの切れがないじゃないか。そんなに楽しいならお前がやつつけに行け！
つてのがカイン的な正しい反応だろ」

「うっさい！」

レンはその反応を見て満足そうに笑う。何も答えない。
シルバがゆっくりカインに近づき、言う。

「カインそろそろ行こう。もうすぐ自宅の修理に業者が来るのでは

なかったか？」

カインは一瞬だけ、疑問の表情を浮かべ、すぐ肯定の頷きに切りかえる。

「そうだね。少し遅くなっちゃったから、急いで帰らないと」

すばやく頭を切り替えた二人は、まだ顔の青いアカネに視線を送る。

「アカネ、ほら行くぞ」

シルバがアカネの細くて小さな手を握る。

「うん……」

手の温もりを感じたアカネも、ようやく現実を受け入れて、小さく頷く。

三人は慌てる事無く、一回へ降りる階段へ視線を送る。

一人笑みを浮かべて、両手を頭の後ろで組んでいたレンが三人に声をかける。

「へいへい、さっきあれだけ優勝だ！ って息まいてたARRの参加登録を済ませないで帰る気かい？ 飛び入り参加なら面白そうだから大歓迎だけどさ、優勝しても手錠をもらうだけだと思うけどねー」

カインはうつかり忘れていた。冗談めかしに皮肉ぶっているが、レンの配慮に少し感謝をした。

「ごめん先に二人で帰れるかな。レンの言う通り、参加の登録してかなくちゃ」

シルバはカインを見て、一回だけ頷く。

「大丈夫、場所は覚えているよ。二人で帰れる」

アカネは申しわけなさそうにカインに答える。

「ごめんなさい。お願いします」

カインは二人に笑いかけ、ARRの参加登録が可能な電子掲示板へ向かおうとする。

そのカインの首を、チョークスリーパーの形でレンが突然締め上げた。

「こらー、客人だけで家に向かわせるなんて無作法にも程があるぞっ！ お兄ちゃんすっかりしなきゃ！」

ある程度苦しめた後、腕を解く。カインはむせ返りながら、レンを睨む。

「げほっ！ なにすんだ馬鹿！ お前なんか妹なら今すぐ絶縁だ！」

カインの反応を満足げに、何度も頷くレン。

「いいから二人を連れて行けよ。あたしが登録はしとくからさ。急いでんだろ？」

カインは少しだけ無然とした表情をしながらも、

「悪い、頼むよ」

心の底からレンに頼んだ。

「了解しました！」

レンは軍隊よろしく敬礼のポーズをとり、その場駆け足を始める。カインはあえて突っ込まず、アカネとシルバに帰宅を促す。

「レンに任せて、ここは行こう。飛行艇の整備もあるし、時間が惜しい」

二人は頷く。そして三人は正門へ繋がる一階へ降りる為の階段へ向かう。

階段を下りる前、駆け足で電子掲示板へ向かったレンは、なぜか三人の下に戻ってきて、

「言い忘れ！ 出発は明後日の早朝、場所はあたしたちのキャラバン隊が所有する飛行艇のドックな。隠密行動は早朝が一番だぜい！」意味深ない忘れを伝えた。

「それと、レンちゃんのワンポイントアドバイス！ 真正面から出ると、さっきの報道があったから、防犯カメラを覗く盗撮野郎がいるかもよっ！ ちなみに、非常口は内側からなら鍵は掛かっていないという伝説を聞いたことがある」

啞然とする三人。その顔を見て、事情を知らないはずのレンが意味深な微笑を浮かべる

第一章 漆

シルバ、アカネの両名と出会って迎える、三回目の早朝。カインは寝る間も惜しんで整備した飛行艇のコクピットに乗り込み、通常より若干難易度が高い、多乗操縦を四苦八苦しながら行なっていた。向かう場所はレンの指定したキャラバンのドック。たいした距離ではないし、カインの飛行スキルからすれば、特に注意を払う事でもない。飛行艇が通常であるならば。

足元、カインの下に無理やり取り付けられた通信スピーカーから、シルバが確認を含め話かけてくる。

「どうだカイン、操縦に違和感はないか。操縦桿が少しでも左右に引かれる感覚があるなら、おそらく重量の均衡が取れていないはずだ。バランス計は問題無いか？」

少々顔をこわばらせながら、でも冷静にカインは判断を下す。

「大丈夫、少し重いけどね。すぐ慣れると思う。操作面より、どちらかと言うと一人乗りで染み付いた、飛行感覚の方が問題かも。風が掴み難い」

「そうだな、本来テスト飛行をすべきなんだ。もし違和感が酷いようなら、彼女のキャラバンと合流してから再調整しよう」

通信が切れる。顔を下に向ければ、シルバは直接目視できる足下の急造スペースに体を固定し、通信を行っていた。余裕があればアイコンタクトをしたい。が、余裕などない。

カインの背中越し、今度は通信機器を使用していない、生の声でアカネがカインに話しかける。

「落ち着いてください。私がナビとして機器の操作や確認を一部補助していますから、落ちるようなことはありません。カインは操縦の感覚を掴むことに集中をお願いします。いいですか？ 重量が変わったのであれば、感覚的に少し後方が引っ張られていると思います。でもそれは動物の尻尾のように、自分に尻尾が生えて繋がって

いると考えると、感覚がつかめ易くなりますよ」

優しい声だった。ナビを専攻しているという話だから、声色も技術の一つかもしれない。カインはそう思った。

二人の確認と助言により、徐々にではあるが、感覚をものにして行く。飛行艇をゆっくり見回すくらいの余裕が出てきた。乗りなれた飛行艇、名前を『ライジン』と言うらしい。らしい、などという曖昧な表現になるのは、カインも飛行艇の機体名など知らなかったからだ。知ったのは二日前、レンにARRの登録を任せて、三人でカインの自宅に戻り、本格的にARRで勝てるかを話し合った時の事だった。

その時のことを、待合場所に到着するまで、カインは思い返していた。

「案としては悪くない、だが問題は色々とある。レースに勝つには経験や技術もそうだが、それらを活かせる機体があるかどうかが必要になる」

三人はレンと別れ、あえて警戒をすることも無く、無事カインの自宅へたどり着いていた。冷静になり、カインが出した移動手段の確保案、ARRの優勝について、話し合おうとなるのに時間は掛からなかった。

「まあ、俺の持っている機体は大分旧式だからね。レースに参加する上位者の乗る機体とは性能差があるのは否めないよ」

決して遠慮ではない。何度かレースに参加して得た、実直な感想である。

「シルバらしくない。機体の性能差で嘆くなんて三流よ」

アカネはシルバに対し、頼りにしているからこそ、不満をぶつける。それに対し、シルバは怒りなどしない。

「機体の性能を嘆くのは三流だが、アカネ、技術と経験が全てと言うのも二流の考えだ。機体があって、その性能を十二分に引き出すのが、経験と技術だ。三つ揃って初めて一流と言えるんだよ。レーズの優勝者は皆そういった飛行士ばかりだろう。最低限のものは必要だよ」

無いものねだり、わかっているが認識はしておかなければならない。シルバの冷静な考えだった。幻想を抱いていては、現実で通用しない。必要な事は、現状を把握する事。

「とりあえずカイン。君の機体を見せてもらえないか？ 昨日は暗くて輪郭くらいしか見ていないからな」

カインは頷き、一階の格納庫へ案内をする。階段を下り、いつものように窓から光を取り込む。機体を覆うシートを外すとき、カインは少しだけ恥ずかしいと言う感情を抱いた。自分の全てと言ってもよい飛行艇。どう判断されるかわからないが、まるで自分の内面を見られているような気がした。

露になる機体。小さいが存在感のある黒、折りたたまれてはいるが、広げれば雄大だと自負してきた両翼、ベッドよりも慣れ親しんだコクピットとシート。どれも愛情を込めて整備してきたものだ。カインは恥ずかしながらも、シルバの表情をのぞき見た。

シルバはカインが想像していた表情と、全く違う顔をしていた。機体についての納得を示す表情ではなく、恐れていた、不満を示す表情でもない。

シルバは暗闇で見えなかった機体の正体を見て、ただ驚愕していた。自身の知識の中から、一つの記憶が掘り起こされる。幼き頃から、教育を修了するまで、幾度と無く登場した過ちの歴史と大海戦。その中で語られる僅か一行ほどの文。だが飛行士には興味の尽きない名称。

「まさか……ライジン……か？」

ライジン、飛行艇を指しているのであろう言葉に、カインは少しもピンとこなかった。だが同じ学び舎で育ったアカネは、シルバの

発言で記憶を辿ることができる。

「ライジンって、あの大海戦晩期に反イズモを掲げて造船されたっていう、飛行艇のライジンのこと？　こんな形だっけ」

二人は無言で飛行艇を見回す。カインだけが一切理解できない神妙さで。耐えかねて質問するのに、時間は掛からなかった。

「ライジンって何のこと言っているのさ。この機体、そういう名前ってことなの？」

シルバは少し困惑しながらも、カインに視線を向ける。アカネも右に同じく。

「おそらく間違いない。この機体はライジンだ。大海戦の惨状を経て、イズモが世界から雲を管理しようと動いたとき、唯一反対を示した地域で、象徴として造船された最後の機体だ。奇しくもイズモと同じ地区で造船された機体、正式名称雷神。別名アンチハイドロゲン。水素金属の浮遊効果を消し去りながら、雷のように、雲の如し群れを成す飛行艇群を突き抜けていったとか」

雲の無い世界で、雲を掴むような話だった。幼い頃、あの人たちが乗っていた機体。物心がつき始める頃には、自分の手足のように存在した機体。ただそれだけの存在だったものが、随分飛躍した解説の中に登場していた。

「この飛行艇が反イズモの象徴……」

事実かどうかはわからない、だがあの人たちは知っていたのか、なぜかそんな疑問をカインは考えていた。

心ここにあらずのカインに対し、シルバが機体について質問をした。

「カインこの機体、ライジンを一体どうやって手に入れたんだ？　すぐには答えない。答え辛い。」

「あの人たちの……いや、死んだ両親が残していったものなんだ。どうやって手に入れたかなんて解らないよ」

両親の話、カインは俯いてしまう。その姿を見て、声をかけたのはアカネだった。

「ご両親の。そう、ですか。ごめんなさい。だからカインは一人で……シルバ」

アカネの視線に、シルバは素直に頭を下げる。

「すまなかった。悲しいことを思い出させてしまった。私の悪い癖だ、興味本位でどうでもいいことを聞いた。機体の入手経路などレースには関係なかった。機体がある、その事実があればよかったんだ。許して欲しい」

二人に謝られ、逆に混乱した。あの人たちの話が嫌なだけで、悲しい感情など無いカインは気まずくて仕方が無かった。

「い、いや気にしてないし！ 謝らないですよ！ それより飛行艇、ライジンの話をしよう。よくわからないけど、曰くがある機体ならさ、機能的にどうなのかな、レースで勝てそうな機体なの？ 自分が乗っている感じだとそうは思えないけど」

シルバは一度頷く。

「もう少し詳しく見せてくれ」

それから、シルバはコクピットや内部の機器を入念に確認した。アカネとカインはただ眺め、終わるのを待つ。

三十分が経って、機体の下部まで潜り込んでいたシルバが這い出てくる。服はややオイルで黒ずんでいた。

「よく整備されている。カインがいかにかこの機体を丁寧に扱っているかが伺えるよ」

カインは少し照れる。

「いや、そんな。それよりどうだった？」

「ああ、大分改造が施されているな。特にエンジンはエネルギー触媒に化石燃料を使用できるようにハイブリット化されている。元々は大海戦時代の代物だから、水素機関を積んでいるんだ。どちらも使えるが、今のところ化石燃料を活かす形で、機械部の回路は組み込まれているよ。おそらく本来の能力の半分くらいしか出力できないだろう」

カインは水素機関を搭載しているという事実、心から驚いた。

たしかに、自身が整備していた時、ブラックボックスとなっている部分が多分に見受けられていたのは事実だった。だが水素機関などは考えてもいない。

「じゃあ元々この機体は水素艇だったんだ……」

「いや、正確には違う。水素艇は水素の化学反応を熱エネルギーに変えて推進力としているんだ。でもライジンは水素電池のエネルギーを推進力にしている。水素艇のほうが出力は大きい。ライジンは電機艇とでも言うのか、エネルギー持久力に優れているだろうな。水素電池の方がエネルギー効率は高いんだ」

電機艇、全く未知の乗り物のようだった。少なくともカインは化石燃料を日常生活で使っていた。いくら水素機関が発達しているとはいえ、現代では水素は高価なのだ。過ちの歴史以降、価値の下がった化石燃料は、僅かな量だが、下級層の人間からは重宝されていた。カインも例外ではない。

化石燃料という言葉に反応するのはアカネ。

「化石燃料を使っているんですか？ 凄いですね。仕組みが全くわかりません」

上流層の人間にはわからない。当たり前、基準が違う。アカネの驚きの声にシルバは釘をさす。優しさである。

「イズモに近しいと、気がつかない事はいっぱいあるんだよアカネ。それこそ海が広がっていた時代なら、水素など簡単に手に入る。でも海は奪われた。化石燃料は普通に使われているんだよ。自分の物差しで世界を計らない方がいい、現実をしっかりと見て学ぶんだ」

アカネはよく発言を注意される。だが腹を立てたことは一度も無かった。正しいと思えたから。

「そう、だね。海が無いんだものね。ごめん、認識が甘かった。改める」

簡単なことですぐ怒り出すのに、的確な指摘には素直になる。カインはアカネの実直なまでの素直さに感心した。その素直さも世間を知らな過ぎるからなのだが。

「水素産業の大本にいたんだから、水素機関が身近にあることを普通と思うのは仕方がないんじゃないかな。きっと俺なんかイズモに行ったら水素機関に囲まれて右往左往するに違いないや。へへっ！」カインは自虐的に笑ったが、アカネにはしっかりと優しさとして伝わった。いつもシルバに語りかけられ、答えるときと同じように、アカネはカインに笑顔を向ける。

「その時は、私が教えますね」

シルバはそんな二人のやり取りをうれしく思う。カインに心の中で感謝した。冷静さは失わない。

「話を戻そう。現状、この機体は化石燃料で飛ばすしかないだろう。水素が手に入らない。彼女、レンの言った明後日の早朝までに、出来る限りの改造と整備をしなければならぬだろうな。だが……いいのかい？ カイン」

シルバは表情を厳しくし、カインに確認を取る。

「え？ なにが？」

きょとんと反応するカイン。アカネはシルバの言いたいことに気づく。

「そうですね。私たちの勝手な都合で、ご両親の形見をいじるなんて……」

出来ない、とは言えない。巻き込みたくないと言い、巻き込んだ。大切な機体だと知り、それでも否定は出来ない。何かを犠牲にしても、逃げて、逃げて、生き延びなくてはならない。アカネは下唇をかんでガマンする。するが、我慢できない。

意を決して、やめようの一言を発しようとした。その前にカインは言う。

「全然かまわない。あの人た……いや両親の形見といえばその通りだけど、だからって二人が遠慮することなんて全然無い。これは俺のものなんだ。手足みたいなものさ。俺は二人に協力するよ。足を動かして情報を集めるし、手を使って方向だって指し示すさ。だから二人を乗せて飛ぶのに、手足を動かすのと差なんてないよ」

遠慮ではなく、当然として答える。二人はカインのそんな態度を、少し意外に感じていた。親の形見を大切にしない人間ではない。短い間だが、カインの事を二人は好意的に思っていた。だからこそ、改造に対して協力してくれるという親切心ではなく、どこか形見を蔑ろにしているかのように見えたのが、違和感となった。

アカネもシルバも、お互いの感情に気がつき、視線を合わせる。シルバはわからないくらいの動作で、アカネだけに対し顔を横に振る。

「何から何まですまない。感謝をしているなどという言葉では、もう恩を返すことは出来ないな。君が悩みになる問題を抱える様な事があれば、いつでも言ってくれ。出来る限りを尽くす」

おそらく両親との問題。シルバは考え、簡単に踏込んでよい事ではないと判断した。言葉に偽りは無かった。どんな問題でも、カインが助けを求めてきたら、手を差し伸べる。そう、どんな問題でもアカネも同じ考えである。

二人の思いとは他所に、カインは話を進める。

「でさ、その改造の件なんだけど、三人を取りあえず乗せれるようにはしないといけないよね。移動の足はこの飛行艇だけなんだし」

二人はカインに合わせる。

「そうですね。でも、ライジンは一人乗りですよね。どうしましよるか、簡易的にコクピットヘシートを増設しても、二席が精一杯ですよ」

シルバも肯定の動作で示し、

「コクピットは前後並列型の二人乗りが限界だろうな。だが案はあるんだ。こっちへ来てくれ」

二人を機体の前面へ導く。

「この船首、開閉式になっていて、内部が空洞になっているんだ。おそらく解放状態で、内部に設けられている機器を使い、ライジンの所以である、電磁波を発生させる為の物だろう。ライジンは電磁波を発生させながら飛行していたと習った。アンチハイドロゲンの

通称通りなら、水素金属の超伝導を阻害できる武装の一つと考えられる」

武装、カインは背筋がぞっとしたのを感じる。今まで自身が乗っていた機体にその様なものが搭載されていた事など、考えもしてなかった。

シルバはカインの、そんな気持ちを察する。

「大丈夫、水素電池が機能していないから、兵器としての機能は死んでいると考えていい。実はここにもう一つ、座席を設けようかと考えたんだ。常に解放状態にしておけば、一人分くらいにはなる。幸い解放時にのみ判るが、開口部分に強化ガラスがはめ込まれているようだし、目視をするにも便利だ。ただ飛行方法が若干難しくなるな」

兵器は機能しないの言葉に、少しだけほっとした。しかし前面が開閉式とは、水素機関の件も含め、驚きの連続であった。カインは整備用の脚立に乗り、機体の前面部を撫でる。コクピットから長く延びる船首は、くちばしのように、丸みを帯びて、先端が尖ってゆく。言われれば鳥のような形状の機体であり、収納式の両翼も含め、くちばしのように前面が開閉式でも違和感はない。そう思った。以前レンがカラスみたいな機体だと表現していた事をカインは思い出していた。

脚立の上からカインが声をかける。

「大分改造に時間が掛かりそうだね。シルバ、二人で手分けして作業にかかろう。急がないと、明後日の朝に間に合わないよ。俺、スクラップ屋に行つて必要な部品を買ってくる」

シルバも同意し、服の袖を捲り上げていく。

「まずは一部コクピットの機器を降ろそう。私が作業をするから、すまないがカインは物資の調達を頼む」

カインは了解を示そうとした。だがアカネがそれに待ったをかける。

「シルバ、調達と言っても資金が無いわ。カインに出させるなん

て、絶対ダメ！」

指摘を受けたシルバは、確かにと思い、カインに声をかけようとした。その行動をカインは掌を突き出して制止させる。

「大丈夫！ 知り合いのスクラップ屋なんだ。ちよつとした物ならタダか、タダ同然の価格で譲ってもらえると思う。それに、二人がいなくても俺はレースに参加していたよ。忘れてたけどね！ だから改造は俺の為！」

カインは脚立から勢い良く飛び降りる。

それは違う。と二人は言わない。あえて話を通そうとするカインに、逆に失礼だと思ったから。

「すまない」

言って、頭を下げシルバは壁にかけてあった工具を選びに掛かる。

カインはそんなシルバに視線を送り、アカネを見る。カインへの遠慮と申し訳なさで、何をしたら良いのか、判断しかねているようだった。助け舟を出してみる。

「じゃ行ってくるよ。シルバよろしくね。アカネは……そうだな、

昨日買った食料がまだ冷蔵庫に入っているから、それでも食べてて」突然の提案に顔を真っ赤にするアカネ。

「さ、さっき食べたでしょっ！ もうっ、私はそんな食欲旺盛じゃないって言ったじゃない！ 私だって飛行艇の整備くらい出来るのよ？ 変なイメージ持たないで！」

カインは予想通りの反応を示すアカネに笑顔を向ける。その後ろでシルバとアイコンタクトを交わした。

第一章 捌

この三日間、短い出会いであったが、二人とは大分馴染んだ。二人に出会わなければ、イズモの事も知らなかっただろうし、自身が所有している飛行艇のことについてだって、きっと知らなかっただろう。そう思うと、カインはあの森へ行って、本当に良かったと思えた。

夜通し三人で飛行艇を整備し続けたのは大変であったが、同時に楽しくもあった。飛行艇について話せる仲間。レン以外で初めての存在。各箇所を整備する度に、カインとシルバは飛行機械談義を始め、アカネがすぐ注意をする。あれだけ食欲は人並みかのように言っていたアカネが、また――。

ここまで思い出し、噴出しそうになってカインは思い出すのを止めた。

操縦しながら、色々と考えられる程度には慣れてきたのか、気がつけばもうキャラバン隊の駐在地を越え、整地された広大なスペースに多数の飛行機械が管理されている飛行場とドックが見えていた。カインは思考を操作に集中させる。ゆっくりと操縦桿を操作し、高度を一定に保つ。

「もう着くね。着陸に入るから、二人とも体を固定して」

「了解した」

「わかりました」

下と後ろから同時に声が掛かる。

飛行場をゆっくり一週し、目的のドックと垂直に交わる角度へ機体を持って行き、徐々に高度を下げていった。

機体が重く、すこし戸惑いはしたが、カインは見事に着陸をする。下にいたシルバは、カインの腕前に少なからず感心した。

ライジンを着陸させ、三人が降りる前にレンが走り寄り、

「おはよう！ 中々いい感じの墜落だったな！ 命が無事で何より

だ！」

軽快な声と共に、笑顔でカインたちを迎える。

「ありがとう！ 幸い命は無事だよ。もう少し強く操縦桿を倒せばよかったよ。そうしたらお望みどおり、お前の上に墜落できたからな！」

朝とは思えないテンションでレンは笑う。

「安心しな！ 墜落したらちゃんと部品は拾ってスクラップ屋に売っというやるから」

「最後の方でなんか目的が見え隠れしちゃってるぞ！ その内お前に撃墜されそうな気がしてならないよ俺は！ 先に言っとくが抵抗するぞ」

レンは不適に笑う。

「おっ！ 強気に出たな。あたしと勝負しようってか？ おもしれえ、さすがはあたしがライバルと認めた男だ！ 撃ち落とされても後悔するなよな！」

「上等だ、その言葉そっくり……あれ？ いつのまにか撃墜される既成事実が出来上がってるっ！」

機体の上と下でやり取りをする二人に対し、シルバとアカネはあえて気にしない事にした。二人ともいがみ合っているわけではない。ただの挨拶のような感じがしていたから。

レンはにっこり笑う。そしてコクピットへ向けて手を差し伸べる。「まあ降りなよカイン。一緒にモーニングコーヒードでも行こう。

旅立ちに近い、明日生きることも断言できない世界だ。僅かな時間でも楽しもう」

カインはコクピットから降りながらレンに合わせて微笑む。手を差し出す。出来る限り格好良く。

「そうだね。お言葉に甘えさせてもらうよ。この朝の事を決して忘れないように。ちなみに、格好つけるので忘れているみたいだから言うけど、コーヒードってお前が一番嫌いな飲み物だよ。前に無理して飲んで、俺の顔面に吹き出しやがった事を、今日の朝と同じよう

に忘れることは無いだろうな！」

手を繋ぎ、カインは滑走路へ降り立つ。レンは驚愕の顔を作る。
なるのではなく、作る。

「そうだった！　そう言えば前コーヒーが苦手って設定だったわけ？　目的がカインの顔にコーヒーを吹きかける！　だったから忘れてたわ。わりい、わりい」

レンは深々とお辞儀をする。

次の瞬間二人は走っていた。

カインについて、シルバがコクピットの下から出てくる。コクピットにいたアカネは先に降りながら、

「仲がいいのかな？　悪いのかな？」

疑問を口にする。

どんどん遠く離れていく二人を眺めながら、シルバは答えた。

「仲の悪い友なのだろう。いい関係じゃないか」

いなくなった二人を他所に、シルバとアカネは降り立った滑走路を見回す。すぐ近くの格納庫には中型の飛行船と、小型の飛行艇が止めてある。周りには数人の男女が談笑をしていた。

内、体格の良い中年の男が、二人に近づく。赤とピンクの奇抜なバンダナを頭に巻き、白髪交じりの切り揃えられた顎鬚を携えるその男は、二人の前まで来るとにこやかに笑いかける。

「ようこそ、シンセイキャラバンへ！　レンから話は聞いている。

俺はこのキャラバン隊のリーダーで、リュウ＝シンセイと言う。レンの保護者みたいなもんだ。まあ、キャラバンの連中は、レンの監視役だと言ってるみたいだがな！」

豪快に笑うシンセイに対して、二人も答える。

「シルバ＝ランスバルです」

「アカネ＝クロウサーといえます」

「おう！　フリーのプロレーサーとして活躍してるんだって？　すげえよな。まあ暑苦しい連中ばかりのキャラバンだが、気兼ねなくしてくれよ」

豪胆な印象を与えるシンセイではあったが、二人は悪い印象は持たなかった。

だが、シルバの方は発言が少しだけ気にはなった。フリーのプロレーサーと言う点である。何故レンはシンセイにそう話したのか。シルバは自身の素性をただの流れ者と伝えていた。確かにプロのレーサーのような者という話にはなった。だが、シンセイにはどうも誇張された情報が伝わっているようである。

有難いことではある。一昨日の緊急速報から、ケルマディックは警戒態勢を強め、素性のわからぬ者に目を光らせている。であるから、流れ者よりはプロレーサーの方が受け入れられやすいのは事実であるから。

だが何故、事情の知らぬレンがそこまでの対応をしたのか。単なる気まぐれなのか、それとも。

訝しげな表情をするシルバには、屈託無き笑みをこぼすレンと、無然とした表情を遺憾なく出すカインが、こちらに連なって戻ってくるのが見えた。

レンと目が合う。シルバは視線を外さず、ただレンを見た。少し首をかしげたレンは、一拍おいてシンセイの存在を確認し、シルバへ対して、思い立ったような顔つきと同時に、片目を素早くウインクしてみせる。

「さあ、ドックでオーストラリア大砂漠大陸への航路を確認しよう！ 親父、皆に紹介はまだだろ？ 朝食がてら紹介をして、そこで出発だ」

「おう！」

レンとシンセイはドックへ向かう。

「行こう二人とも、航路の確認をしなきゃ」
「ええ」

カインとアカネも後に続いた。シルバはレンの後姿を眺め、警戒は必要ないと思った。レンが何かを考えての行動か判らないにしても、それは二人に対する配慮である事に代わりは無いのだから。イ

ズモでは協力を得られず、アカネと孤立してしまったので、警戒心が強すぎるようだ、シルバは考え、そして苦笑いを浮かべた。

三人はシンセイキャラバンのドックで軽く挨拶をした。カインは慣れ親しんだ皆に声をかけ、アカネとシルバは自己紹介をする。

メンバーはレンとシンセイを入れて六人の少数である。メカニツクのダンに商売人のカーニとパーリ、そして女性で家事担当のメイ。皆が同じデザインの、濃紺を基調とした、手足の横に白いラインの入っている作業着を着用している。

ダンは褐色の肌と筋骨隆々な肉体が特徴の、寡黙なだった。

「ARRの開催中は俺が機体の整備をしてやる。ただし無茶をやつて壊したんなら金を頂くがな」

カーニとパーリは双子である。歳はシルバと同じくらいであるが、素性は不明だ。見分けは髪型でつく。カーニは坊主で、パーリは長髪だった。

「レース中に参加者と商談するのが僕たちの仕事さ！ 人が大勢集まれば商売は成立するからね」

メイは十九であり若い、シンセイキャラバンでは古参である。カインからすれば、小さい頃からお世話になっている姉のような存在でもある。

「何か好き嫌いがあれば言ってネ。少しなら対応出来るから」
簡単な挨拶を終え、朝食のパンを皆で頬張りながら、出発前の最終確認を行なった。

壁に巨大な地図を張り、皆がその前に椅子を持ちいて座る中、シンセイが説明をしていく。

「目的地のオーストラリアだが、今回は途中一回の休憩をおいての

航路になる。夕方までには中間地点を通過、翌朝にオーストラリア大陸棚を上る。到着は明日の昼頃になるだろう。なんども使う航路だから、特に問題はないだろうがな。だれか質問はあるか？」

誰も手を上げない中、レンが発言をする。

「あ、今回はあたしの機体飛ばしていくから。前回みたく大型機にドッキングしていくよりさ、カインたちを先導した方がいいと思うし」

「ああ、いいんじゃないか？ 確かにカインも今回は大人数で飛ぶみたいだし、サポートがあってもいいだろう」

シンセイも特に問題視することも無く、許可を出す。ニコリと笑みを向けてくるレンを、カインは無理な笑顔で返す。

「他に質問は？」

今度こそ誰も反応しない。

「よっしゃ！ なら話は終わりだ。メイ！」

「了解！」

呼ばれたメイは、理由を確認する事無く立ち上がると、人数分のコップに綺麗な水を注いでいく。そして一人ひとりに配り終わると、全員がその場に立ち上がる。アカネとシルバも連なる。

「出発を前に、無事到着することと、レースを勝ち抜くことを祈願して乾杯をする。思えば参加以来、完航さえ出来ていなのが現状だ。だが今回は違う。モチベーションが極めて高い！ なんとと言っても副将に飛行艇を貰えるんだ！ これは是が非でも——」

シンセイの話しが未だ続きそうだと、皆が思い始めるタイミングで、レンは言う。

「乾杯っ！」

「かんぱーい」

「……む」

「乾杯、乾杯」

「がんばろー」

「え？ いいんですか」

「いいんだよ。いつもの事。乾杯」

「か、乾杯」

全員が笑い、シンセイも豪快に笑う。初参加の二人も笑う。そして水を飲み干し、合図かのように散らばって、それぞれが準備へと取り掛かった。

カインとシルバ、アカネはライジンの元に戻り、一回目の飛行から再調整が必要な部分があるかの点検を行う。

「やはり三人だとかかなり厳しいものがあるな。どうだカイン、行ける自信はあるか？」

シルバが下部のハッチを開けながら質問をする。

「多分大丈夫じゃないか。スピードが出せないから、付いていけるかが少し気がかりかな」

カインはコクピットから機器を操作しながら答え、アカネも後ろで同意する。

「レーダーも異常は見られないですし、よっぽど離れない限りは大丈夫じゃないですか？」

そんなやり取りをしつつ、微調整をしている三人の元に、レンがやってきた。

「随分と大変そうだねー。楽しそう、かな？ でもその機体に三人はきつついんじゃないの？ いい案があるけど聞いてみない？」

カインは流し目でレンを見る。

「聞きたくもないけど、そこで話されると、まあ耳には入るよねぜったい」

カインを指差し、レンは答える。

「正解！ あたしは喋っちゃうもんねー。答えは簡単さ。カインを置いて、シルバとアカネがカインの飛行艇に乗っていけばいいんだよ。頭いいなーあたしっ！」

「確かに！ お前の頭の悪さを全開で発揮している答えだよ！ 俺もレースに参加させてくれよせめて！」

やれやれとため息をつくレン。

「しょうがねーな、わがままカイン君は。いいよ先生の飛行艇に乗せてやるよ。おやつも認めてやるって。泣くなよ、な？」

「何一つ教えて欲しくないね！ お前が先生だったら、それこそ泣くときだ！ 大体なんでお前に乗せてもらわなきゃいけないんだ」
軽く反論をしたカインだったが、意外なことにシルバは機体の下から作業をしつつ肯定を示した。

「そうだな、確かに三対一で分けるより、二対二で分けた方が負担は軽くて済むだろう。誰がどう乗るか別にして」

レンは尊敬の念を込めて下をのぞき、微笑む。

「だろ？ 見たかカイン！ あたしの正しさを！」

「聞きはしたが見てはいないよ！ その発言に痛々しい感じが漂っていて、俺は少し悲しくなるね」

「まあ、そこは置いといてだ、やっぱカイン、あたしの飛行艇に来なよ。それが一番だって」

反論したいが、カインには出来なかった。確かに、実力を考えてもシルバが操縦をして、カインはレンと便乗した方が現実的である。
「……………」

結果として無言である。レンは追い討ちをかけるつもりで、

「なあ、二人つきりにしてやろうって。シルバとアカネも男女持ちつ持たれつ、積もる話もあるだろうしさ、お前はお邪魔虫なのっ！」

シルバとアカネを巻き込んだ。

失敗だった。

「ちよ、ちよっとまってください！ 私とシルバは持ちつ持たれつな関係じゃありませんから！ 二人つきりにしてもらう必要なんてありませんっ！」

アカネが困惑の表情で、訴えてきた。レンは新しいターゲットを見つけた驚のように眼光を走らせる。

「おっ！ いい反応を示すね。あっやしいんだー。な？ カインさ、あたしと一緒に来なって。それが大人の配慮ってやつなのさ」

そうなのかと、思わず考えてしまうカイン。アカネの顔を見る。

「カイン変な目で見ないで！ 配慮とか要らないから！」

それら会話を、機体の下に潜り込んでいたシルバがあきれて聞いている。シルバは下から出てきて苦言を呈した。

「何を話しているんだ。誰が誰と乗ろうが、飛行艇の性能に変わりはないんだ。現状として飛ばせばいいわけで、レンが相乗りを構わないというならそれでいいだろう。アカネも、三人の中で一番年上なのだから、冷静に判断できないとダメだろう。何を困惑しているんだ？ そんなだから、年下と皆に言われてしまうんだ。見た目だけの問題ではない」

アカネを見ていたカインは、全身から湧き出る怒りのオーラを見た気がした。

「シルバが降りればいいわ！ ここへ来るのにも、カインと私で充分だったもの！ 怪我人のシルバなんて足手まといもいい所よ。私と行きましょカイン！」

「……………え？」

呆然の声を出したレンは、予想外の展開について行けない己に驚いた。どうやら踏んではいけない地雷をシルバが踏んだらしいことに気がつく。しかもその地雷へ誘導したのが自分だった事に気がつき、後悔した。

カインはただ困惑する。

「いや、でも実力で考えたらシルバが……」

「いいのっ！」

話は終わりといわんばかりに、アカネは何も映し出さないレーダーを目視し始めた。

シルバは軽くため息をつく。レンは何か言わなければと思い立ち、声を発する……前に遠くから声をかけられる。

「何してんだお前ら！ もう出発するぞ！ それぞれの飛行艇に乗りこまねえか！」

シンセイの声が、準備の終了を告げていた。周りを良く見れば、他のキャラバンメンバーはすでに機体への搭乗を済ませている様子

である。

「……ちえっ」

寂しそうに背中を向けて、自身の機体へ向けて歩き出す。シルバは、ライジンの下から這い出て、背を向けて歩くレンに声をかける。

「悪いことをした、かな？」

「いいやー歓迎するよ。あたしの腕前を見て腰抜かすなよな！」
振り返り、答えるレンは能面のような笑みを浮かべていた。

機器のスイッチをオンにしてゆく、電子音がコクピット内に響き渡り、外部からエンジンの駆動音が防音ガラス越しに響いてくる。

僅か一人分の隙間もない後ろから、アカネが声をかける。

「方向を北西に、高度三千フィートまで上昇し、海面ラインまで行きます。気圧があるので低速なのを忘れずに」

「了解、離陸するよ！」

操縦桿を前に倒し、そして一気に手前へ引く。水素金属を搭載した機体は、基本的に浮力があるため、僅かな滑走で離陸が可能となる。カインもその基本知識に則り、あっという間に離陸を成功させる。前へ進む推進力と、上へ昇る上昇力が負荷として肉体にかかる。飛ぶという感覚がそこにはあった。

「レーダー動作確認。レン機も離陸した模様。キャラバン機は滑走中」

最軽量のライジンならではの高速離陸は、他の追従を許さない。あっという間にケルマディックを一望できる高度まで上昇してゆく。

後発の二機を待つ為、出力を押さえる。
辺りを見渡すことの出来る余裕もあり、カインは自身の住みなれ

たキャラバン隊の市場を見渡す。砂粒のように小さく見える人々が、決まりごとのように働き始めていた。

無心で風景を眺めていたら、アカネが通信を知らせるランプが点灯している事を教えてくれる。

スイッチを入れた。

『相変わらずぶっ飛んでるな！ そのまま天国へ行くのかと思ったよ。頑張ってもカインが天国にいけるわけじゃないじゃんか』

一瞬スイッチを切ろうかと思った。

『それはあれか？ 俺が地獄にいくと？ 間違っていないだろうね。最近殺意を覚えることがよくあるんだ。背後に気をつけるんだな！』

電子変換された笑い声が聞こえてくる。表情は想像で充分すぎるくらい見えている気がした。

『いやーそれにしても残念だったよ！ カインと離陸を迎えたかったんだよねーあたし』

『何でだよ』

一瞬の沈黙がスピーカー越しに伝わる。ノイズしか聞こえていないから。

『だってさ、二日前から決めてた事があったんだよ。離陸の瞬間さ、もしあたしとカインが一緒だったらさ……離陸する瞬間……機体から突き落としてやろうって』

『ひどすぎるっ！ あービックリした。本当に人間か？ 実は鬼なんじゃないのか？ 地獄に送り返してやりたいよ、まったく！』

電子音がレンの笑い声を作り出す。後ろからはシルバも少し笑っているのか、声が聞こえてきた。

『冗談だよ！ でもさ、ケルマディックの事、忘れんなよな。景色よく見ておけよ。もう戻ってくることは出来ないんだからさ……』

『縁起でもないことを演技っぽく格好つけて言うな！』

カインは通信のスイッチを切った。

後ろでは声を抑えてアカネが笑っている。

「カインとレンの話して、なんかおかしいです」

カインは深いため息をつく。

「面白くもない冗談だよ本当に」

でも、レンの最後に言った言葉が耳に残った。

——もう戻ってくることは出来ないんだからさ……

理不尽な事を言われているはずなのに、不思議と納得してしまっている自分がいるような気がしていた。あくまで、アカネとシルバの移動手段を手に入れるまでの手伝い。終わればまたいつもの生活に戻るはずだ。二人はきつと世界を巻き込んだ大変な事態へと、突き進んでいくのだろう。自分がそんな事に関わるとは思えない。

それでも、漠然と、ただ思うがままに、もう戻れない。そんな気がしていた。

レンに言われたとおり、カインはケルマディックをもう一度良く見た。

頭頂部にはカインの自宅が見えている。錆付いた発電用の風車が勢いよく回っている。今度は仕事場へ向かうまでの、通りを見てみる。同じ色のツナギを着た人々が、同じ方向を向いて歩みを進めていく。あの中に、自分はもう居ない。

ふとよく見ると、一人の人間がその歩みの流れに立ち止まって、こちらに手を振っているのが見えた。

カインが仕事を始めたころ、まだ馴染んでいなかった仕事場で、初めて声をかけてきた男、最後まで迷惑にも語りかけてきた男。名前さえ知らない、そんな彼が手を振っていた。おそらく、カインが乗っているとは思っていないだろう。

苦手ではあったが、いい人だった。遠く離れた場所から、カインは思った。最後にぶっくらばうな別れ方をしたのが、少し後悔として残った。でも、もう会うことはない。

そんな名も知らない男は、カインが空へ渡ったとは別の、地下へ

突き進む道を選ぶ。ケルマディックがいずれ世界有数の鉱山から、世界最初にして最大の地下都市へと発展して行く中で、その礎を築いた大人物となるわけだが、カインが知ることはない。語られることもない。それは遙か先の教科書の中で語られる物語である。

カインは視線をケルマディックから、焦点の定まらない、澄みすぎた空へと向ける。夜の闇は一切ない。完全に太陽が世界を支配している。

もうケルマディックの事は考えていない。

始まった。たしかにカインはそう思った

ケルマディックから遠ざかる三機を、キャラバンの中心に建つドームの三階から、ただ眺めている人物が二人いた。一人は奇抜に染め抜いた赤い髪をオールバックにし、全身を革製のジャンプスーツに包んだ男。もう一人は、幼さの残る顔と眼鏡、艶のある黒髪が特徴的で、体格にあった細身で小さいスーツを着た少年。

「あーあ行っちゃったよ。張りぼての翼なんか広げて、無知な人間みたく無様で醜く転げ落ちるのが見えてるのによお」

誰に語りかけるでもなく、赤髪の男は言う。少年は眼鏡の奥に、確かな輝きを携えながら答える。

「いいんですよ。『鍵』がここで止まる事は、運命の優先順位では限りなく低い。むしろ、あの二人と出会った事の方が『鍵』の運命としては意外だった」

赤髪の男が苦い顔をする。

「あんた、なんでも知っているみたいに話すが、正直薄気味悪くて

反吐が出る」

少年らしい高めの声で含み笑う。

「僕が話すのは、確立の優先順位で演算された、一番可能性の高い未来についてだけです。あくまで予測ですから、知っている訳ではないです」

「へ！ 例の未来を予測するスーパーコンピューターの話だろ？」

機械の出した答えに沿って生きるなんざ、人として終わってる。この世界を見てりゃわかるさ」

「でも、人が争いなく生きてゆくには明確な指標も必要なのですよ。まあそれも今の時代で終わるでしょう。『鍵』が動き出した。

『鍵』を運ぶ者も現れた。『鍵』の使い方を知る者も同時に。これは人類が次のステップへ進む為の準備が整ったのだと、僕は思っています」

赤髪の男は興味なく、少年の話を聞き流し、飛び去る機体を見据えた。

「やることあるんでしょう？ 最新鋭の水素艇とはいえ、あまり遅れをとると間に合わなくなりますよ？」

赤髪の男は、少年を見る。今度は興味有々と。

「そーうさ！ そっちが面白い！ わかってる。まずはARRだろ？ ぐちゃぐちゃに掻き回して、運命の飛び出す先を、混乱に貶めてやるああ！」

奇声をあげて笑う赤髪の男の声を耳に、少年は優しい表情で、飛び去る機体を眺めていた。

第二章 壱

ケルマディックを出発してほぼ一日、予定航路の三分の二を進んだ辺りで、キャラバン及び、カインたちはその日の飛行を終了させていた。

かつては浅瀬の海底であった平地に機体を着陸させ、隊の人間は簡易的なキャンプを張った。そこで軽食を取り、明日へ備える。メイは水分を含まない乾燥系の食事を乗せていた皿を布で乾拭きし、丁寧にキャンプキットの食器用ボックスに収納して行く。その横では、組み立て式のテーブルに広げられた地図を中心に、キャラバンのメンバーが明日の航路について話し合いをしていた。

遠巻きにそれら光景を、ライジンのコクピットから眺めていたカインは、覚えのない既視感に襲われていた。

飛行機械に囲まれた、楽しそうな男たち。人工的なランプの光量を、億の星々の輝きが圧倒し抱擁するかのように包み込む。そんな光景。

妙に感傷的なものにも思えた。ふと機体の下に視線が行く。シルバが拳でノックをするかのように、機体の下部を叩いていた。

カインは慌てて我に返ると、コクピットを開閉させるボタンを押す。楕円の強化ガラスが、ガスパンプの気圧音と共に上へ開く。シルバは片手に乾燥肉を乗せた皿を持ち、もう片方の腕を器用に使ってコクピットまで梯子を上がってきた。

「拝借してきた。話しながら食べようと思ってな」

それだけ言って日中アカネが座っていた後部の座席へ腰を下ろした。

「ど、どうかした？」

突然の行動に驚いたカインは、思わず率直に回答を求めている。「すまない……と思ってね。それと感謝の気持ちを伝えたかった」

「え？」

感謝される自覚のないカインには、何の回答にもなっていない。察したシルバが、カインに合わせるかのように、率直に返答する。

「仕事、あの短期間でレースの参加に必要な休暇が取れたとは思えない。それ所か連絡さえしていなかったのではないか？ そんな行動が許されるほど今の世の中が寛大であるとは思えないな」

カインは、シルバの言いたいことがようやく判った。判った上で、笑顔で答える。

「いいんだよ。あそこで働いている人には悪いけど、ずっと仕事をするつもりも無かったから。何も言わず出てきたのはちよつとだけ後悔があるし、悪いなとは思うけど、シルバが気にすることじゃないよ」

シルバは肯定を表す表情で、否定的に顔を横に振る。

「協力をしてもらいたいとは思ったが、ここまで巻き込むべきではなかった。私は汚い人間だ。ARRに参加すると決まった時から、カインの生活を脅かしている事には気がついていた。しかし、言えなかった。言えばアカネは反対をする。あの子は非情にはなれないから」

「……だからシルバは非情だと？ 違うよ。決めたのは俺だし、行動を起こしたのも俺。全部自分中心の考えなんだ。なんかさ、楽しいんだ俺。こうやって皆と飛行艇に乗ってさ、世界を飛び回るとかが。話したように、シルバたちの目的は俺にはよくわかんないよ。でも、シルバたちの為に、こうやって何か出来ると思うとうれしいし、それが飛行艇関連ってのは楽しいんだ」

カインは言って笑う。シルバは苦笑いで答える。

「カインは大人だな。立派に生きている。アカネにも歳不相応の力強さを感じるが、それは意思から来るもので、生きる為ではないかな。カインの気持ちはありがたく受け取るよ。ただ、アカネを責めないであげてほしい。あの子はまだ学生で、生きる事と働く事の関係性を未だ知らないんだ。自分が生活の面でどれだけ恵まれてい

るかも理解していない。アカネにしたらかインは学生で、学校に通っているのが普通なんだろう。生きると言う事に働くという感覚がまだ無いんだ。決して今の状況を容認しているわけじゃない事を理解してほしい」

カインは、うん、と言だけで返す。シルバはそれ以上何も答えなかった。持ってきた乾燥肉は一枚も減らない。空に視線を向けると、隣合せに密集する星々の話し声が聞こえてきそうなほど、静かで、雄大で、美しい空が広がっていた。

何となく、カインは沈黙を破ってみた。同時に肉に手を伸ばす。

「そういえば、アカネは？」

すぐには答えが帰ってこない。薄暗い中で、シルバが申しわけなさそうに、しかし悪戯っぽく笑った。子供のような笑顔だった。

「レンが連れて行ったよ。ほら、あそこの岩陰だ。ランプの光が見えているだろう？」

言われた先を注視する。確かに、暗闇の中、岩の輪郭が浮き出るように、ランプの光が視線の先では漏れ出していた。

「なにしてんのさ二人で」

一拍置いて、シルバは答えた。

「分からない。ただ、レンが“カインを操る十の方法その二”というメモを大事そうに持っていたな」

「あいつ！　と言うかその二って、その一があるのかよ！　アカネに何教えてんだよ。明日が怖すぎる！」

シルバが声に出して笑う。

「くっく。明日は注意が必要だな。まあアカネは器用なようで不器用だ。心配はないよ」

「はあ……」

ため息をつきながら、カインは明日のことを考える。アカネとの飛行のこと、オーストラリア大砂漠大陸までの航路のこと、少しだけこの世界のこと。

夜の闇の中、ぼんやりと世界に灯るキャラバンの光を下に、雄大

な星々の光を上。まっすぐ視線を向けた先、レースの舞台である大陸の、巨大な大陸棚が薄っすらと見えていた。

日差しが正面からコクピットへ差し込んでくる。日の出を迎えてすぐ離陸をしたカインたちは、迂回しながら大陸へと向かっていた。ウインドシールドを遮光モードに切り替えてはいるものの、薄っすらと側前に広がる大陸棚を日差しに阻まれ、カインは細目でしか確認できず、少しだけ苛立ちを覚えていた。

後部座席からアカネが声を掛ける。

「航路から少し外れかかっています。機体前面を少しでも持ち上げるように操縦してみてください。直射日光を軽減できます」

「わかった、やってみるよ」

カインは操縦桿を少しでも引き、同時にエンジンの噴射口を水平で保てるよう操作をした。アカネの指示通り、前面部が太陽を少しでも隠し、眩しさが軽減された。視界は悪くなるが、全体が見え辛かったことを考えれば、かなりましだった。

同時にオーストラリア大砂漠大陸の大陸棚が、側面へ広がった。

思わず声を漏らし、カインはアカネへ話しかけていた。

「うあー。見て！ 壁だよ壁、空の下に巨大な壁があるみたいだよ。アカネ見えてる？」

意気揚々としているカインに対し、アカネは思わず笑ってしまう。

「ふふっ、見えてますよ。でも私は何度も見た事がありますから。

カインは去年なんかも見ているんじゃないんですか？」

指摘を受けてカインは顔を赤くする。確かに大陸に渡るのは初めてではない。去年も同じ航路を使っているのだ。だが、カインは前回も、前々回も自身の飛行艇を飛ばしていたわけではなかった。シ

ンセイの指示で、単機での長距離飛行は禁止されていたのだ。なので、シンセイたちの乗る大型の飛行艇にドッキングする形で飛行艇を運んでもらった。よって小さな窓からでしか大陸棚を見ていない。だからこそ、視界の開けた状況での絶景について感動してしまう自分が恥ずかしかった。

「そ、そうだね去年も見てるしね別に――」

言い訳のように平静を装うとしたとき、オンにしたままの通信機から声が漏れ出す。

『カイン見てるか？ すっげーな！ 壁だよ壁、空の下に巨大な壁があるみたいだよ。どっちがあれ先に上りきるか勝負しない？ ねーしようよ！』

先ほどの自身と同じようなテンションで話しかけてくるレンだった。カインは余計恥ずかしくなった。

『レン、これ以上追い詰めてくれるなよな……』

言って、外部通信をオフにする。

「遠くから見る大陸棚も凄いけど、あれを上るときの感覚はもっと凄いですよ？ 楽しみにしててください」

アカネが優しく語り掛けてくる。

絶対に声は上げて喜ぶまい。そうカインは誓った。

「うっわ！ 高度を上げても全然陸との距離が離れない！」

カインは感嘆の声を上げて、大陸棚上りの醍醐味を味わっていた。急斜面で広がる大陸棚に沿う形で、機体を上昇させている為、計器での上昇率と目視での感覚にズレが生じる。

「速度に注意が必要だから気をつけてください。計器では確実に上昇していますから。目視だけに頼らない方がいいです」

「了解！」

甲高い声で反応するカインの後姿を見て、アカネは歳相応のカインをようやく見れた気がした。同時に、折角の気分を崩して欲しくないと思い、警告を控える事にする。

その影響で、徐々に速度を上げて上昇していくライジン。すると横を、凄まじい加速で抜き去っていく銀色の機体がカインの目に飛び込んでくる。通信が入った。

『勝負だ！　ついてこれるかな僕？』

『ついてこれるかじゃなく、追い抜けるかだけだな！』

二機が一気に加速する。レン機は挑発するように、大陸棚の岩肌に接触するかしないかの瀬戸際を飛行した。カインも負けじと追隨する。スピードでは勝るライジンだが、その分機動性はレンの乗る機体の方が優れていた。岩が不均等に隆起している為、右に左に縫う形で飛行して行く。完全にレンに優位なフィールドだった。だが、大陸棚を離れてスピード勝負に持ち込むほど、カインのプライドは低くは無い。離されないように最短のルートを通ってゆく。だが、追いつけない。

『へーい！　森に迷い込んだ子羊みたいな飛び方だねー。ビビって機体が離れていってろぞ！』

『くっ！』

スピードを上げれば接触しそうになり、レンの言う通り機体を大陸棚から離さざる負えない状況が続いた。負けるのは悔しいが、手立てはない。カインは少し諦めかけて、操縦桿を握り絞める。

アカネから声を掛けられる。

「陸に対して水平飛行より、翼を陸に対して垂直に飛行した方が効率がいいかも……」

つぶやきの様な、そんなアドバイスだった。

言われるがまま、すぐにカインは操縦桿を右に倒す。機体も大陸棚に対して垂直になってゆく。翼が接触しないようギリギリを保つ。重力が傾いた機体の影響で右寄りに掛かってくる。かなりきつい操

作だった。

だが、カインの眼前には、先ほどまで見えていなかった視界が飛び込んできていた。機体を縦にしながら飛ぶ事により、隆起した岩に沿って、最短でのコースが見えていた。左右に振ってかわしていた障害物を、今度は機体を上下させる事でかわしていける。

負荷はかかるが、その分スピードが出せた。

「スピード勝負ならこっちのもんだ！」

直進。

急旋回からスクロールターン。

視界が開けてまた直進。

澄んだ空と隆起した岩陰に、銀色の機体が見え隠れする。

さらに操縦桿を倒す。

「見えた！ もうこっちのもんだ！」

徐々に距離が縮まり、機体の輪郭がはっきりと見える。

百五十メートル。

五十メートル。

十メートル。

「行った！」

カインが叫び、後一押しでレンの乗る機体をかわせるとなった際の際、外部通信からコクピット内で怒号が響き渡る。

『バカ野郎ども！ レースは明日からだ！ こんな所で競ってるんじゃないねえ！ すぐ上昇してこんかい！』

『了解……』

『空気読めよなー。つまんなーい』

残念、純粹にそう思った。乗っているのが一人であったのであれば、叫びたい気分だった。カインは操縦桿を引き、機体をもう一度、大陸棚に対して水平となるように操縦する。そしてかなり上空にいるキャラバンの大型機に視線を向けた。

アカネが背後から声を掛ける。

「高度を三百メートルまであげてください……残念でしたね。もう

少しで追いつけたのに。レースでは絶対勝ちましょうね!」

意志の入った力強い言葉だった。カインは少し意外に思う。自分が一人が熱くなっていたと、そう思っていたから。

思わず後ろを振り返る。

アカネは力強い視線をカインに送り、笑みと小さく突き出した拳で意志を伝えてくる。

カインは、同じように力のこもった笑みで返事を返す。事ができなかった。

勝とうの一言が言えぬ理由。アカネは忘れているが、この機体に乗るのはカインではないのだ。それではARRで勝てない。必要なのはシルバの操作技術と経験値である。当然の事と思っていたが、アカネとの飛行のせいで、的確なアドバイスのおかげで、ここに来て悔しいと思う感情が芽生え始めていた。

自分と飛んで欲しい。その感情を押し殺し、苦笑いをアカネに返す。そして前を向き、機体を上昇させた。

キャラバンの大きな機体が眼前に広がるよう、後ろに付く。遅れてレンの乗る機体が横に寄せて飛行してくる。

通信を告げるランプが、カインの手元で点滅する。

『あつぶねえ、あつぶねえ。油断してたわ。腕上げたねカイン。シルバが褒めちぎってるよ。たいしたもののだとさ! 勝負はARRでな。コクピットの整備には気をつけろよ!』

『この卑怯者! 絶対お前を近づかせないからな!』

当然のやり取りを返し、シルバが褒めていたという言葉に、少しだけ顔を崩す。ほんの少しの悔しさと、喜びを心に押し込み、機体の操縦に集中した。

上昇し続けた機体が、大陸から飛び出すかのように、大陸棚を越えてゆく。

眼前の光景には、海溝群には無い圧倒的な砂漠が地平線まで広がっていた。

第二章 式

カイン達の目的地にして、ARRのスタート地点。かつては世界の富裕層がしばしの休息と慰安を。今はならず者たちの渴望と欲望の地。ゴールドコースト。

広がり続ける、広げることを終えてしまっている大砂漠の、入り口に広がるビル群の大廃墟では、レース参加者の飛行機械が所狭しと飛来してきていた。

カインたちはといえば、すでにスタート地点であると同時に、機体の離発着に使用される、広大なアスファルトの平地に機体を止め、参加者に与えられている格納庫にて、レン、カイン両機の整備に取りかかっていた。

メカニックのダンを筆頭に、隊のメンバーが手伝いをする。その整備をしている横に設けてある簡易休憩室で、カイン、レン、アカネ、シルバの四名がレースについての重要な話し合いをしていた。

「シルバが飛べないだって？　じゃあどうするのさ、レースは……」

カインは困惑の表情でシルバに問いかける。アカネは二人の様子を注視している。レンは備え付けのソファアーに寝そべっているだけだった。

「正確には飛べないわけじゃない。だが操縦でかかる体への負荷が大きすぎて、おそらく万全な飛行ができないだろうという話した。カイン、君が大陸棚で見せたような飛行、あれが出来ないんだ、今の私には。肋骨と言う部位を痛めてしまっているというのは、致命傷だった。レンの機体に乗せてもらっていたが、精々ナビくらいしか出来ないだろう」

かなり絶望的な話のように思えた。レースではシルバの横断経験から得られた知識が必要であり、ナビとして参加するならば問題はないかもしれない。だが、操縦技術ばかりはどうしようもない。

「それじゃあ、アカネが操縦してシルバがナビをするってこと？」

大丈夫なのそれ」

カインの不安に対して、シルバは肯定をしなかった。

「大丈夫ではないな、その組み合わせは。アカネも操縦技術は身につけてはいるが、カインとそんなには変わらない。しかも乗っていたのは水素艇だった。旧時代の飛行艇ではその実力さえ発揮できないかもしれない」

「万事休すってやつじゃないか……」

カインは頭を抱え、設置されている椅子に重い腰を下ろす。アカネがシルバに問いかける。

「……出発前に分かっていた事？ それともここまでの移動中に分かった事なの？」

冷静さを前面に出すかのように、無表情を作るアカネではあるが、逆に怒りを周囲に感じさせる表情であった。

「カインとレンが大陸棚で競い合った時に悟った。さっきも言ったが飛べないわけではないんだ。今の状態で飛んでも、勝てる可能性はあると思ったから、ここまで来たわけで、偽りは無いよ。ただ、さっきの大陸棚での飛行を見て、どっちが飛ぶほうがより勝てる可能性が高いかを判断して、結果を述べているだけだ」

「どっちが、とは？」

三人の話を寝ながら聞いていたレンが口を挟んだ。

「私かカインがと言う事だよ」

シルバの回答に、頭を抱えていたカインは顔を上げる。

「俺がってなに？ どう言う事？」

「カイン、君が飛ぶべきだと言っているんだよ私は。大陸棚の操縦見事だった。少なくとも怪我をしている私より、確実に君は早かったんだ。あの実力がレースに出せば、あとは私とアカネの知っている航路を使って確実に勝てる。レースには君が出るべきなんだ。もちろん私がナビとして全面サポートするつもりだ」

カインは目を大きく見開き、驚愕の表情で静止する。口が目と同じように開きっぱなしになっている事にさえ気が付かずに、そのま

ましゃべりだす。

「な、何を言っているんだよ。俺が出たって意味ないじゃないか。去年も一昨年もゴールさえ出来ていないのに、どうやって勝つって言うんだ。優勝しないと意味ないんだよ？」

シルバは答えない。カインはさすがのような目でアカネを見た。

「ほら、アカネもなんか言ってるよ。シルバがあつての作戦だったんだからさ！」

アカネはただ黙って考え込む。答えたのはレンだった。

「まじめな話、お前出たいんじゃないの？ 去年から出てんだしさ。素直になれば？ あたしも大陸棚の続きやりたいしさ。一緒に出ようよ、な？」

「ただ出たいとかの問題じゃないんだよ。勝たなきゃ……意味無いんだ」

「意味ねえ。ま、あたしは除け者だし。そのこだわりは分かんないから関係ないもんねー」

未だアカネとシルバの事情を説明されていないレンは、そっぽを向いて、ふて寝を再開した。その点、少し不憫に思いつつも、カインはいつも通りレンを気にはしない。いつも通り。

押し黙るカインを横に、アカネが再度問いかける。

「勝てると判断したんだね。カインが操縦して、シルバがナビをすれば。そうでしょう？」

「そうだ。もちろん簡単ではないし、楽観もしていない。だが、可能性は十分にあると判断したから、今こうして話している」

きっぱりとした口調でシルバは言い切った。言い切られても困るとカインは思う。言われたことは素直に嬉しいが、自信が無かった。おそらくアカネは納得してはいないであろうと、カインは表情を伺った。意外なことに怒っているような感じは無く、うつむき加減で諦めに似た笑みさえ浮かべているのだった。

アカネ顔を上げてシルバに向き合う。笑っていない。

「わかった。シルバがそこまで断言するなら、私はカインが操縦す

ればいいと思う」

カインは一緒に反論してくれるのであろうと思っていた仲間の謀反に、慌てて立ち上がる。

「そんな！ 無茶だって、いくらなんでもさ。あの飛行だってアカネがアドバイスしてくれたからなんだし、ほとんどアカネの力さ！俺が操縦しても勝てっこないよ！」

シルバとアカネの顔を交互に見ながら声を張り上げるカインに対し、アカネは若干嬉しそうに微笑を返した。

「ありがとうございます。でも、あれだけのアドバイスで飛んだのは、間違いなくカインだった。そこは自信を持っていと思います。だから、怪我を負ったシルバより、カインはきつと巧く飛べると……私は思えました」

「……………」

反論しなければならぬ。去年リタイアしたという現実と、現状の技術力を考えれば、絶対反論せねばならなかった。

だが、心の隅にほんの少しだけ飛びたいという気持ちと、飛べるという喜び、自信、そんなものが存在し、無意識ではあったが、反論は出来なかった。しなかった。

動くことの出来ないカインを代弁するかのよう、レンがソファから飛び起きた。

「決まり、決まりっ！ レース参加できるじゃんか。カインやったね！ 二人の命運はすべてカインの手に託されたのであった。負けられない、負けることは許されない。今後の世界の運命は、まさに一人の少年に託されたのであった。つづく」

「……………わざとだな」

意識的に緊張を促進させようとするレンの台詞に、カインは大きく一度だけ、ため息を吐く。でもおかげで考える余裕は出てきた。参加するではなく、出来る。少しでも喜びが勝る感覚を覚えた。シルバがカインに近づき、握手を求める。

「レースでは共に尽力を。私たちならば勝つことが出来るはずだ」

嬉しい、でもそれ以上に、やはり不安だった。頭の中が真っ白になるほどの緊張をこれから味わうのだろうことは明白であった。それでもカインは差し出された手に、自身の手を伸ばす。

だが、掴もうとしたシルバの手を、覆うように掴むもう一人の手があった。その手を視線で辿ったら、アカネが不満そうな顔でシルバを睨んでいた。

「カインが操縦することについては、私も認める。カインならやれると思うから。でもね、大陸棚の件で考えに至ったなら、ナビは私がやる。私がカインと飛ぶ」

「えっ！ 冗談じゃなく？」

「……なんでお前が驚くんだよ。それより、本気なの？」

慌てて反応したのはカインではなく、レン。アカネは頷く。

シルバはあくまで冷静にアカネの心中を探る。

「アカネのナビゲーション能力を疑うつもりは無い。だが、レースには技術が必要だ。カインに技術的アドバイスをするという観点においては、私がナビをすべきだと思うが？」

アカネは毅然とした態度と、考えに自信を持っているという視線を一瞬カインに送り、シルバの問いに答える。少しだけ小さい耳が赤くなっているのを、レンは見逃さない。

「なんて言えば良いかな。ここまで来る間、カインとペアで飛んでね、違和感無くやれたと思うの。大陸棚の時も、私はアイデアが浮かんで、カインが実践してくれて、なんか相乗効果があったというか……自信はないけど……」

そこだけ少し自信なさげに、アカネはカインに視線を送ってきた。

「う、うん、さっきも言ったけど、それは間違いなくアカネのアドバイスが利いてたよ。ほかに色々勉強になったというか、分かりやすかったというか、うん」

アカネははにかむ。

「だからね、私とカインって、なんて言えбайいんだろう……相性、そう相性がいいと思ったんだ。これって結構重要だと思う。シルバ

の言うとおりの技術的なアドバイスはレースに必要なだし、きっとシルバの方がすごい技術を教えることが出来るよ。でも、私の方がカインに伝えれる気がしたの。教えるのは時間が掛かるけど、伝わるのは早いよ。どんな技術も伝わらなければ意味が無いし、レース中には教える時間も無いでしょう？ 少なくともここまでの道中、私とカインは問題なく飛べた。だったら私とカインが飛ぶべき、そう思ったの」

正直、カインはかなり恥ずかしい気持ちになっていた。何が恥ずかしいかも分からず、嬉しいのか、そこまで信頼されるほどの器ではないと否定したいのか、それさえも分からず。だから恥ずかしかった。

シルバは一瞬ではあるが、しっかり熟考して口を開く。

「主張はわかった。確かに、と思わせるだけの理由は十分だ。教えると伝わる。一方通行と双方向だな。どっちが明白かは考えるまでも無い。レースでは判断力が重要だからな。臨機応変に出来るスタイルがあるなら、その方がいい……ただ」

一瞬の沈黙。

「少し驚いた。人見知りの君が、自らペアを組むことを主張するのはどういう心境の変化があったんだ？」

今度は長い沈黙。耳だけが赤かったのが、顔全体に広がっていた。うつむき加減で、小さな声で、アカネは答えた。

「大陸棚で競ったあと、約束、したから……。カインと……。レースでは絶対勝とうって」

アカネはカインの方を見なかった。人見知りの精一杯だった。

「そうか」

シルバはやさしく微笑み、厳しく律する。

「ならば全力で取り組みアカネ。私たちの翼、自身の手で手に入れるんだ」

すべてを見通すような、圧倒的な光を瞳に携え、
「もちろん！」

アカネは力強く答えた。

「俺に……出来るのかな」

カインは皆に聞こえない小さな声でつぶやく。

そんな三者三様の中、レンは両手を頭の後ろで組み、笑みを浮かべて喋る。目は一切笑っていない。

「絶対勝とう……ね。なーんか燃えてきちゃったな。常に半分の力で物事を解決する脱力系主人公のレンちゃんだけど、ちょっと本気出してみたくなった」

レンはシルバに対面する形で立ち、右手を差し出す。

「では、お姫様専属の騎士よ、共に馳せ参じましょうぞ。万が一もありますゆえ、保険と言う意味合いもこめて、私どもも共同戦線を張ることといたしましょう」

シルバは苦笑いしながらも、レンに合わせる。確かに保険は有ったほうがよい。もしカインとアカネが勝てなかった場合、可能性は二つにしておいた方が最善と判断した。

「そうだな、よろしく頼む。寡黙で優しい魔法使いさん」

シルバもレンに手を差し伸べ、お互いに握手をした。

カインとしても、レンとシルバがレースに参加してくれるのは、気持ち的に有難かった。レンの冗談ではあったが、絶対勝たねばという気持ちが、少しだけ軽減される。そういう意味でレンには感謝したかたが、では話が終わり、それぞれの機体の整備に参加しようとなった時、すれ違った際、

「カイン、あたし負けないからさ」

妙に真面目な顔で宣戦布告を受け、逆に不安になるカインだった。はたしてカインに対しての宣戦布告だったかは定かではない。

第二章 参

操縦者の決定後、一通りの整備作業を終えたカインたちは、僅かながら出来た時間を利用し、夜のゴールドコーストへと足を運んでいた。ひび割れたアスファルトに崩れた瓦礫、朽ち果てた四輪駆動と決して土に返らぬビニールの断片、斜に経つビル群を前にしても、人々を集め賑わい狂わせる魅力がこの街にはあった。朽ち掛けのビルから暖色の光が溢れ出し、喧騒と共に路上へ広がり、通り去るだけの人々をいざなう。

キャラバンの面々が好きな場所へ散り去る中、残った四人、カイン、シルバ、アカネ、レンは特に目的も無くあたりを散策して回っていた。その中でもアカネは一際テンションが高かった。

「うわー凄い所ですね！ 大砂漠大陸には何度か来たけど、旧都市はこんな風になっていたんですね。あれ、機械が山積みになれてる、あれは何ですか？」

指差したのは街を無数に彩る発光看板の一つ、ジャンクと明記された看板だった。シルバが答える。

「あれはジャンク、壊れた機器を買い取る店だ。大砂漠大陸は海に囲まれた大陸であったから大海戦でも主要の激戦地だったのは知っているだろう。この街の住人は砂漠に出て、その戦争の残骸を発掘し、買取業者に売ることによって生計を立てているんだ」

「そう、なんだ。そういえばカインもケルマディックでジャンク屋から部品を言うって言ってましたよね？ ケルマディックもこのこと同じような感じなんですか？」

アカネは歩きながら興味津々といった表情でカインに問いかける。アカネが気にしていそうなので言わないが、カインはその顔がとても幼く見え、少し楽しかった。

「いや、ケルマディックの場合はよそからキャラバンの人が商材として運んでくるんだ。あそこは鉱山だからね。機器の残骸なんか落

ちっちゃいじゃないよ。でもジャンクで生計を立てている人たちって結構怖いんだよ。ARRで墜落した機体もジャンクだし、ここに住む住人からしたら生活の糧なんだ。だから、レース中に攻撃を受けたなんて話もあるくらいだからね」

アカネの顔が少し引きつる。

「……明日は地上も警戒しておきます」

逆にカインは笑顔になる。

隣を歩くレンがからむ。

「おやあ？ 怖い話をして反応を楽しもうなんざあ随分とヒネた性格に育ったもんだねカインは。類は友を呼ぶってことわざも在る位だから、あたしも同じように見られないように注意しなきゃ」

「常 to 俺がお前に対して思っ to 戒めている事を先に言われた！ お前ちよっ to その台詞を鏡の前で言っ to 来いよ！ いや、むしろ自身の行動を自覚してなかつた風なのが腹が立つ！」

いつものやり取り。だが、アカネもなぜか顔を赤らめて参加してきた。

「別に、カインの話を怖がったりしてません！ 冷静に、事実をままとめて、その上で明日警戒が必要だということを私は――」

突然レンがアカネに抱きついた。あたふたするアカネをシルバとカインが呆然と眺める。

「ちっくしよう、かわいいなー。反則だよ！ 強すぎ！ ねえキスしていい？」

「お、お断りします」

アカネは慌ててレンから距離をとった。

「へへへ、お嬢さん変質者にそんなこと言っ to 、はいそうですか、なーん to 行くわけないっしょ！」

言うが瞬間、レンはアカネを追い回していた。

「変質者っ to 自覚はあるんだな……」

「レンは誰にでもああなのか？」

シルバが率直な疑問を投げかけてきた。

「いや、誰にでもってわけじゃない、かな？　少なくとも無関係な人にあそこまで馬鹿はやらないよ。アカネも変なのと関わったね」
「そうでもない。君たちとの僅かな出会いで、アカネは明るくなった。事情が事情で、彼女なりに気負う所もあるのだろう。ケルマデイックに至るまでの最中、彼女が純粹に笑って誰かと話すことなど無かった。近くににいるのは私だけだったからな」

真面目に話すシルバに、カインは気恥ずかしくなった。

「俺もレンも至って普通に接しているだけなんだけどね」

「……イズモの中で異を唱える私やアカネに対し、普通に接しようとする人間はほとんど居なかったよ。だからこそ今のアカネは、異変に気が付く前の明るさに……いや、あの頃以上に笑うようになった。自己を主張することも含めてね」

カインはレンに追い回されているアカネを目で追う。困り果てた表情の中に、確かに明るさがあるように思えた。レンのアカネへ向ける表情を見ると、シルバの考えは間違いだと思わされたが。

四人は食事を取るために、一棟の老朽化したビルの地下に降りた。そこは酒場と食堂の両を兼ねた店で、酒を飲み騒ぐ者、カインたち同様、仲間内で食事を楽しむ者など、結構な賑わいを見せていた。四人は空いている席を探しながら、店の奥までいき、空いていた席を見つけると席に着いた。程なく、ウエイトレスがメニューを持ってくる。レンは受け取ると、年季の入った木製のテーブルにそれを広げた。一頁目に四人が目を通す。水の種類と価格だった。

怪訝そうな表情をレンがウエイトレスに向ける。

「げっ！　高いじゃんか。三順水でこの価格なわけ？」

ウエイトレスは仕方がないと言いたげなため息をついてから答え

てくれた。

「ええ、本当はもっと安いんだけど、どうもこの地域の雲機関の整備だとかで、配水が少なくなっているらしいの。決まったら声をかけて」

言って、ウエイトレスは別のテーブルへと向かった。

まだ納得していない様子で、レンは独り言のようにぼやく。

「三順水でこの価格って、ケルマディックだったら水付で飯が食えるよ。な？ カイン」

「まあね。雲機関の整備か……なんだろうね故障でもしたのかな」

カインも適当に相槌を打っていると、アカネがとんでもない疑問を投げかけてきた。

「あの、三順水とかって何なんですか？」

質問に対し、カインとレンは珍しい生物でも眺めるかのように、呆然とした。思わず二人は同時にシルバを見る。

「……イズモでは、常に純水だけが取引されているんだ。外からイズモ本部に來た人間なら、順水の仕組みを知っているんだが、アカネは生まれも育ちも、ずっとイズモ本部なんだ。知る切っ掛けさえ無いんだ、あの場所では」

アカネはまた無知な発言をしたのかと気が付くと、言葉無く俯いてしまった。カインは信じれないと思った。水は命の次に重要な存在なのだ。少なくともカインの知る世界では。純水と順水の違いを知らないとは、まるで別の世界に住む人のようだと、考えざる終えなかった。

シルバもカインも、説明したほうが良さそうだと考え、どう説明すべきか思索した。だがすぐさま喋りだしたのはレンだった。

「へー、アカネはイズモの出身なんだー。いやー道理で清楚で可憐でストライクなわけだ。純水だけを飲んで生活するから純粋な人間になるんだな！ うんうん、レンちゃんは一ツ賢くなりました。あれ？ てことは二人はイズモからケルマディックに來たの？」

レンの不意を突いた、まったく違う観点の興味と発言に、シルバ

は慎重に答える。

「そうだ、私もアカネもイズモ本部から来た。レン、君にもだいぶ助けられている。私たちが翼を欲する理由を、君には知る権利がある。君が求めるなら――」

「いーよ話さなくて。あたしは善人じゃないからさ。別に二人を助けたくって手を貸しているわけじゃないし。ARRには参加するつもりだったから、そのついでだもん。それに……ね」

レンはカインに視線を向け、シルバに戻す。

「そうか……」

「そうだよ。それよりアカネ！ 水の仕組みを知りたい？ 知りたくない？」

話は終わりと言わんばかりに、今度は対面に座るアカネへ身を乗り出して質問を浴びせかけた。横目で見ていたカインは、お前が振った話題じゃなかったか、などと思いはしたが、面倒だったのであえて触れないことにした。

「し、知りたいです」

素直に答えるアカネ。レンはふんぞり返って答える。

「説明しよう！ 水にはいくつか種類がある。生成されたままの未使用の水を純水。一度流通し、回収されて再処理された水を二順水と言う。あとはその再処理をした回数だけ、三順、四順ってなるわけだ。ちなみに五順水からは飲み物じゃなくて燃料になるんだな」
アカネは納得がいったのか、目を見開いて笑顔になる。

「それで二順、三順と数字が水の名についてるんですね。あれ？ でも五順水から飲み物に使わないということは、回数で価値が下がるだけじゃなく、水の質も下がるって事なんですか？」

「え？ えーとね。まあ、飲んでも問題は無いんじゃない、かな。プライドの問題とか、まあそんな感じさ。五回も飲まれたり洗ったりしたもんは、美学がない！」

「ちょ、おま、適当に言うなよ」

自信満々に答えるレンと、真面目にうなづくアカネ、あきれるカ

イン。三人を見て、シルバは苦笑しながら口を開いた。

「水は結晶の形状で質が決まる。純水の時結晶が大きく、形が綺麗なんだ。必然的に質も上がる。だが再処理、加熱に消毒を重ね、再生成すればするほど水の結晶は小さく、歪になっていくんだ。確かに飲むことは飲めるが、水素機関の燃料に使用するのが妥当だろう」

「へー、そうだったんだ！」

「まっ、知ってたけどね！」

「お前、嘘ばかりだな！」

アカネにしても、シルバにしても、このように談笑しながらの食事は久々であった。歳の近い三人を眺め、シルバは頃の中でこの出会いに感謝をした。一時期だけの出会いであるにしても。

タイミングを見ていたのか、先ほどのウェイトレスが再び四人の座るテーブルにやってきたて、注文を聞いてきたので、談笑を止め、各々がメニューの中から食事を決め注文をした。

四人は運び込まれた食事を前に、奮発した二順水で乾杯をして、明日のレースへの決意を固めた。アカネとシルバは人工野菜を中心に調理された料理を頼み、カインとレンの前には肉料理が中心で並んでいた。二組の違いは食事方法にも現れ、動作少なく料理を口に運ぶアカネたちに対し、ガツガツと肉を頬張るカインとレン。その動作の違いにカインは気が付き、少し恥ずかしい気持ちになった。思わずレンにぼやく。

「お前さ、女の子なんだから、もう少しおしとやかに食事できないの？」

そのぼやきに、レンはにっこりとして答える。

「カイン、離婚の原因の多くは趣味思考、ないし性癖の強要なんだ。あたしは心が広いから、それなりには対応するけど、周りから見たら嫌われるよ？」

「根底が間違ってる！　なに離婚の原因語ってんだお前！　まるで俺が悪い旦那みたいじゃ——いやいや！　結婚してないし！」

相変わらずのやり取り、カインはいつも通りイラつきながらも、冷静さを失わぬよう努力する。ただ、少しだけ違和感を感じてもいた。カインはここ最近、妙にレンの冗談が自分との関係に対するものが多いような気がした。純粹な疑問として、そのことをカインは口にした。

「そういや最近、妙に俺関係で絡んでくるね。俺なんか精神的にお前追い詰めた？」

シルバとアカネが、フォークを止めて二人を注視する中、レンはやれやれという動作をする。

「わっかんないかなあー。そんなのあたしがカインの――」
「貴様ら汚いぞ！」

レンがまた何か冗談で切り返そうとした瞬間、その声より大きい声が店内に響いた。騒がしかった店内が一瞬で静まり返る。カインたちを含め、店にいた客は皆、声のした方へ視線を向けた。

ちょうどカインたちの座る席の斜め横、男だけの集団が五人で座る席の前で、身長の高さが目に付く、痩せ型の男が顔を激高させて立っていた。

「即刻レースを辞退しろ！ 貴様らのような輩が徒党を組んで参加すること自体が、ほかの参加者へ迷惑だ！ 大体こんな公共の場で堂々と反則行為の話をして、恥ずかしくないのか！」

察するに、どうも席に座る五人組が、レースでなにやらよからぬ事を企んでいたようで、その事で、通りかかった別の参加者の男が激怒しているようであった。しかし、非難を受けている五人組は侮蔑的な笑みを浮かべているだけで、反省や焦りをみせている様子は無かった。

レンがなぜか不機嫌なトーンでつぶやく。

「ありゃ駄目だ。怒鳴ってんのは初参加かなんだな。あの五人組、前回のレースで完航してた連中だ」

淡々と答えるレンに、アカネが小声でそっと質問をした。

「何が駄目なんですか？ 柄が悪い人たちを注意したのがですか？」

「いや、別に注意すんのが悪いわけじゃない。でもね、このレースじゃどんな手を使ったにしても、完航したやつのが偉いのさ。真っ正直に飛んでゴールできんなら、それがベストなんだけどさ」

「……駄目じゃないですよ。卑怯な手を使うほうが駄目です」

アカネが頬を膨らまして怒りの表情を見せる。その表情と態度をみて、カインは妙に納得していた。ここで怒り出さない性格だったのなら、きつとイズモを相手に逃走劇なんかしないだろうと。

カインたちを他所に、喧嘩腰の長身の男がまた男たちに食って掛かっていった。

「貴様らそれでも飛行機乗りなのか？ 聞こえたぞ、現地民と結託してレース参加中の飛行機械を襲撃させるとなあ！」

その一言を男が言い放った瞬間、席に着いていた五人の男が立ち上がり、一番近くにいた一番大柄の男が、腹部へ蹴りを入れた。長身の男が床へ転がる音と共に、店内の客のどよめきがこだまする。

しかし、カインの注意は違う場所に向いていた。長身の男が蹴られた瞬間、斜め前に座るアカネが立ち上がり、

「ひどい！」

男たちにも届く程度の声で、アカネが言葉を発する。敵意を持って相手を睨み付けていた。すぐに隣に座るシルバが立ち上がり、肩に手をかける。

「アカネ落ち着け」

その声にも反応せず、ただ相手を睨む。カインは出会ったときのアカネを思い出していた。怒ると手がつけられない。まずい、そう思った。

男たちもアカネのことに気が付き、こちらに注意を向けてくる。

侮蔑的な笑みを浮かべながら。その中の一人、蹴りを見舞った大柄の男がゆっくりと近づいてきた。

「何がひどいって？ お嬢さん」

「全部ですっ！」

アカネは臆すこと無く即答する。男は一度だけ仲間振り返り向き、

声を出して笑う。

次の瞬間、男はアカネの顔をめがけて拳を突き出していた。思わず立ち上がるカイン。動かないレン。そして誰よりも早く、シルバがその拳とアカネの顔の間に手を入れていた。拳はシルバの手のひらに当たる前に止まる。

「いい反応だなあ、兄ちゃん。でも喧嘩を吹っかけてきたのはそっちだよな？ うん？」

「そうだな」

シルバは表情を変えず、ただ冷徹に目の前に立つ男を見る。カインは一触即発な空気を感じ取り、背筋に冷たい汗をかいていることに気が付く。その時、隣の席で動く気配を感じ、横に顔を向ける。レンが立ち上がり、おもむろにシルバと大柄の男の所へ向かおうとした。慌ててカインも立ち上がり、レンの腕を掴むため手を伸ばすが、手は届かず、レンはゆっくり大柄の男とシルバの間に立つ。いつもの笑顔で。

「まあまあ落ち着いてよ、お二人さん。いやお三方？ どっちでもいいか。ここは穏便にこうじゃないの。あんたらもさ、こんな店で騒いだらそりゃ注目ぐらいするって。特にあたしらは田舎者でね、ああいった喧騒に慣れてないんだなこれが。だから約束するよ。あたしらは干渉しない。お互いお咎めなしさっ！」

男もシルバもレンに場の空気を持っていかれている。ただアカネは怒りが収まらないようで、

「そんな、だってこの人たち——」

「アカネー深呼吸！ いいんだよ。いいんだ」

抗議の声を上げるが、変わらず笑みを浮かべ続けるレンに諭される。

男は少しの間沈黙し、そして怒気を徐々に下げていった。カインは安心からほっとため息を吐く。ただ、その仕草が少し情けなく思えた。躊躇無く飛び出したレンと、どうしても比べてしまう。恐れる事無く声を上げて講義したアカネにも、それを守ろうとしたシル

バに対しても。

そんな葛藤はさておき、男たちは、大柄な男を筆頭に席を立つて後ろにつく、侮蔑的な笑みは消えていなかった。

「オーケイ、わだかまりは無しだ。あんたらは何もしていない。聞いてもない」

「もちろん。あんた誰？　ってもんだ」

レンも笑みのまま対応する。

しかし、男たちは去らない。侮蔑的な笑みから、いやらしい笑みへと表情を変え、レンに言い寄った。

「あんたいい女だなあ。こないない女、中々お目にかかれないぜ。俺らとあんたらはわだかまり無しだが、俺とあんたはしっかり出会ってるなあ。俺たちと来ないか？　俺たちは今年も完航するから、きつといい思いができるぞ！」

レンの表情は変わらない。だがシルバもアカネも、レンがキレるのではないかと思ってしまった。それくらい、男の表情も、台詞にも嫌悪感があった。ただ、カインだけはレンがこの程度でキレない事を知っていた。カインの中で、レンは怒らないのだ。どんな事も楽しい出来事に考えて動くやつ。それがレンだった。たとえ唾を吐きかけられようが、それこそ殴られようが。

「いや、遠慮するよ。今年はあたしたち完航するし。いい思いってのは自分で叶えるからさ」

一瞬の沈黙、そして男たちは大笑いした。屈辱的な意味合いをこめて。

「はっはっは。このメンバーで完航だ？　そりゃ笑える冗談じゃないか。口ぶりから、そのノッポのペーパーと違って、レース経験者だろ？　なら馬鹿を言っているとしたか思えねえな。それとも、その餓鬼ぶっかの面子でレースに勝てる秘訣があるってのか」

レンは自信に満ち溢れた声で言う。

「まあ餓鬼ぶっかなんだけどね。でもそのお兄さん、大砂漠大陸を単独飛行で横断してるよ」

何を言っている。お前も餓鬼だろう。

などと言える空気ではなかった。男たちから笑みが消える。皆がシルバを注視していた。

「……へー。じゃあ兄ちゃん、折り返し地点のエアーズロックの先、見てるのかい？」

「屍のビル群、目視とリーダーを駆使するのに苦労した」
「……………」

男の問いかけに即答するシルバ。何やら真偽の確認をしたらしいが、カインにはその意図が分からなかった。男は考えるのをやめ、レンに向き直る。

「へーまあいいや。せいぜいがんばんな。でもな、それとは別に、俺はお前が気に入った。俺は欲しいものはどんな事しても手に入れた。だから今回もだ。俺と来な」

ありきたりな悪党の台詞、カインはそう思った。ここまで定番の台詞を言われると、逆に怖い、そうも感じた。

レンは笑顔のまま、一息して答える。

「ふう、悪いけどさ、あたし男の趣味悪いんだ。あんたみたいに大人で男らしくてワイルドなのは好みじゃないんだよね。あたしは優柔不断で、でも困ってる奴を見ると助けちゃうような、そんな餓鬼がタイプなんだよ」

再び沈黙が流れる。男の顔がまた侮蔑的な笑みへと変わる。

「お前の好みは別にいい。俺の好みなんだ。来い！」

それだけ言って、男はレンの腕を無理やり掴もうとした。

カインは信じられなかった。どこまでも強引で、在り来たりな台詞と、在り来たりな行動をする男に……ではなく、自身の行動に。気が付いたら、カインはレンと男の間に割り込み、レンの腕を掴もうとする男の腕を、逆に掴んでいた。

「やめろ！」

震える体を鼓舞するように、自然と大きな声で叫んでいた。瞬間、腹部に鈍い痛みが走る。何が起こったかわかる前に、体が

中に浮いていた。床で一回跳ね、そしてもう一度叩き付けられた。同時に後頭部を床に打ちつけ、意識が飛びそうになる。ぐるぐる回る視界の中で、大柄の男が、前へ足を突き出しているのが見えた。啞然とした表情を向けるレン。

そして、次の瞬間にレンが、男のがら空きの股間に全力で蹴りを入れていた。カインは薄れる意識の中で言葉の意味は認識できなかったが、確かにレンの声を聞いた。怒号だった。

「こっの野郎！ ふざけんな！ 頭にきたぞ、完全にブチギレたっ！ お前絶対に犯しちゃいけない事したんだ！ 死ね！」

レンは股間を蹴られうずくまった男の顎を、正確にブーツのつま先で蹴り上げた。そのまま男は仰向けに吹っ飛ぶ。レンは勢いよく追隨し、倒れた男の顔面を全力で踏み込んでいた。

呆然とする店内、男の仲間たちは何が起きたのか分からず、停止する。そして一瞬で頭に血が上り、レンに向かって罵声と共に走り出す。

危ない！ その声のカインには出せなかった。倒れているだけの自分が情けなく、惨めで、恥ずかしかった。意識が飛びそうなか、視界には、休むこと無く、倒れた男の顔に蹴りを入れ続けるレンと、その状況を青ざめた表情で眺め、慌ててレンを止めようとするアカネ、四人の男たちを一瞬で突っ伏しているシルバの姿が見えていた。そこで視界が暗転した。

第二章 肆

意識が戻った時、カインがはじめに気が付いた事と言えば、そこが暗闇の中であるという事であった。目は開けていなかったが、瞼の外から光が見えなかったからだ。少し体を動かそうとして、頭に鈍痛が走り、思わず唸ってしまう。朦朧としていた意識が痛みで鮮明になっていく。そしてようやく、なぜ自分が暗闇の中で頭の痛みと共にあるのかを思い出した。表情を歪ませ、苦い記憶をかみ締める。蹴り飛ばされて、床に頭を強打した所から記憶は無かったが、とにかく苦い記憶であった。出来ることならば忘れたいほど情けない姿が頭の中で投影される。それだけで気分が悪かったが、とりあえず起きようと思った。

冷静になり、閉じた瞼をゆっくりと開く。あまり変化は無かった。その場所が暗かった事と、目が闇に慣れていないせいだ。しかし意識は完全に覚醒し、今自分がベッドのような物の上に寝かされ、毛布をかけられていることに気が付いた。

カインはゆっくり上体を起き上がらせようとした。だが腹部にのしかかる何かが邪魔をしてうまく起き上がることが出来なかった。その現象を不思議がりながら、カインは体を寝たまま動かし、横を向こうとした。

瞬間、頬に、柔らかくて温かみがあり、弾力のある何かが当たった感触を覚えた。ギョツとしたカインはすぐさま顔をその柔らかい物から引き離し、起き上がろうとした。だが、腹部にのしかかる何かが、頑なにカインの起床を阻止した。謎の状況に困惑しながらも、徐々に暗闇に慣れてきた目が、うつすらではあるが目の中の光景を鮮明にした。

カインは光景を目の当たりにして、益々混乱した。

レンが薄いシャツとスパッツという出で立ちで、添い寝をしている。そして自分はレンの胸に顔を埋め、腹部にはレンの足が強固に

絡められている状態でベッドの上にいたのだった。

「な、なんでお前が寝てんだ……」

反射的に小声にはなったが、困惑の色合いを含みカインは声に出していた。

その声に反応するように、レンは僅かに体を動かした。

「んっ……」

カインはレンが起きるか一瞬構えたが、レンは目を開こうとはしなかった。

だが、かわりにレンの表情がにやりとなる。

「……へへっ、命中した。カイン、あたしの勝ちだ……むにゃ」

レンは、夢を見ているようだった。

最悪の、夢を見ているようだった。

カインは幸せそうな表情で眠るレンの頬を摘むみ、横に引っ張った。小声で抗議する。

「夢でまで迷惑なやつだな！ 一体何に命中させて、何で勝ったんだ？ うん？」

レンの表情が見る見る苦悶の表情になる。

「うー、うー」

カインはレンの表情を見て、満足し手を離してやった。そして絡められた足から脱っそうと体を振じらせてみる。中々巧くいかない。なので強引に片腕でレンの足を掴み、自身の腹部から引き離した。

ようやく脱したと安堵した瞬間、レンがまた寝言をつぶやき、

「もーう！ うるさい！ 狭いのっ！」

引き離したはずの足で見事に蹴り飛ばされ、カインはベッドから突き落とされた。

ドシン、と鈍い音を部屋に響かせ、カインは尻を強打した。今度カインが苦悶の表情になる番だった。カインはしばらく唸ったあと立ち上がり、

「痛って！ このっ！ 起きろ馬鹿！ 俺のベッドじゃないのか状況的に！」

叫んだほどではないにしろ、それなりに大きな声でレンに怒鳴った。

カインはてっきりこれで起きるかと思った。だがレンの見せた反応は意外なものだった。

カインは寝起きから動転していて気が付かなかったが、カインの右手はずっとレンが握り締めていた。ベッドから蹴落とされても、右腕だけはレンが離さなかった。

カインが声を上げた瞬間、レンは急に体を丸めこみ、カインの右手を両手でがっちりと掴んできたのだ。

カインはギョツとしてレンの表情を伺った。暗闇ではつきりとはしなかったが、それでもその表情からは、深い悲しみが伝わってきた。口をへの字に曲げ、瞑っていても勝気な目も、その瞬間は違った。レンはまた寝言を口にした。

「ご、ごめんね、カインごめん。あたしのせいだ！　あたしの……ゆるして、ひっく、お願いだから一人にしな、いで……」

カインはただレンを見ていた。同時に昔のことを思い出していた。まだあの人たちと一緒に暮らしていたころ、場所は覚えていない何処かで、一人の女の子が泣いている。何でなっているのか分からない。ただ、カインの手を強く握り締めていた。そんな思い出。

なぜ今、この状況でおぼろげな過去を思い出したのかは、カインには分からなかったし、その思い出がどんな状況だったかも覚えてはいない。でも、レンの表情を見ると、なぜか頭にその光景が浮かぶのだった。

カインは視線をレンの顔から逸らした。見てはいけない気がしたから。

逸らした先の枕が、若干湿っている。レンの事なのでよだれかもしれないが、それがレンの瞳から零れ落ちたものだったとしても、カインには確認のしようもなかった。

「はあ、しょうがないな」

カインは空いている左手でレンに毛布を掛ける。

そしてベッドの床に腰を下ろして、目を瞑った。皆に情けない姿をさらした苦味がある。レンの表情と謎の思い出についても思考を巡らしてしまう。明日はもうレースなのだ、しかも操縦は自分がいなくてはいけない。寝付けない状況が大量に存在していた。何もかも頭から一度切り離し、床でもなんでも横になり、眠りに付かなければいけない。そう思った。

だが、カインは横にはならなかった。

とても、横にはなれなかった。

レンがカインの手を握り締めていたから。

いつの間にか眠りにつき、再びカインが目を覚ましたとき、すでに太陽は窓から陽光を差し込む程度の高さには上昇していた。

カインはゆっくりと上体を起こし、軽く背伸びをする。そこでふと気が付いた。驚くことにカインはちゃんとベッドの上に寝ているのだった。辺りを見回しても、レンの姿は無く、場所はとも昨日話し合ったドッグの休憩室であるようで、簡易マットを運び込んで寝かせてくれたらしかった。

カインはベッドからゆっくりと降りて、休憩室を出た。

早朝の静寂の中、金属同士がぶつかる鈍い音が等間隔で響いている。音は飛行艇の強度を調べる時に発せられるものである事を、カインは知っている。寝起きで若干ふらつきながら、音の発生源へと向かった。

どうやらレンの飛行機を調べている音であるようで、作業をしていたのはシルバだった。カインの足音と気配でシルバはすぐに近づくカインに気が付いた。

「カイン、よかった、目が覚めたみたいだな。頭に痛みは無いか？」

シルバはほっとした様子で、作業を中断してカインに近づく。

カインは打ちつけた頭を軽くなでながら、

「うん、大丈夫、かな？」

軽く返事をした。実際は触った瞬間に鈍痛が走り、言葉ほど大丈夫ではなかったのだが、心配は掛けたくないという思いから、あえて弱音は吐かなかった。

「昨日は迷惑掛けたね、ごめん」

「いや、迷惑とは思っていないよ。あの程度が迷惑なら、私やアカネはカインにどれほど詫びを入れねばならないのか、見当もつかない」

笑顔で答えるシルバを見て、カインも笑顔で返す。

「今日、レースなんだね。去年は緊張で一睡も出来なくて、後悔したんだけどな。今年はそんな暇さえなかったよ」

「そうだな」

カインは昨日の出来事もあり、なるべく考えないようにして来たが、責任を持ってレースに参加する決心が未だに出来ていなかったのだ。考えるだけで吐き気さえした。昨日の情けない自身の姿など、記憶の片隅に吹き飛ぶほどだ。絶対、勝たねばならないのだ。二人はそのためにここまで来た。イズモという強大な存在から逃げ延びるには、絶対に翼が必要だ。

弱音を吐きたくはない。ただ、信頼をしてくれたシルバには、今の状態を伝えなくては、そう思った。

カインは意を決して、自信が持てない事を話そうとした。

だが、口を開いた瞬間、背中から突き飛ばされてしまった。つんのめって転がりそうなところを、両腕を地面について耐えた。誰の所業かなどすぐに察しがついたが、カインはあえて背後から現れた奴を睨みつける。

「おっはよーカイン！ 頭の中の調子はどうだ？ 湧いていた蛆は駆除できたかな？」

「外傷だ！ ていうか、お前こそどういう神経してんだ！ 危うく

顔面から地面に突っ込む所だったじゃないか！」

レンはわざとらしくほっとした表情を作り、笑顔でカインの肩に手をかける。

「なに、反射神経がしっかり働いているか調べたまでさ！ 断じて

レース前にリタイアさせようなんて魂胆があったわけじゃないから」

「やかましい！ 喋るな！ 近づくな！」

カインはいつもの調子で叫びながらも、ふと昨日のレンの事を思い出していた。目の前いるいつもの天真爛漫なレンを見ていると昨日の夜のレンは夢だったのかもしれない、そう思えてならなかった。そんな目で見られている事など露知らず、レンは肩をすくめる。

「まあいいよん。そんな事より、今何時だろうねー。カインの機体、もう運ばれちゃってるよ？ アカネ一人で最終チェックしてるみたいだけど、こんな所で油売っててもあたし位にしか需要がないよー」
「……本当に？」

レンはにやりとするだけ、代わりにシルバが答えてくれた。

「ああ、ドッグの外だ。私とレンも今外に運び出す準備をしていた所だしな」

「そんな！ どうしようすぐに行かなきゃ！」

焦ったカインはあわててドッグの外へ向かった。

確かに、レース前といえば、機体の確認は必須であり、まもなくレースが始まる事を考えれば、もう最終確認も終えて、スタートゾーンへ向かう準備をしていなければならぬのだ。すでに弱音を吐いている場合ではなかった。寝ていた脳が強制覚醒されていくのがわかる。

ただ、最悪に近い状態ではあったが、考えるより体を動かしたほうが、責任を感じずに済むので、無意識的には嬉しかった。

慌ててその場を去ったカインを横目に、レンは深いため息をつく。
「あいつ根性無いからな。レース前でビビっちゃってるよ」

「カインには悪いことをしたと思っている。始めから出場すると分かっていたのなら、心構えも出来ていただろう。直前で言われたら誰でも気持ちを崩すさ。今更巻き込んでいて謝ることも出来ないが」
シルバはなぜか申し訳なさそうに、レンに謝るかのように言葉を発した。

レンは軽くそっぽを向きながら、軽快に答える。

「ま、カインが緊張してヘマやらかそうが、あたしが代わりに勝てば問題ないわけだしね。おっと代わりじゃない、代わりじゃない。絶対あたしが勝つしね」

レンの気持ちを察しつつ、シルバも相槌を打った。

「ああ、勝つために私も精一杯協力をしよう」

「ま、よろしく」

そのまま機体に取り込むレン。シルバはそれを見送ったあと、機体を見回していた。

レンの機体はかなり珍しい体躯をしていた。全面が鏡面のように磨き上げられ、銀色に輝く。流線型のデザインは前部が鋭利に尖り、そこから膨らみつつ中間でくびれ、後部のエンジンユニットに向けてまた膨らむといった、先端の尖った細身の平べったいひょうたんのようなであった。

しかし、特殊なのはデザインではなく、両翼だった。くびれ部分より後ろから広がる両翼は、全面がすべて空洞になり、風をエンジンユニットに引き込む構造になっている。

シルバは後部席に搭載された操作する機器も、操縦席も一通り調べたが特にほかの機体との差は見出せなかった。だが、レンの操縦を見ていると、その方法がまったく今までの常識と違う方法であるように思えたのだ。

シルバはそのことを、コクピットに座るレンに聞いた。アカネが

いれば、また始まったと言うであろう、シルバの悪い癖だった。

「レン、この機体、いったいどうやって飛ばしているんだ？ 私が見るに、普通の機体では無いようだが……」

レンはコクピットから顔だけを出す。

「ご名答！ この機体はかなーり特殊なのさ。なんてったって世界でただ一機の飛行機関を搭載した機体だからね」

「ただ一機の飛行機関？」

シルバの目が子供のように輝く。それを見てレンは得意顔で答えた。

「そうさ！ 見ての通り、翼の部分が空洞になっているだろう？ ここから実は空気を取り入れてるんだ。んでね、その取り込んだ空気を本体の内部機関で圧縮をするんだ。それも、ものすごい力でさ！ んでその機関内の気圧が外の気圧に対して、限界まで下がりきった所で、後部の噴射口から一気に放出するのさ。それが推進力になる。今普及してるのが水素機関とでもいうなら、こいつに搭載されているのは空気機関ってところかな？」

「空気機関……」

シルバはレンの説明を聞いて考え込んだ。少なくとも、シルバの知識からすれば、空気機関とやはかなりのオーバーテクノロジーに思えた。推進力が空気なら、空中戦において、燃料を気にせず飛べることになるのだ。それは圧倒的な戦力である。

そんなことを考えているとは思わず、レンは話を続けていた。

「まあ平たく言えば風だね！ 超高性能風！ じいちゃんからもらったんだけどさ。機体名をフウジンというらしい。あたしのご先祖様の言葉で風神！」

フウジン、シルバはカインの持つライジンとの関連を即座に連想せずにはいられなかった。それが思わず声となって出る。

「……カインの乗る機体をライジンというんだ」

レンは黙る。少しの沈黙が二人の間に流れ、沈黙を作ったレンがそれを破った。

「へえ……似た、名前だねえ。偶然かな？ まあ名前なんてどうでもいいけどね！ 重要なのはカインのカラス号とあたしのフウジンとどっちが凄いいかなわけで、あたしのフウジンの方が凄いに決まってるもんね！」

シルバはレンがあえて明るく話すのを見て、深く考えることを止めた。意味のないことだと、思った。

「カラス号か、そういう風に呼んでたのか？」

「あたしはねー。まあカインの奴が怒るけどさ。そこがこの名前の良い所さ。カラス号」

話して、二人で笑った。話はここで切り上げることにした。雰囲気的にもそうすべきであったし、状況的、時間的にも作業を再開すべきだった。

そしてシルバがレンの操縦するフウジンを先導する。ドッグの外へ向かう。もうまもなく始まる、ARRRに向けて。

第二章 伍

かつて、広大な青い空のキャンパスに、厚塗りしたかのような白い雲と、その青を写したかのような瑠璃色の海があった場所。現在は一色の空と灰色のアスファルトが広がる地。薄着の男女が戯れ、甘く、芳醇な香りを醸し出した過去。フライトスーツの輩たちと、金属とオイルの臭いに包まれた現在。海鳥たちの歌声は、飛行機械の轟音に変わり、しばしの休息と安息を与えてきた空気は、野望と欲望を叶えようとする意思で充満する。空を眺めて機体に取り込み、今か、今かと参加者は士気を高める。

カインたちは、そんな中にいた。

遅れて自身の機体に取り込んだカインだったが、すでに機体の調整はナビであるアカネと、キャラバン隊の整備士であるダンによって、完璧に調整がなされていた。申し訳なさから、カインは何度もアカネに頭を下げていた。

「ごめん、アカネ。絶対勝たないといけないのに、こんなに慌しくバタついちゃって」

「いいんです。協力してもらっているのは私なんですから。それより怪我は大丈夫ですか？」

「大丈夫、操縦に支障はないよ。心配掛けてごめん」
「いえ……」

二人はこのやり取りしばらく繰り返し、搭乗を終えていた。

機器は正常に稼動し、操縦桿を押し込まれる事を願っているかのように、唸り声に似た轟音を上げる。同時にカインの鼓動も増す。依然覚悟無く、成り行きのままに。

そんな中、待機している飛行機械の大群へ向け、機器で拡張された陽気で甲高い声が響き渡った。

『さあ、さあ、さあ！ 準備は整ったのか？ 飛行士諸君！ まもなくレースが開催されるぞ。ここに集まったは総勢百の飛行機械だ。』

中にはもちろん前年の覇者だって健在だ！ A R Rに何度か参加した飛行士もいるだろう。完航した者、棄権した者もな。だがそんな中にも今年初参加の連中もいる。そんなビギナーちゃんたちに、ほんの少し優しい時間を与えてくれっ！

レースの説明をする。A R Rはここ、オーストラリア大砂漠大陸の横断を競うレースだ。単機で挑む者も、グループを持っている者も、中間地点であるエアーズロックを経由するのが大前提であり、そこを経由する航路は原則自由となっている。また、補給もエアーズロックのみで行うことが出来、それ以外の場所で仲間を待機させ、整備等を行うのは禁止だ。まあ、搭乗者が着陸させて、自分の手でいじくるのは自由だけどね！ これらを守り、誰よりも早くゴールを目指してくれ。

おっと、いい忘れていた。重要なルールだ！ このレースには高度制限がある。地上から百メートルが限界高度だ。そいつを超えた機体については即刻失格だから注意しろよ？ ズルして高高度を飛行して、障害無くゴール目指そうなんて輩は、二度とこの空は飛べないぞ！ 旧ビル群あり、岩山ありがこのレースの醍醐味だ！

このレースで賞賛されるべき者ならばこう答えよ！

航路が無いなら、迷わず操縦桿を押し込んじゃえ！

以上がルールだ！ このレースは千機もの監視ポットが上空に浮遊し、世界中に中継されてるからな！ ぜひ興奮冷めやらぬ飛行を見せてくれ！』

響き渡っていた男の話が終わる。同時にすべての飛行機械からエンジンの轟音が響き渡る。まるで地鳴りのようなそれは、レースが開始されるのだとすべての飛行士に知らせるのに、充分な役割を果たしていた。

カインの手が震える。

去年、一昨年は参加による緊張があった。しかし今回の緊張は違った。極めて勝算の少ない勝負で、しかし絶対に勝たねばならない。開始前、機体の準備は万全である。カインが操縦桿を引けばすぐ

にでも機体は走り出し、空へと運ぶだろう。それが出来そうもない自分が悲しく、情けなかった。昨晚、何も出来なかった自分の姿と、今の姿が重なって感じられた。

カインの不安な気持ちは、アカネにも伝わっていた。自分より年下のカインに、重責を与えてしまっている事が悲しかった。同時に、こんな気持ちでカインと一緒に飛びたくは無かった。もっと自由な空で。あの、大陸だの時のように。

シルバにはカインとの相性や飛行しての結果だからと言って、ナビを申し出た。でも違う。アカネには本心があった。

アカネがゆつくりと、でも確かに伝わる声で、カインに語りかけた。

「カイン、このレースが終わったら、私とシルバは本来の目的を果たさないといけないんです。それには翼が必要です。でも、私なんて言えばいいの分からないけれど、今が、その、楽しいです」

楽しい。とてもそんな気分ではなかったカインは、思わず後ろを振り向く。

アカネは続けた。

「私は、イズモで空を飛んでいました。始めは訓練としてです。そして、目的を果たす為、逃走のために今度は飛びました。どちらも辛かった。でも、でもね？　今は違う。目的はあるし、勝たないといけないかもしれないけど、大陸棚でカインと飛んで、初めて私は空が、飛ぶことが楽しく思えた！　だからねカイン、目的は要らないよ。勝ちたい。私はカインと飛んで勝ちたいよ！　このレースを楽しもう！　目的なんて、きっと後からついてくるから！」

アカネは、その強い意思を秘めた瞳をカインに向ける。最高の笑顔で。

カインの震えが止まった。同時に、腹の底からおかしさがこみ上げてきた。

「は、はははっ！　うん、そうだね。そもそも勝ちが見込めるレースでもないんだ。絶対勝とうなんて、そんなこと考える余裕なんか

俺にはないや！ わかったよ、とにかく精一杯飛んで、楽しもう」
お互い頷いて、前を向き直す。

アカネは周辺機器を操作し、レーダーを稼働させる。眼下に広がるディスプレイに、参加機である機影が映し出される。無数の赤い点滅の中に、事前に登録されたレン機の機影が青く点滅していた。

カインはもう一度、操縦桿を握り締める。吹っ切れた。カインは臆病者から、挑戦者へと変わる。その違いは大きかった。挑戦した者のみが届く頂へ向かう為には。そして澄み切った青空を強く睥む。

上空には、水素金属性で浮遊したスタート信号機が存在している。

右のランプが赤く点滅する。周囲の騒音が爆音へと変化する。

中央のランプが次いで点滅する。すべての飛行士が腕に力を入れる。

そして、左のランプが、青く点滅した。

A R Rの開幕が告げられた瞬間だった。

すべての機体が一斉に走り出し、我先にと空へ上った。

カインも瞬間的に操縦桿を引き、機体を一気に加速させる。全体重がシートにのしかかり、一瞬息が止まる。そして、次の瞬間には体が斜めになって行き、視界は、広がっていたアスファルトと荒涼とした大地から、吸い込まれそうな空へと変わる。

ライジン特有の圧倒的な上昇力で、見る見るその他の参加機を抜き去ってゆく。

カイン独特の感覚である、風に乗るような最高の上昇だった。

レーダーを見ていて、現在位置を確認していたアカネが、その初動のすばらしさに思わず感嘆の声を上げた。

「ナイス、テイクオフ！ 凄いよカイン！ 完全に上位は取ったよ！ これならいい航路を確保できる！」

アカネの心から楽しんでる興奮がカインに伝わる。先ほどの言葉に、カインを励ます為だけの嘘が一切も含まれていない事も同時に。

「自分でもビックリだね！ 過去最高なのは間違いないよ。……アカネ、ありがとう。アカネの一言で楽になれた。まあ、言葉遣いが途中からシルバに対するみたいになっていたけどね！」

カインは感謝を込めつつ、冗談交じりにアカネの言葉遣いを茶化す。

「き、気が付かなかった！ ごめんなさいなれなくて……」

アカネは赤面して言動を弁明する。

「いや！ むしろさっきの口調のほうが俺には良いみたいだね。

このレースの間だけだけど、一応パートナーなんだしさ！」

「……………」

カインは操縦に集中する為、後ろを振り向くことが出来ない。よってアカネの反応を直接確認すること出来なかった。声だけである。

「……分かった。さっきみたいに話しま……話すから。レース、がんばろうね！」

「もちろん」

話しながら、徐々に操縦が体に馴染んでいくのを感じる。辺りを見回す余裕も出来、カインは近くを飛行する機体を注視した。周りは、新聞やテレビなどのメディアに登場する歴戦の勇士たちが操縦する機体ばかりであり、カインのスタートが如何に巧く言ったかを知るには十分であった。

カインは彼らの操縦をひたすら真似た。スピードに乗った機体群はあつという間にゴールドコーストの巨大ビル群の付近まで接近する。同時にすべての機体がスピードを落として、突入に備えた。

カインも周りに合わせ、出力を抑える。

アカネが周辺をレーダーで見極めてゆく。

「カイン、もうまもなくビル群へ突入しますけ……するけど、なるべく制限高度ギリギリを飛行して。これだけの飛行機械が狭いビル群を通過したら、老朽化したビルが崩れてくると思う。なるべく広い、そう、メインストリートへ向かった方がいいかも」

確かにと思う。眼前に広がるビル群が崩れてきたらと思うと、背筋が凍る思いだった。

「了解。可能な限りビルには近づかないようにするよ」

会話してすぐ、ビル群が眼前に迫ってきた。気合を入れ直して、カインは再度、操縦桿を握り締める。それと同時に、通信が入ってきた。

『カインにアカネ、それとレン、シルバ。シンセイだ。もうまもなくビル群に入る頃か？ そうなれば通信は出来ない。次ぎ合うのは中間地点のエアーズロックだろう。俺たちは先回りして、お前らの機体を整備するための準備をしておく。無駄にさせるな！ なんとかしても二機で俺たちの所に来い！ まってるぞ！ 健闘を祈る！』
豪胆なシンセイの声がコクピット内に響き渡る。カインは少しだけリラックスできた。

そして数機の前頭団体の後に次いで、カインを乗せたライジンもビル群に突入した。ビル間を飛ぶ飛行機械のエンジン音が反響、共鳴し、凄まじい音量と振動となって、カインたちを襲ってくる。初参加のとき、この瞬間に混乱をしてしまった事を思い出していた。

カインは気を落ち着かせる意味も込めて、アカネに話しかける。

「今の位置取りはどう？ ほかの機体はどんな航路を取ってる？」

アカネは常にレーダーを目視し、カインの質問に迅速に答えられるよう、備えていた。

「ビル群突入段階ではトップ集団にいたけど、現在はほかの一団が、最短のコースでビル群を飛行してるみたい。でも大丈夫。最初に突入した私たちの一団の判断は正しいよ。みんなビル間に余裕のある場所を飛ばうとしてる。最短のコースはリスクが高すぎると思う。単機ならともかく、複数機で飛行したら、高確率でビルの崩壊に巻

き込まれると思う」

素早く、的確な返答にカインは感心する。ナビとして、最高の飛行士の学校へ通っているだけはある。そう思った。

「それじゃあ、しばらくは前に飛んでいる機体に付いていったほうがいいよね？　そうだ、レンとシルバはどうしてる？」

緊張で自身の機体を飛ばすことに集中していた為、レンたちに気を配る余裕が無かった。出来れば一緒に飛んで進みたい。カインにはそんな思いがあった。

「レン機は、スタートは私たちより遅れてたみたいだけど、大丈夫。私たちの信号を捕らえて、しっかりついて来てる」

「そっか、出来ればどっかで合流したいね」

そう思った矢先、アカネが警戒の声を上げる。

「危ない！」

油断していたカインは、慌てて視線を走らせる。話しているながらも、周囲を警戒して飛んでいたが、アカネの言う、危ない事柄は特に見当たらない。

「ど、どうしたの？　何かトラブル？」

アカネは慌てたように答える。

「え、ええ。レンの飛行機が、他の参加者の飛行機と接触しそうになったから」

「あの馬鹿！　無茶な飛行してんだろ！」

カインは呆れてため息をつく。いつもの冗談のようなノリだった。だが、再度アカネが声を上げる。

「またっ！　あ！　よかった、寸前でかわしてるみたい。でも……おかしいわ。さっきとは違う機体が、接触しそうになった。いくら密集して飛行してるからって、こんなトラブルは飛行士として最低限避けようとするものだもの。飛行機械同士の接触なんてありえない」

アカネの疑念を含んだ声がカインの耳に入る。二度の別の機体による接触未遂。カインには底座に頭に浮かんだ予測があった。

悪い、予測だった。

確かめるように、カインはアカネに質問をした。

「アカネ、レンの機体の周辺に、同じ機体が複数飛行し続けてたりしない？」

アカネは、カインに言われたことを確認する。言われて気が付いた。確かに青い点滅の周辺を、三つの赤い点滅が囲んでいる。

「あ、三機が不自然に近い距離で飛行してま……してる」

カインの予測は恐らく当たった。

「昨日の……あいつらだ！　レンに仕返しをしてるんだ。あいつらならやりかねない」

アカネもカインの考えに同意した。

「そうだわ！　ひどい！　あの人たち、レースでまでちよっかい出してくるなんて！　あつ、また！　なんてことを……レン機は高度を限界まで下げて飛行してる。シルバの指示かな。でも危険すぎる。接触を避ける為かもしれないけど、ビルの崩壊に巻き込まれでもしたら、墜落だけじゃなくて生き埋めにされてしまうわ！」

カインは酷く動転した。思わず操縦桿を左に倒し、急旋回しそうになる。その気持ちを、精一杯我慢して押さえ込む。今引き返せば、せっかくトップ集団に付いている好位置を失うことになる。それは勝算を著しく低下させる判断だった。冷静に、レースに集中せねばいけない。大人のように、冷酷でも対応しなければいけない。

出来なかった。

出来るわけがなかった。

する、つもりもなかった。

カインは謝罪を込めて、アカネに声をかけ……ようとする前に、アカネが怒りの声を上げた。

「カイン！　早く急旋回を！　私たちの位置からなら、上空から強襲が出来る！　あの人たちの機体を散らすことが出来る！　急いで！」

カインは開いた口をそのまま笑みえ変えて、答えた。

「了解！ 急旋回しながら高度を落とすから、しっかりとつかま
て！」

レースの序盤、カインたちは思わぬ所で躓いた。
だが、そんな事は今、どうでもいいことだった。

第二章 陸

カインが援護に飛翔した時、レンとシルバはかなり高度な飛行を余儀なくされており、地面と敵機との接触寸前な低空飛行に四苦八苦していた。狭いビル群では高度を上げるとビルに接触する恐れがあり、強襲を受けている今では、その確立はかなり高かった。ゆえに、あえて地面に接触しそうな飛行を、シルバがレンに指示していた。敵機に接触された場合、地面での接触なら墜落となり、相手を巻き込むことになる。ゆえに相手も接触を躊躇する。

「レン！ 左のビル群から離れるんだ！ 接触したら元も子も無いぞ！」

「分かってるよ！ でも広い場所を飛んだら上からあいつらに押しつぶされちゃうって！」

二人は互いに周囲を警戒しながらも、執拗に接近飛行を繰り返す昨晚の輩から、脱出の機会を狙っていた。レースのルール上、武器兵器の類の搭載を禁じてはいるものの、それらを使用しない妨害という名の攻撃は黙認されていた。よってレン機を襲う三機に躊躇は無い。

レンが苦悶の表情を浮かべながら愚痴を口にする。

「あー鬱陶しい！ せめてあいつらが機体の後ろについてくれたら！ そうしたら高圧空気の噴射で擬似乱気流を味あわせてやるのに。必殺最後っ屁！」

シルバはリーダーと目視による忙しない作業の中で、高圧空気についての話を聞き、冷静に分析をして答える。

「圧縮空気による攻撃か、難しいだろうな。彼らに低空飛行をしてまで私たちの後ろを取るメリットは無い。上から接近して墜落させるのが狙いだろう」

会話の間も、絶えず接触が試みられる。その都度、機体を地面に接触する限界まで下げ、対処をする。その繰り返しの一つ一つが命

がけであり、レンを疲弊させた。

焦り、苛立ち、疲労、それらがレンを軽率な行動へ導こうとする。
「くっそ！ 一か八か上昇して空中戦に……！」

シルバは操縦者の心理を理解しながらも、徹底して守勢を貫かせようとする。

「今は我慢だ。上を取られているんだ。無策に上昇すれば確実に落とされる。転機が訪れるのを待て」

戦闘経験に長けるシルバだからこそその忠告。レンは理解していた。しかし、レンは止まらない。

止まることが出来そうもない。

「転機？ 待っててもそんなもん訪れやしないうて。来なけりゃ転機だって自分で作ればいい。やらせて！」

シルバは徹底して止める。

「最終手段は最後に出すカードだ。足掻ける内は限界まで足掻くべきだ」

堂々巡り。もはやレンの精神は限界に達していた。シルバの声が耳に入らないほどに。

敵機が何度目かの接触を試みる為、上から着陸用の車輪で押し掛かろうとする。

シルバがそれを目視で確認、即座にレンへ伝える。

接触寸前の敵機をギリギリで交わす。

低空飛行を繰り返す。

機体を加速させる。

敵機が追跡する。

一か八か。

勝負。

レンは操縦桿を引く為、腕に力をこめる。
シルバは声を荒げた。

「駄目だ！ 耐えろレン！ 転機を待——」

シルバがレンの肩に手をかけた瞬間。

そしてレンが機体を僅かに上昇させた瞬間。

前方から、ビル群の狭い狭間を危険とさえ思える凄まじい速度で
降下をする、漆黒の機体が二人の視線に飛び込んできた。

レンは驚きと、そして満面の笑みで吼える。

「行くよシルバ！ 今が転機だ！」

守勢を徹して訪れた転機。猛るレン。それでもシルバは冷静さを
失わない。

「カインたちが私たちの行動を理解してなければ、意味が無い。こ
のままだと機体で交差することになるだけだ。銃器をカインの機体
が搭載していれば別だが。最悪、君の言った圧縮空気の乱気流に、
敵機ごとカインを巻き込む事に——」

「問題ない！」

カインの機体が急接近する中、シルバの忠告を遮るようにレンは
言い放った。

「最後っ屁は対カイン用の嫌がらせ技さ！ 以前何発も食らわして
る。条件反射ってやつだね！ カインはあたしがやろうとすること
なんてお見通しさ！ 大丈夫！」

完璧な断言。確定事項を答えたと言わんばかりのレン。

啞然としながらも、思わずシルバは笑いそうになる自分を堪える。
まったく根拠になっていない。自信満々で答える、カインに対する
レンの信頼感がおかしかったのだ。

ただ、掛ける価値のある信頼感だとシルバには思えた。冷静に、感情的に。

レンはシルバに対して言葉を発したと同時に通信機をオンにしていた。

一瞬の交錯、その瞬間に、カインに伝わるであろう一言を、短く伝えた。

『喰らえカイン！』

機体と機体がすれ違う。

カインの機体は敵機三機の中心を射るように飛行した。

突然の強襲に三機は散りじりに上昇せざる終えなかった。

レンは標準を合わせるように、敵機と同じ高度、速度で上昇する。レン機の背後にカイン機を含めた四機が入り乱れる。

その瞬間、レンは操縦桿横に設けられたレバーを引いた。

銀色に輝く機体の後部から、空間を歪めたかと錯覚を起こすほどの、圧縮された空気が噴射された。見えない螺旋状の気流は、一瞬にして背後を飛ぶ飛行機を巻き込んでゆく。

反動で、圧縮空気の噴射はレン機に爆発的な加速をもたらし、銀色に輝く機体は、背後を確認するまもなく、空域を脱した。

『喰らえカイン！』

三機に襲撃されているレン機を発見し、瞬時に特攻を仕掛けたカインの耳に届いた言葉は、分かりやすくも、腹立たしい記憶を思い起こさせた。

「助けに来てやったのになんて奴だ！ 誰がお前の屁なんか喰らうか！」

それだけ叫び、臆すことなくカインは三機の間へ飛び込むよう飛

行艇を操縦した。

周囲で混乱したかのように、狭いビル群で上昇を始める三機が確認できる。強襲は成功だった。同時にアカネが指示を出したが、

「カイン！ 敵機の後ろに付いて！ 威嚇でも敵に挟まれれば効果が――」

「駄目だよ！ 一刻も早く脱出だ！」

間髪入れず、その指示をカインは否定した。逆にアドバイスをする。

「急上昇するから、口を閉じて舌をかまないように！」

アカネはせっかく強襲を成功させたのに、離脱を目論むカインの行動に困惑した。だが反論する間も与えず、体に負荷か掛かり始めた。

レンの放った圧縮空気の乱気流が三機を巻き込み、カイン機に襲いかかろうとした瞬間、ライジン特有の圧倒的な上昇力が猛威を振るった。カインの得意な風を利用した飛行技術に、発生した乱気流が相まっての事であった。

二機の凄まじい速度での離脱に、襲撃を繰り返していた三機の間々はまったく気が付けないでいた。乱気流によって操縦不能に陥った機体を何とかしようとしている中での離脱は、彼らからしてみれば瞬間移動で二機が消えたことに、等しかった。同時に周囲のビル群が崩落を始める。

あつという間に場を離れながら、アカネはレーダー越しに、狭いビル群で踊る三機を確認し、また周辺のビルへ接触するのも確認した。

「目標三機の確認完了。三機ともビルに接触、移動は見られないから不時着してるはず。やったねカイン！」

アカネの明るい声に、カインは緊張を解いた。同時にスピードを落とし、上昇を止める。計器は上限高度スレスレを飛行していることを示していた。

「ふう。取り合えずよかったよ。闇雲に突っ込んだ割りに巧くいっ

た。でも、あいつ無茶しやがって。あわよくば俺まで落とす気だったな！」

憤慨したカインの声に、アカネは思わず笑ってしまった。

「ふふっ！ その割には的確な判断と操縦だったね。まるで事前にレン機がする事を知っていたみたいでし……だった。おほん、緊急離脱を開始した時は何事かと思ったよ」

「まあ、ね。あいつに對する警戒心の成せる技だったよ。所であつちはどこを飛行してるの？」

アカネはレン機を示す青い点滅をレーダーで確認する。

「ビル群の間を抜けて、隣の大通り跡を飛行してるみたい。通信可能距離だね」

「了解」

カインは通信機のスイッチを入れた。

『あー、そっちの被害状況は？ 怪我とか、機体の損傷とか、大丈夫かよ』

『機体の異常なーし！ 当機は快適な空の旅を満喫しております。怪我もしてない。シルバは……大丈夫だって。まあ、あたしの精神は今、非常に異常な状態ですが……』

通信機から聞こえるレンの声は、テンションが高くなったり、低くなったり、不安定な声色であった。それを感じ取ったカインが理由を聞いた。

『おいおい、変なテンションだな。なぜ？』

五秒ほど間が合つて、返答が来る。

『カインの登場で、あたしのハートが燃え滾つとります』
変な回答であった。

カインは理解を試み、戦闘をして興奮状態であるという意味合いで受け取った。

『まあ、無事って事だ。よかった、よかった。あんま興奮するなよ？ 戦闘後で興奮するのは分かるけどさ、レースはこれからなんだし、レースに遅れちゃったしね。取り合えず合流しよう』

今度は即答。

『……よっしゃ！ 合流してやんよっ！ この猛りを鎮めるには、何かを沈めねばならない』

『誰が合流するか！ 助けるんじゃない！』

カインがため息をつく間に、通信の対応者がシルバに変わった。

『カイン聞こえるか？ まずは礼を言おう。ありがとう。いい順位につけていたのに、すまなかったな。カインの言うとおり、すぐに合流しよう。まずはビル群を抜けてくれ。リーダーで見た限り、私たちはかなり下位だ。今更スピードレースをこのビル群で仕掛けることもあるまい。アカネに伝えてくれ。ルートαを行くと』

シルバからの通信は以上であった。カインはレンが何かを喋りだす前に通信を切る。そしてアカネに伝言を伝えた。

「ルートαか……そうね、リスクはあるけど、この遅れを取り返すには仕方なし、ね。わかった。カイン、私が指示を出すから、その通りにビル群を抜けて」

すぐに了承する。

「最終的には北へ抜きたいの。だからビル群を北上する」

「了解！ ルートを示していつて」

カインはビルとビルの合間を大きく旋回していく。

レンが興奮していたが、実はカインも感情が高ぶっていた。誰かを攻撃目的で飛んだことは無く、一歩間違えていれば自分がやられていた事を思い、体を身震いさせる。アカネは的確に指示を出し、カインは従って飛行艇を操縦する。戦闘とも言えない、ただの飛行だったかもしれないが、臆することなく、今も指示を出すアカネの声が、妙に頼もしく思えた。

第二章 漆

レン機と連絡を取ってから、カインはしばらくの間、飛行艇の操作に集中する事となった。ビル群ではスピードが出ず、入り組んだ建築物の残骸と、規定高度との戦いであった。

それでも右往左往と旋回を繰り返しつつ、時間をかなり掛けながら、カインは見事に第一関門のビル群を突破することに成功した。程よい疲労によって落ちかけた視力が回復したかのように、ビル群で阻まれていた視界が良好になった。

視界一帯に広がるのは、かつての化石燃料枯渇時代の大戦で出来た大地の傷跡、希少金属を奪い合った愚かな時代の副産物。デス・スウェル。凶悪な破壊兵器のもたらした傷跡が大地をえぐり、ありえない形で隆起している。それはまるで幾重にも連なる巨大な津波を一枚岩で彫刻したかのような光景であった。地図上、デス・スウェルは大陸の中央付近を横断する形で広がっている。

カインは飛行艇を若干減速させ、デス・スウェルの入り口で宙に浮く。以前ここに突入し、突破することなくレースを終えたことを思い出していた。確かに中継地点のエアーズロックへの最短距離はデス・スウェルの通過である。だが大陸の知識が少しでもあれば、ここは避けて別ルートを通るのが定石なのであった。デス・スウェルを迂回し、時間は掛かるが確実な道を皆は行くのだ。しかし、アカネの指示に従って飛行してきた先は、その避けるべき定石の場所である。

「アカネ、まさかここを？」

カインは苦い記憶から、不安そうに確認を取った。

「そう、ここがシルバの示したルートaの入り口。ここを抜ければ、まだ遅れを取り戻せるわ」

淡々と答えるアカネにあえて疑問を呈す。

「でも、ここは……岩のパイプが連なった迷路みたいな所だよ。以

前自分は迷った挙句に、上空へ棄権したんだ」

自信なさげなカインの声を聞いてなのか、アカネは明るい声でカインに言う。

「大丈夫！ 私もしルバも、ここをどう抜けるかを知っているの。誰も使用しない最短ルート、ゆえに訓練用の専用ルートの一つでもある。だから私を信じて」

カインと反比例したアカネの自信に満ち溢れた声を聞き、少しだけ自信が湧いたような気がした。

しばらくして、カイン機の背後へ銀色に輝くレン機が後れて到着をした。並行する形でレンは機体を寄せてくる。カインはレンとシルバの顔が確認できる距離まで来た段階で、通信回線を開いた。

『どうやら、ここを通るみたいだけど、どうする？ 少しだけ時間を置く？』

カインは戦闘の疲労を考慮して、レンへそのような提案を出す。レンはそれに軽快に答える。

『なーにビビッてんだよっ！ カインらしくない。あ、そうか、カインにしたらここは前回、情けなくも虚しく上空へ飛び去った思い出の地だっけ？ 悪い悪い配慮が足りなかったよ。でも大丈夫！先輩がしっかり先に飛んでやさしくエスコートして、あ・げ・る！』

『そうか！ それなら安心……て、なるか！ なんでお前がエスコートできるんだ！ あの時は、お前もここでリタイアだろうが！』

俺だけ情けないみたいに話をするな！ 喋るな！』

怒号が飛び交う中、冷静なシルバが話を進める。

『カインこのまま進もう。今日中にエアーズロックへなるべく近づいておきたい。日が暮れてしまえば、規定高度百メートルが牙をむく。リーダーがあっても飛行は不可能だ』

たしかに。カインは納得をした。目の前に広がる荒れ狂った大地の中で夜間飛行など、考えただけで身の毛がよだつ思いだ。自殺行為に等しい。

カインは決意をこめて言葉を発す。

『わかった。行こう、デス・スウェルへ』

『……かーっこいー、カインてば無理しすぎだぞっ。まるでお姫様を守る騎士みたいだ』

砕けたレンの言葉を聴き、カインは平行して飛行するレン機へ視線を送る。

僅かな距離の先で、レンはニヒルに微笑みをカインへ向けていた。そして挑発するように舌を出し、操縦桿を押し倒すのが見える。

陽光を反射させて輝くレン機は、カイン機を追い越して、デス・スウェルへと突入していった。

「……戦闘と、ビル群での飛行の後で、よくあんなテンションでいられるなあ。まあ、いいや、アカネ行くよ？」

少し、呆けていたアカネは、確認を問われて我に返り、慌てて答える。

「そ、そうね、早く追わないと」

カインが操縦桿を倒し、飛行艇をデス・スウェルへ向かわせる。そんな中で、アカネは先を行くレン機の行方をリーダー越しに捉えていた。

先ほどのレンは、どうも自分に対して笑みと皮肉を言ったように思えたのだ。そのせいで一瞬呆けていた。

だが、その余裕は、すぐに無くなる。

デス・スウェルへ突入したのだ。

カインは慎重に操縦桿を操作し、飛行速度を落として行く。左右へ機体を振りながら、隆起した岩肌に沿って飛行を開始した。

カインの目視では広く見える壁間でも、先へ進むと行き止まりになっていたり、狭くなっていたりする。その情報を、頭の中で記憶している空路とリーダーで照らし合わせながら、アカネはカインに指示を出さねばならない。

「基本的にはレン機と同じ航路を行くから、後に続けば大丈夫。でも、レン機が操縦ミスをしたり、空路の選択を誤ったりした場合、どちらもリタイアになる恐れがあるから、カインは常にレン機を追

いながら、私の指示とレン機の空路を照らし合わせて飛行して」

「りよ、了解」

アカネは操縦に余裕が出来そうな合間を縫って、注意をカインへ呼びかける。カインも必死に耳を傾ける。しかし右へ旋回したら次は左、行き止まりかと思えば、地面すれすれの穴を通過する、などといった操縦に四苦八苦を繰り返し、正直アカネの言った注意を続ける自信はなかった。前に行くレン機を追うので精一杯であった。それに、前に行くレン機も、カイン以上に慎重な飛行をしていた。速度を落とし、空路を確認しながら飛行をしているようで、後ろから見ていたカインからも、その大変さは伝わってきた。

“ 不用意に前を取りやがって、どっちが無理してるんだか ”

そんな言葉を心の中で反芻しながらも、カインはレンがそこまで馬鹿ではないことくらい理解していた。おそらくアカネとシルバの経験差を考慮して、シルバを乗せる自らが先行したのだと、カインは当たりをつけていた。しかし、わかってはいても、

“ 格好いいのはお前じゃないか ”

などと考えてしまう。レンにいい所など見せたいとも思わないが、カインは昨日の無様を挽回するチャンスが欲しいとは考えていた。だが、思考は続かない。続けることなどできない。すぐにカインは操縦へ集中して行く。

デス・スウェルに慣れるまで、物事を考える余裕など無かった。最後にカインが思ったこと。それは“ 慣れるわけがない ” だった。

大陸を割るデス・スウェルは容赦なくそこへ挑む者の体力と精神力を奪い取る。それはカイン、レン、両名も例外ではなく、レース開始から、太陽が僅かに傾きかけた時間を経て、忍び寄る蛇のよう

に襲い掛かっていた。

カインの視界には、明らかに速度を落とし、不安定な飛行を見せるレン機が映っている。普段であれば冗談の一つでも言ってやりたい所ではあったが、自身の状態がすでに冗談ではなかった。

緊張し続けた腕の筋肉は痛みに悲鳴を上げ、絶えず目視を続けた目は、岩肌の照り返しにより、赤く充血していた。アカネが適度に声をかけていなければ、津波のように荒れ返した岩肌に接触し、墜落していたかもしれない。そう思えた。

それでも、ここまで耐えれたのは、一つのゴールをアカネから揭示されていたからである。

「デス・スウエルが出来た原因はね、大戦時、水素の燃料である海水を大陸に運ぶ為に建造された、巨大な下水施設を破壊したからなの。私たちはその旧下水跡へ向かってるのよ。場所で言うところのエアーズロックとゴールドコーストの調度中間くらい。そこまで行けば、こんな荒れ果てた場所を飛ばなくて済むから。それまでがんばって！」

下水道跡。カインにはそれが、デス・スウエルの回避と、どう関係しているのかわからなかった。答えを聞いても、アカネは完全な回答をよこさず、

「行けば解るよ。今はその事を知るより、どうそこまで行くかを考えたほうがいい」

と、だけ言われた。不満ではあった。

だが、絶望的な地帯であるデス・スウエルを的確にナビ出来るアカネの存在と、道程の半分で苦痛から開放されるという情報が、ここまで耐えさせた揭示であり、十分でもあった。

カインは機体を大陸棚の時のように、地面に対し垂直に操縦しながら、

「あと、どれくらい？ アカネ……」

心底疲れきった表情で聞いた。

アカネも実はナビとして、絶対に間違えの許されない緊張のもと、

指示を出し続けていたので、かなりの疲労が蓄積していたのだが、表には決して出さず、淡々と答える。

「もうすぐ、よ。道程で言えは八割を超えかかっている。だから、カインがんばって」

アカネのハキハキとした元気な声を聞き、少しだけカインも元気をもらった気がしていた。

もう少し、もう少しと心の中で唱えながら、機体を小さく旋回させてゆく。

前方のレン機が岩陰に隠れ、岩の波に吞み込まれたかのような、錯覚に陥りながらも、気をしっかり持ち、後に続いてゆく。

もう少し、もう少し。元気の出る呪文のようだった。足が痺れ、体は機体の熱で火照りっぱなしだった。機体を地面すれすれまで急降下させる。

もう少し、もう……まだ？

アカネのもうすぐから、どれくらい経ったのかさえ、カインにはわからない。一分のようにも感じるし、一時間のようにも感じる。

もうすぐの、すぐっていつだ。

そう思ったとき、レン機が前方に現れた壁に沿って上昇していく。諦めにも近い感情が芽生えていたカインは、もはや無心でその跡を追跡した。

上りきったレン機がカインの視界から消える。辟易しながらその様を見ていたカインは、手元の通信ランプが点滅している事に気が付く。

億劫そうに通信をオンにしたカインの耳に届いた言葉は、レンの安堵と喚起の入り混じった声だった。

『ふーわあ！ 抜けたあー。カイン早く来なよ！ 最高の景色が待てるよん！』

“抜けた”その一言でカインの瞳に光が戻り、操縦桿を握る腕に力が入る。

カインは機体を加速させ、一気に壁を上昇した。

開けた視界の先、そこには遙か先までデス・スウェルが広がっていた。荒れ狂った大地、津波の連波のような情景。

それでも、レンの抜けたという意味が解る。

今までのデス・スウェルは、二百メートルほどの隆起が飛行を困難にし、危険をばら撒いていた。だが、目の前の隆起の連鎖は、精々八十メートルほど。

つまり、レースの規定高度に達していないのだ。それは高度八十メートルから、百メートル以内の通常飛行が可能ということの意味していた。

「アカネ……これって——」

カインは小刻みに震える唇に築かないほど、動転してアカネに尋ねていていた。欲している回答が来るかの不安。来るに違いないという確信。言ってくれという願い。

アカネは言う。

「おめでとう！ まだレースの半分も終わっていないけど、これでデス・スウェルは抜けたと行っていいわ！」

カインは黙る。

振り返る。

そこには祝福を込めた笑みを浮かべるアカネの顔がある。

長い沈黙だった。そして湧き上がる感情が、ゆっくり腹から喉へ、喉から口外へ漏れ出す。

「いっやつたああああ！」

『○\$%☆あゝえゝういおゝ！』

同時に通信機から大音量で割れた音が、カイン機のコクピット内で響き渡っていた。

その音量が僅かに小さくなり、音源から離れ、シルバの声が伝わる。

『カインよくやった。ナビありとは言え、デス・スウェルの飛行をここまで出来る人間は決して多くないんだ。しかもレンや君のような年では、まず居なかったと断言できる。まだ、レースは終わりで

はないが、安易に喜んではいけませんが、誇っていい事だ、これは。これでレースに勝てる可能性が出た。気を緩めずに、一気に中間地点のエアーズロックを目指そう!』

シルバの飾りつけのない激励。それがカインには何よりも嬉しかった。託された重圧を少しでも達成出来た充実感と安堵感に、思わず泣きそうになる。アカネが後ろに居なければ実際泣いていたかもしれない。それくらい感情の高ぶりがあった。

通信機は再び大音量を発する対象へ切り替わる。

『よっしゃ! こっからは勝負だカイン! どっちが先にエアーズロックにたどり着くか賭けようぜ!』

疲れが吹っ飛んだカインは、いつもの様にレンに乗る。

『上等じゃんか。大陸棚の続き、見せてやるよ。そっちは何を賭ける』

レンは獲物を刈り取るかのように、すぐ答える。

『あたしの大切なものをかけるよ……命より大切なもの。それに見合う物をあんたも賭けなっ!』

カインは少し考える。命、いやいやありえない。そもそもレンの大切な物とは何なのか、それが解らない。だから答える。

『よおーし! ならお前が勝ったらどんな願いも聞いてやるっ!』

カインは言うってから後悔しつつも、後には引けない。

レンもカインの性格をよく知っている。

『約束だぞカイン! 男に二言はないからなっ! あたしは女だけど二言はないよ。だから負けたらキツチリあたしのコレクションの中から“カイン、幼き頃の嬉しは恥ずかし写真集、前編”を進呈しましょう』

カインの頭に血が上る。

『今すぐ渡せー! その賭けの釣り合いはどこにある! ってかなんで前編しか賭けないんだ! 後編あるの? あるのか? 渡せー!』

『後編は……あたしの口から言わせんなよ……ぼっ』

カインは口を開きっぱなしで呆然とし、アカネはカインの肩に手を当て、まあまあと、なだめる。

それでもカインが口を開こうとした。その瞬間、まったく予想だにしない轟音がカインの耳に響き渡る。

先ほどまで前方にいたレン機が消えていた。

変わりに噴煙が辺りに舞い上がっている。

「レン？　なんだ？　どうなってんだ！」

カインは頭の中が真っ白になった。

脳裏に単語がよぎる。

“墜落”

「どこだ！　レン！　どこだ！」

カインはただ叫んで噴煙の下を必死に探す。カインの手が操縦桿を押し倒そうとする。

それをアカネの声が遮った。

「カイン！　大丈夫、レン機は噴煙の前方を飛行してるわ！　レーダーで捉えてる。それより上！　未確認の飛行体が急接近してる！　最警戒で飛行して！　さっきの噴煙は機関銃による攻撃よ！」

攻撃。想定外の単語。

機関銃。聞くはずのない名詞。

カインはそれら単語を頭で認識できないまま、状況がわからない中で、上空へ目を向ける。

薄っすらと焼け始めた空に、夕日よりも真っ赤な機体が、こちらへ急降下をしていた。

第二章 捌

カインは咄嗟の判断で、再度デス・スウェルの断崖へ高度を下げてゆく。そのままの高度を維持して、銃弾の的になるのを避けようとしたのだった。

そして、アカネの指示を待つ。が、一向にアカネは言葉を発さず、カインは緊急時の中、一瞬だけ後ろを振り返った。

「アカネ？」

その一瞬でカインは再び視線を前方へ向け、操縦に集中する。デス・スウェルは少しの油断も許さない。アカネは青ざめ、ただ上空を眺めながら。一言二言つぶやいて。

「深紅の水素艇……間違いない。でもなんで、この場所が？ ヴァーゼン」

カイン機よりも少しだけ前方、レンもカイン同様、デス・スウェルへ突入の判断を実行していた。突然の強襲に若干の動転はしたが、それでも冷静さを失わず、レンは操縦に集中する。

後部座席では、アカネ同様シルバが上空の視線を向ける。

「芳しくない事態になったな。追っ手はヴァーゼンか。しかしなぜこの場所が？」

レンは、少し声を荒げてそんなシルバに問いかける。

「一人押し問答は寝る前にっ！ どうする？ もうすぐ接近されるし。この際レースは捨てて——」

レンの声が最後までシルバに届く前に、二次攻撃がレン機の飛行する上の岸壁を吹き飛ばす。レンは上からの落石を必死に回避しながら、奇跡とも言える操縦技術を発揮して、デス・スウェルを進ん

だ。

シルバはまだ、考える。なぜこの場所がという考えは、済んだ事とし、現状を必死に分析した。

「今の攻撃、明らかに私たちに向けての物だったな。最初の攻撃もそうだった。なぜ、カイン機ではなく私たちを狙う？」

シルバの悪い癖。アカネが登場していれば、そう小言を発していただろうが、レンは操縦に全神経を集中しながら、口を開いた。カイン曰く、体とは別の概念で動いているらしいその口を。

答えられるはずのない回答を、答えられるだけの情報として、レンは持っていた。

「あー、それはたぶん、レースに参加する機体登録に、この飛行機は搭乗者としてシルバとアカネの名前で登録したからだ、あたしは思うわけで……」

レンから発せられた言葉にシルバは、一気に疑問と対策を思考として巡らせた。

「君の行動に幾つかの質問はあるが、今は情報だけを元に対策を練る。後で話を聞きたい」

「……了解、ただ、カインたちにはだまってる」

なぜ、レンはこの機体にシルバとアカネが搭乗すると偽ったのか、事情を知らないはずのレンが取った、明確な意思の働いた行為。あるいは厚意。故意。

それらすべてを一旦、胸に収め、シルバは行動に出る。

「約束しよう。レン、カインとアカネに繋いでくれ」

操縦に集中するレンは、口で答えず行動で示す。

カインは二度目の襲撃を、岩を銃弾が削る爆音だけで確認する状

態に追い込まれていた。先ほどまで、追跡する形で飛行していた為に、目視でレン機的位置を確認できていたが、一度はぐれたら、入り組んだデス・スウェル内での合流は出来ない。よって、アカネの確認するレーダーに映し出された点滅だけが頼りだった。

それら状況がカインを苛立たせる。

「くそっ！ レース中に襲撃なんて何考えてんだ。アカネ、レンとシルバは大丈夫？ どっちへ飛べばいい？」

問われたアカネも、冷静で居ないといけない事を理解はしていたが、自身の敵が、巻き込んだ人間を襲っているという状況に、冷静さを少し失いかけていた。

「ひ、飛行はしてるわ。でも、飛ぶのに必死みたいで、ルートや方向を無視して進んでる。私じゃナビ、出来ないっ！」

「そんな……」

押し黙るアカネ。カインは不安に腕を、体を震わせながら、ひたすら低空飛行でデス・スウェルを進んだ。

二人の不安を消し去ったのは、レン機からの通信を伝える、信号機の発光だった。

『私だ、緊急時なので手短に話す。アカネ、カイン、君たちは通常ルートで飛行してくれ。私たちが囷となって、別ルートを飛行する。ヴァーゼン……深紅の水素艇だが、とある事情で、奴はこちらを――』

再度、爆撃音がカイン機の前方で響き、通信が途絶える。

『こちらを狙っている。最悪レースを離脱することになるかもしれないが、君たちは進んでくれ。健闘を――』

またしても爆撃音。

通信は再開しなかった。

カインは慌ててアカネへ確認を取る。アカネはレーダーをすぐに確認する。

「大丈夫。飛行しているわ。でも、少しずつ上昇しているみたい。本当に囷になる気だわ」

カインは考える。シルバと出会った時、シルバがいかにアカネを大事にしようとしていたかを。あの通信は、最優先事項を考えてのことだったのだろうと思う。

“あの子を失えば、もう終わり”

シルバが口にした台詞。それが何を意味しているのかまでは、カインにはわからない。でも、レースでの操縦を託してくれたシルバの決意を、尊重しなければいけない気がした。

だからカインは考える。考えて、考えつくした上で、その答えをアカネに口にする。

「シルバとレンを犠牲には出来ない。こっちもリスクを、最低限のリスクを負うから。許して欲しい」

シルバの決意、それよりもシルバとレンの安否のほうが、カインには重要だった。最優先事項は、犠牲を払ってまで守ることじゃない。そう思えた。

アカネはすぐに答える。迷いは無い。自分が死ぬわけにはいけない。だが、シルバとレンの犠牲などゆるせない。

「解ったよ。どうすればいい？」

即答で了承するアカネを、カインは少し好きになった。アカネも優先事項を常に考えているが、シルバと違って、アカネは感情のほろが上に立つ。自分に少しでも似ている気がした。

「上昇して、レン機と敵機の間を通過する。レン機を狙う、とある事情ってのはよくわからないけど、対象がもう一機存在すると思わせられれば、レン機だけを執拗に狙い辛くなると思うんだ。だから、敵機の間を抜けて、すぐに離脱できる航路を見つけてほしい」

アカネは緊張した表情をしながらも、すぐに了承の意思を伝える。「了解。レン機は敵機とタイミングを合わせて、上限高度ギリギリで接触するように飛び出したい。私たちもその瞬間を狙おう！それと、退路については案があるの、だからね、なるべくヴァーゼン、敵機の操縦者だけど、アイツを引き付けて飛行したいの。今から言うように飛行して。まず――」

アカネは退路を説明しながら、そしてカインは機体を上昇させながら、決意を固めてゆく。

シルバの冷静な判断は、アカネとカインの感情的な行動力を計算にいられていない。

デス・スウエルの上空、深紅の水素艇は、獲物を狩る鷹のごとく、旋回をしながら攻撃のタイミングを図っていた。

搭乗者である男、ヴァーゼンは、機体同様に染め上げた赤い髪を片手でかき上げ、余裕の表情で届くことの無い挑発を口にする。

「そーうらっ来い、来い、来い！ 落石と迷路に耐えかねた鶏の絶叫を俺に聞かせてくれ！」

ヴァーゼンは眼前に設けられた最新鋭のレーダーは、レン機の高さ、速度はもとより、見えていない機影さへ映し出していた。そのレーダーは、レン機がこちらの攻撃のタイミングを図って反撃を仕掛けようとしていることを、簡単に知らせている。だからこそ、ヴァーゼンは侮蔑的な笑みを浮かべ悦に浸る。

レーダーに映し出された、もう一機のレース参加機が、徐々に上昇して空域を離脱しようとしている動きを見せていたが、逃げる観客にに興味は無い。

岩陰に隠れて飛行していた銀色の機体、レン機は、敵機の旋回を

確認し緊急上昇のタイミングを図った。

レンは操縦桿を強く握り締めながら、ビル群で使ったと同様の圧縮空気の噴射をするレーバーを確認する。

銃器を積んだ機体に飛び込むという行為は、思った以上にレンを緊張させた。唇が震えているのが分かり、歯で噛んでそれを抑える。怖かった。

死ぬのが嫌だった。

でも。

後悔はしていなかった。

レンは、始めから機体の登録をした際、シルバとアカネの名前では飛ぶ気だった。レンはシルバとアカネがどういう存在なのかを完全には知らない。だが、二人を追っている組織がどういう存在かは嫌というほど知っていた。カインの親が戦った相手、カインにも話していない自分の立ち位置。色々な思いが交錯した。

どうでもよかった。

世界の行く末も、過去の過ちも、レンには関係の無いことだった。ただ、カインを巻き込んで欲しくなかった。

レンは何度か深呼吸をし、自身の決意を再確認する。

“どんな障害もあたしが請け負う”

それは責任、そして罪滅ぼし。

レンは後ろで上空を注視するシルバへ最後の確認を取る。

「相手に突っ込む。それで敵の攻撃の前に圧縮空気の超加速で離脱する。それでいいんだな？」

シルバは視線を上空から外さずに答えた。

「そうだ。あの機体は最新鋭の装備を搭載しているはずだ。おそらくこちらの位置も把握されている。だが、この機体は特殊だからな。突っ込んできた機体が方向を変えて一気に離脱できるとは思わないだろう。戦う意味はない。こちらに注意を引き付け、いかにカイン

たちから距離を取らせるか、それがすべてだ」

「単純明快な作戦だねー最高だ！」

レンは強がりのようにおちゃらけて、強い視線を上空に向ける。

“オーケイ、単純明快。カインたちが助かればいいだけの、鬼ごっこが始まりだ。”

レンは思いっきり操縦桿を引いた。

機体は一気に加速を始め、デス・スウェルの壁を這い上がるように進んでゆく。岩肌が凄まじいスピードで窓の外を流れて行き、すぐに青い空へと変わる。岩陰に隠れた機体が、陽光を浴びて燦然と輝く。

同時に深紅の水素艇からの攻撃が再開される。レンはデス・スウェルを抜け出すと同時に上限高度ギリギリを急旋回で飛行して襲い掛かる機関銃の弾丸を回避していく。

深紅の水素艇は遊んでいるかのように、その急旋回に合わせて銃撃を続けた。

徐々に高度を下げ、レン機の後ろに付こうとする。

最新鋭の水素艇、水素金属の浮遊効果が強い為、レン機のような旧世代の機体とは、著しく飛行方式が違う。レンは飛びながらそれを実感した。

レン機が航空力学に基づいた空気抵抗で浮遊するのとはわけが違うのだ。すでに浮力のある水素艇は、航空力学を無視した急旋回や方向転換を可能にし、上下左右に、蜂のように飛行する。

「なんて動きしやがる。ふわふわ飛行しやがって、どっからでも仕留められるってか？」

レンはボヤキながら、デス・スウェルから飛び出した岩を盾に逃げ回る。逃がされている。深紅の水素艇は未だ遊ぶようにレン機の背後を取り、レン機の飛行軌道に合わせて銃撃を繰り返す。

「どうする？ 赤いのが本気になる前に逃げ出す？ これじゃあい

つの気まぐれで撃ち落とされるって」

シルバは答えない。ヴァーゼンの攻撃から、どのようにこちらを仕留めようと考えているのかを、必死に逆算していた。ヴァーゼンはこちらが旋回する度にギリギリで回避できる攻撃を繰り返している。常にはいい位置を取りながらである。つまり、回避飛行をしている内は致命的な攻撃を仕掛けようとしていない。

ヴァーゼンらしい。シルバは士官学校での事を思い出し、思わず心の中で呟く。常に相手が屈辱と思われる手段で、攻撃方法を選んでいた男だ。おそらく、機体の機能差を活かした機動力で勝ろうとは思っていないのだろう。

旧世代の機体が唯一最新鋭の水素艇に対抗できるもの、シルバはそれを飛行速度だと考えた。

つまり、直線でのスピードによる離脱を図ろうとした瞬間、そこを狙っているのである。

シルバは、再度レン旋回を試みている中、冷静に判断を下す。

「このまま旋回して、相手が背後を取った瞬間、直線で飛行してくれ。相手はこちらの背後を取るように、急速接近を図るはずだ。その瞬間が、タイミングだレン」

レンは急旋回による重圧に体を傾けながら、答える。

「よし来た！ あの野郎の顔面に一発かましてやる！」

旋回をしながら、高度を少し上げ、デス・スウェルの岩肌から完全に離脱する。

眼前に障害物の一切無い空が広がる。

出力を最大まで上げる。

直線勝負。

凄まじい重圧がレンとシルバにかかる。

背後には、深紅の水素艇が凄まじい勢いで迫り来る。

百メートル。

五十メートル。

二十メートル。

レンは、相手の指が射撃ボタンを押す音が聞こえてくるかのよう
な、そんな気がして、全身に寒気が走る。思わず体が硬直しそうに
なる。

「今だ！」

背後からシルバの声が響く。

レンは考えず、考えが回らず、操縦桿を右に倒しながら、ただ反
射的にレバーを引いていた。

圧倒的な重力がレンとシルバに襲い掛かる。圧倒的な速度と角度
で曲がる急旋回。

絶妙のタイミングであった。

ヴァーゼンの撃った弾丸は強烈な空気の壁に軌道を逸らされ、捉
えたはずの対象物から離れてゆく。二次攻撃を仕掛けるタイミング
はすでに無い。ヴァーゼンは空気機関の存在など知らない。ゆえに
目の前で起きた事象を理解できない。機体が気流の乱れで激しく揺
れる。

そして、先ほどまで目視していた機体が忽然と姿を消したのだ。

「は、ははははははははははっはあー。最高だ！」

空気の渦に巻き込まれた深紅の水素艇は、デス・スウェルの岩肌
に投げ出される。

第二章 玖

決まった。レンは油断ではなく確信した。シルバとしても予想を超える戦績であった。ギリギリの逃避行から、レースの離脱が精一杯であると思っていたのだ。

凄まじい速度で飛行しながら振り返り、笑みを浮かべるレン。

だが、その笑みが凍りつく。

深紅の水素艇は、岩に激突する寸前で目に見えるほどの、強力な電磁波を放っていた。機体を卵の殻のように覆った電磁波は、岩肌を削り取り、磁石が反発するかのように、機体を岩から引き放つ。そのまま、レン機の加速にも劣らない速度で、緊急旋回をしてきたのだ。

「惜しい、惜しい、惜しいねえ！ 目が覚めたぜ鶏の絶叫でなあー。でも、さすがのシルバもおー、試作機であるこの水素艇の機能まではしないいい！」

ヴァーゼンは勝ち誇った侮蔑的笑みを浮かべ、速度を落としていくレン機を投影したリーダーに話しかける。

レンは、決まったはずの一撃が空砲に終わった事に動転しつつ、無駄とも思いながら再度、空気の圧縮を開始する作業に取り掛かる。「シルバ！ どうなってる？ どうする！ 相手とのあの距離じゃ圧縮空気は僅かしか作れない。離脱か、無駄な足掻きをするのか？ あたしは足掻くよ！」

シルバは目視で見た光景を僅かな時間で分析する。おそらくは強力な超伝導を発生させたという事、また、発生をさせるには、高純度の水素金属が必要だという事。そして、敵機は超伝導の反発力で加速しているという事。傾向、対策。

シルバは緊急の策をレンへ向けて伝える。

「いいか、奴はあの加速のままこちらに襲撃を仕掛けるだろう。ギリギリまで引きつけるんだ。そして、僅かな加速でもいい、デス・スウェルへ再突入をするしかない！」

無茶な無駄。そして無謀。

レンはそう思い、しかし納得する。

この飛行に残された最善の策は、いかに派手な墜落をしたかのよう
うに、相手に見せるかだ。もう追う必要が無いという事を認識させ
ねばならない。

「了解！ しかし男だねー。あたしを巻き込んでおいて、どうなっ
てもカインたちを助けるってのに覚悟を感じるよ。あたしも見習う」

この舞台、死ぬ気で死を演じる。

機体は徐々に減速し、深紅の機体に捉えられていく。

圧縮空気は僅かしか貯まらない。

「カイン急いで！ 完全にレン機は捉えられてる。間に割って入ら
ないと撃墜は必至よっ！」

カインたちは、デス・スウェルを攻略出来るギリギリの速度で飛
行していた。入り組んだ岩壁を旋回、僅かに降下、そして上昇。レ
ン機の飛行する方向を目指し、さらに加速させてゆく。カインは緊
張と、はやる気持ちで力みながらも、操縦桿を握る。前だけを直視
し、不規則な岩々を交わす。上昇していく中で切り替わる視界。視
界に広がっていく橙色の空。デス・スウェルを抜ける。橙色の空で
力を失いかけた太陽の光を精一杯補助しているかのように、陽光の
反射で輝く飛行機が見える。

カインは自身を鼓舞するかのよう、敵を威嚇するかのよう、

たた叫ぶ。

「いっけええええ！」

漆黒の機体は一気に加速してゆく。

ヴァーゼンは徐々に詰まる標的との距離に狂喜しながら、機銃の照準を合わせる。

「それじゃあこの舞台も終焉だあー。幕引きは華麗な爆発で祝いの華を咲かせるもんだよなあー」

そして、ゆっくりと引き金に手をかける。

レンにとっては一対一の負けの決まった勝負。

ヴァーゼンにとっては勝利の約束された遊戯。

カインにとっては失敗だけは許されない円舞。

三者三様の交錯が巻き起こる。

後方を飛行するヴァーゼン機では完全に前方の機体をとらえたと、電子音が銃弾の発射を促す。

レンは覚悟を決め、せめて機体は損傷しても、自身とシルバに弾が当たらないよう、機体を反転させてゆく。そしてただ、目を瞑る。その瞬間だった。カインの操縦する機体が射程に捕らえられたレン機の間割って入ったのだ。絶妙のタイミングだった。

突然下方のデス・スウェルから飛び出してきた漆黒の機体の登場で、ヴァーゼンは予想外の事象に攻撃を遅らせてしまう。レンは絶望的だった刹那の時を得て、瞬時に僅かな圧縮空気の噴射を実行する。

呆然としたヴァーゼンは、すぐに最後となるはずの銃撃を繰り出した。

だが、その僅かな時間は決定的だった事象を覆す。

弾は寸前の所で加速したレン機から外れる。ヴァーゼンが怒りに発狂するのと同時に。

「ばあああああ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 観客の分際で何シヨ一の舞台に登ってやがんだ？ 覚悟はあるんだろうなあ、このシヨ一は悠久に愛想尽かされた喜劇だったのによぉーっ！」

三機は交錯の後、それぞれに分かれて行く。

レン機は僅かな加速ではあったがデス・スウェルへ再突入する。ヴァーゼン機は敵機を銀色に輝く機体から、漆黒の彩る機体へと照準を変えた。

そして、舞台へ躍り出たカインは、すぐにアカネの指示にあった通りの行動を取った。通信機の電波帯を共有のダイヤルに合わせる。マイクに向かって声を発す。

『こちら？ 鍵？ の運び手。すぐに攻撃を中止せよ。繰り返す、すぐに攻撃を中止せよ！』

カインにとって、その言葉の意味する所、鍵とは何なのかが解らなかった。ただ、それを告げることが言われた作戦の一つであったし、またアカネに言われた作戦を成功させる、文字通りの意味の鍵であった。

ヴァーゼンは怒りをすぐに冷まし、もう一度漆黒の機体へ照準を変える。怒りをぶつける対象としてでなく、落とすべき標的として向けられた対象は違ったが、カインの声は共有の電波帯であった為に、レンとシルバにも届いていた。

「あーの馬鹿ーっ！ 何飛び出してんだ。こっちの覚悟も知らないでええ！ な、泣かす気か！」

レンは無鉄砲なカインに対する怒りと、湧き上がってくる喜びに、感情を抑えられなくなっていた。逆に、後部座席に座るシルバは頭を抱える。守るべきはずの存在が、自らのだと告げた事に、頭を抱えざる終えなかった。

「アカネ、何を考えている？」

レン機は高度を下げながら、デス・スウェルを単機で進む。

交錯の後、すぐさま攻撃は再開された。カインは操縦席の頭上を掠め飛んでゆく弾丸を目の当たりにし、恐怖とも戦いながら飛行した。

後部座席から、冷静さをギリギリ失っていないであろう声量で、アカネが指示を出す。

「カイン、出来る限り旋回をしながら、南南西の方角に飛行して、さっき説明した目的地まで逃げ切れれば、私たちの勝ちだから！」

カインは振り向かず頷く、自身に言い聞かせる意味合いもあった。カインには、アカネの作戦の全貌は見えていなかった。説明を受けはしたが、先ほど発した言葉の意味も解らず、その目的地とやらも良くわからなかった。言われた事の一つ。

？指示した先に、機体が入る程度の大穴があるの。そこまでヴァーゼンを引き付けながら飛行して、そして穴に飛び込んで？

飛行艇で穴に飛びこむ。まったく意味不明であった。だが、アカネの指示した通りに通信をしたら、敵機はこちらに標的を変えてきたのだ。今は、アカネの言葉を信じるしかなかった。

いや、信じる以前に、考えを疑う余裕などなかった。

カインが最短のルートで旋回をして速度を上げても、水素艇である深紅の機体は急角度で方向を変更し、追跡をしてきていた。そのあまりに常識はずれの飛行方法に、カインはただただ驚愕した。

「す、すごい、まるで抵抗が無いみたいに飛んでくる！これじゃあすぐに追いつかれて撃墜されるぞ！」

カインは出力を、急旋回で出せる限界値まで引き上げて応戦した。

僅かな意識の隅に、限界高度の事を考えて。

「もう穴が見えるから。だからあと少しがんばってカイン！」

アカネは苦しうに、しかしカインを鼓舞する。

機体が激しく振動し、固定されているはずの機器や部品が、悲鳴を上げるかのようにガタガタと音をたて始める。

最大出力と急旋回で、搭乗者に掛かる圧力は凄まじい物があった。カインはテスト飛行で何度かこの圧力を経験していたが、普段水素艇でなれていたアカネには、即ち旧世代の機体による飛行は慣れていない。だから意識が飛びそうになるのを必死で堪えていた。

それでも、弱音を吐くわけにはいかない。ナビとして、操縦者に不安や気遣いを与えてはならないのだ。カインに聞こえないよう、祈るように呟く。

「早く、早く……」

敵機がさらに接近してゆく。

視界に広がるデス・スウェルの岩波が凄まじい速度で流れてゆく。

銃弾は、岩肌を削り、弾く。

そして、ついにはカインの操縦する機体に弾が当たった。

操縦桿が強く振動する。コクピット内に不気味な金属同士の衝突音が響き渡る。その音はカインとアカネの心臓を握りつぶすような音であった。幸い音は音だけで終わり、飛行は出来ていた。だが、銃弾は切れることなく発射され続けている。もはや撃墜は時間の問題だった。

深紅の機体が離れていた距離をつめ、完全な射程圏内へと侵入してくる。カインは次の攻撃でやられるという、絶望的な確信があった。それほど距離が詰められていた。

百メートル。

五十メートル。

通信が入る。

『終わりだ……』

カインはその感情の入っていない声に、心底恐怖した。人を殺そうとする人間の声は、知らない男の声であっても、恐ろしいほど冷たかった。

全身が硬直するのがわかる。

死ぬ。カインは覚悟が出来ぬままに認識した。意識が飛ぶ、瞬間、「カイン！ 下へ！」

アカネが大声で叫ぶ。消え入りそうな意識の中、現実へ引戻そうとするかのような声に、カインは反射的に操縦桿を押し倒す事で応えた。

ギリギリのタイミングで機体は急降下し、残った機影に弾丸の雨が突き抜けてゆく。

『がああああああっ！ テメふざー！』

カインは視界を外に向けながら、慌てて通信器をオフにする。

入り組んだ岩波状の大地に、明らかに人工的な穴がカインには見えていたのだ。

「ア、アカネ！ 穴ってあれ？ あんな所に進入して大丈夫なの？ 幅は……」

「私を信じて、今はあそこに入るしか逃げ道は無いの！」

カインは返事をしなかった。敵機が急降下して追ってきていたと言うのもあったが、アカネを疑おうとは、そもそも思わなかったのだ。

眼前には機体が一機侵入するのにギリギリの大穴が広がっている。人工的にデス・スウェルを整地し、そこにトンネルの要領で掘られたのであろうと思わせる作りであった。赤茶色の岩ばかりの中に、大穴の周りだけアスファルトの灰色が浮き出ており、周辺には低層と思われる四角い施設がいくつか見えた。

距離はほとんどなかった。迷う必要もなく。迷う時間も無い。

「入れえーっ！」

叫びながらカインは一直線にぼっかりと空いた穴へ飛行艇を操縦

する。同時に、またしても弾丸が飛び込んでくる。機体を掠めた銃弾が、大穴の周辺を削りとったのを目視しながら、カインは大穴に飛び込むのに成功する。

すぐに気圧の変化で耳鳴りがする。だが、それどころでは無かった。夕方とはいえ、光の中を飛行していたのが、突然闇の支配する空間へ飛び込んだのだ。カインの目は何も見えていなかった。

すぐに出力を限界まで下げる。進入時の目視では、機体と穴の幅にそこまでの余裕は無かったのだ。速度を急激に落としながら、カインは慌ててアカネに話しかける。

「こ、これはまずいって、墜落する！ 何も見えないじゃないか！ どうすれば！ ど、どうすればいいんだ！」

「落ち着いてカイン！ レーダーはしっかり機能しているから！ 目視に頼らずレーダーの数値と映像に目を向けて！」

カインは慌ててレーダーに目を落とす。すると確かに明確な構造がレーダーに映し出されており、穴の構造と距離、高度までを正確に映し出していた。それを見て少しだけ心を落ち着かせる。

瞬間、穴の中に轟音が響き渡った。ギョツとしたカインだったが、その音がどういう意味合いを含んでいるのか解らず、また暗闇の中から響く音だけに、ことさら恐ろしかった。

しかし、同時に後部座席のアカネが歓喜の声を上げる。

「よしっ！ 私たちの勝ちだよカイン、すぐに着陸して！」

カインはアカネの歓喜の意味がわからなかった。だが、暗闇の中を最低速度でも飛行しているよりは着陸した方が全然ましだという気がしたので、すぐに着陸の作業を行なった。

機体をさらに減速させてゆき、レーダーのデータに操縦桿が連動するよう、機器を設定してゆく。普段は手動を使うカインだったが、この状態で手動の着陸を試みようなどとは全く思わなかった。

機体はバウンドするように地面に接触し、減速してゆく。カインとアカネは飛行の圧力から徐々に開放され、圧力が掛からなくなつた事で、機体が巧く着陸した事を理解した。

カインは操縦桿から手を離し、脱力してシートに深く座り込んだ。
「助かった……」

アカネは振り返り、目視にて進入した入り口を確認し、ようやく安堵と歓喜を入り混じらせながら声を発す。

「巧くいったよ、カイン。あいつが乱れ打ちした弾がこの入り口を塞いだわ。もうあいつは追って来れない」

カインは辟易しながらも体を起こし、コクピットの僅かな光源に照ら出されたアカネの顔を見た。

「入り口を塞いだって、どういうこと？」

「相手の機体のサイズだとね、ここへは進入して来れないのよ。だからあいつは私たちを閉じ込める事をね、選ばざる終えなかったの。カイン、共同の通信網を入れてみて。声は出さないように」

言われた通り、カインは通信機のスイッチを指で弾く。

密閉された空間であつたので、ノイズは多かったが、僅かに受信した音声がコクピット内に流れた。

『――な奴らめ。精々、ガーガー、を這いずれ。すぐに、ガーガー、だろうよ。ガーガーガーガガザザザザザザザ――』

それだけが聞こえて、通信は途絶えた。

「この空域を、離脱したって事かな……」

不安でいっぱいの声だと理解しながら、カインはそれでもアカネに問いかける。

「ええ、間違いなく。やった、カイン凄い！ 水素艇の追跡を撒いたのよ！ あいつ、こっちの機体に目標を変えたから、シルバたちも大丈夫だろうし完璧ね」

どこが完璧なのだろう。カインはそう思わずにはいらなかった。未だ目がなれず辺りは完全な闇で、飛行艇がギリギリ収まる穴に閉じ込められてしまったのだ。八方塞とはこの事だと思った。

アカネはそんなカインの顔をみて微笑んだ。よっぽど情け無い顔をしているのだろうとカインは思ったが、実際不安で仕方が無かったのだ。

「ふふっ。大丈夫。事態は完璧に私たちにとっていい方向に傾いてるから。そうだ、カインが不安がってるから、その原因の一つを私が取り除いてあげる」

カインは暗闇の中で悪戯っぽく笑うアカネを訝しげに見つめる。アカネは言ったきり反応をしない。代わりに完全なる無音までカインの周りにまとり付いてくる。これでアカネの顔が見えていなかったら、発狂している所だった。

そんな心情を察してかしないでか、アカネが口を開いた。

「もうすぐ。五、四、三、二、一。来いっ！」

暗闇の中でのカウントダウン。効果はすぐに現れた。カインは思わず目を瞑る。

アカネのカウントダウンが終わると同時に、完全だった闇の空間全体が光に包まれたのだ。驚愕と困惑を入り混ぜながら、カインは辺りを見回す。大穴の天井部には巨大な照明機器が設けてあるようで、そこからの光が空間を照らし出している様であった。進入するまでは不明だった大穴の全容は、目的不明の巨大なトンネルだった。カインは細目で目を慣らしながら、トンネルの先を見据えてみたが、先など全く見えてこず、いかにこの建造物が巨大かが伺えた。

カインは軽い放心状態になりながら、機体のウィンドウシールドを開けるスイッチを押した。楕円の強化ガラスがガスポンプの抜ける音を発しながら上に開く。カインは依然震える足でコクピットに立つ。

そんなカインへ、アカネが優しい声と笑顔で語りかけた。

「ここはね、飛行中に話した、大海戦時代の巨大大下水施設跡なの。そして、イズモ地下移動用大陸トンネル、通称βルート。到達おめでとう。このトンネルはエアーズロック付近まで続いているわ！」

カインは相変わらず震える足を気にしながらも、アカネの言葉に反応をして、思わず笑みになる。そして思った。

閉じ込められたわけじゃない。レースは、まだ続いている、と。

第二章 拾

カインとアカネが下水施設跡に入ってからしばらく、荒れ果てた地獄の大地は太陽からの光が無くなり、闇の支配が強まる時間となっていた。深紅の水素艇からの襲撃を逃れたレンとシルバは、デス・スウェルの中でも比較的緩やか地平を有する岩山に飛行機を着陸させ、本日の飛行工程を終了させていた。

飛行機から降りた二人は、機体に備え付けておいた太陽電池式ラントンを地面に置き、乾燥肉やパンなどで簡単な食事を取った。

黙々と食料を口に運びながら、シルバはレンが話しをするのをただ待ち、レンはレンで話を切り出すタイミングを伺う。なぜ、深紅の水素艇が自身の機体を襲うように手はずを整えたのかを。

レンは口に運び続けた乾燥肉の一切れを手の中で遊びつつ、覚悟を決めてシルバに話しかける事にした。

「あのさ、昔話をしてもいいかな？」

昔話。シルバは疑問はあっても口には出さない。代わりに頷く。

「あたしはね、イズモ発祥の地の出身なんだ。名前なんかで判ってたかもしれないけどさ。でね、その発祥の地にリュウキュウって地区があるのは知ってる？」

「リュウキュウは知っているが……まさか、あの場所と君に関係がある？」

シルバはそのリュウキュウという地名に僅かに驚く。

「そ、リュウキュウはあたしの生まれた場所さ。その反応だとあそこがどんな場所か知っているみたいだね」

リュウキュウ。シルバは知識を引き出しから取り出す合図のように一度目を瞑り、レンへ肯定の意味で頷く。

イズモカンパニー創設メンバーの一人、雲を管理する為の大型水素機関を開発したカンジリシガミ。彼が、その水素機関の知識の全てと引き換えに、イズモから譲り受けた特区。それがリュウキュウ

ウだ。シルバはその地についての知識を知らぬはずがなかった。

イシガミは、イズモ創設に関わった人間で、唯一イズモとの関係を絶った人物でもあり、一族はその姿勢を現在に至るまで貫いている。そして、外部でイズモの中枢を知っているであろう人々が住む唯一の場所なのだ。シルバとアカネがイズモ本部を離反し向かった場所。そこがリュウキュウであった。

そうとは知らないレンは淡々と話しを続けた。

「まあ、知ってるんだろうけど、簡単に言えばリュウキュウは昔イズモと深い関係にあった独立特区さ。そんな場所だからさ、イズモとは関係を絶ったって言っても、結構イズモの内情とかには詳しくなるんだ。今あたしがいるキャラバンもリュウキュウへは商売で行くしね」

たしかにリュウキュウ出身ならイズモに詳しいだろうとシルバは思う。リュウキュウではイズモの影響を受けず、真実を知りながら育つのであろうから。だが、

「その昔話、今日の襲撃と関係がある。と？」

シルバはあくまで淡々と、話し始めたレンに問う。

人工的な暖色の光に照らし出されたレンの表情にいつもの笑みはない。

「まあ、ね。ここだけの話しさ、シルバたちがケルマディックに墜落したとかいう飛行体に乗っていた人物であろうってのは、あの職業幹旋所で会った時には分かってたんだ」

「何？ どういうことだ」

レンは迷うように沈黙し、そして一度頷き答える。

「あの施設は本来キャラバンを統括する施設でもあってね、二階は職業幹旋をしているけど、三階はケルマディックやイズモと商談なんかをする場でもあるんだ。あたしはシルバたちが二階にいた時、三階に呼び出されていたのさ。そしてシルバやアカネについてとある人物から話を聞いたんだよね。奴はあんたたちを探しに来た追っ手だ」

シルバにとって、レンの台詞は疑問だらけであった。自身やアカネを知る人物が、キャラバンの中枢にいて、およそ今回の逃避行とは無関係と思われるレンと接触をしていたと。レンはそういつているのだ。つまり、レンはイズモと関係をしているという結論になる。レンは敵、なのか。思わず追っ手という言葉にヴァーゼンの顔を浮かべる。だがシルバは今までのレンとの行動から、そう判断ができなかった。

「追っ手。君に……接触したという人物は誰だ。なぜ今回の私たちの行動で、君がその人物に呼び出される」

少し間を置きながら、慎重にレンは喋った。

「あたしはさ、小さい頃にリュウキュウに居たって言ったでしょ？だからリュウキュウの内情もよく知っててさ、結構秘密も知ってるんだ。実はあの地区がイズモと独立を完全にはしていないだとか。そんな事も知ってる。んで、それがどうしたって話しただけさ、独立してないんだから、一部交流もあって、イズモの人間と接触する機会もあるんだよ。今回、ケルマディックに来ていた奴がさ、あたしの知っている奴だったんだ。だからあたしが呼び出されていたのさ。それがあの職業幹旋所にいた理由。そして、そこに来てた奴の事だけ。シルバもアカネもたぶん知っている奴だよ」

自身のことを知っている人物。シルバにはヴァーゼン以外思い浮かべる事が出来なかった。

「ヴァーゼンか？」

否定を示すようにレンは顔を横に振り、少しだけいつもの悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「ヴァーゼンってのはさっきの機体の操縦者っしょ？ 外れー。あの時、三階にいたのは……イズモのプレジデントさ」

接触していた人物の素性を明かす。

「プレジデントだと？ 馬鹿な、なぜ彼がケルマディックにいる！彼は本部から出る事は無いはずだ。第一私たちをプレジデントが追いかけてくるなど、有り得るはずが無い」

珍しくシルバは狼狽した。まさかの人物を告げられ、考えをめぐらせる事さえ出来なかった。プレジデント、シルバが出会う事の無い存在。実在の顔さえ見た事もない人物であったのだ。

「本部から出ないねえ。でもあのジジイはリュウキュウによく来てたぞ？　だからあたしも知ってるんだし」

プレジデントは頻繁に外部と接触をしている。シルバはそんな情報を知るはずも無い。立場が違うのだ。だが、レンの言った言葉の中に、全く別種の違和感のようなものが存在している事に、シルバは気が付いた。知識との離反。現実との齟齬。

「ジジイ？　誰のことを言っているんだ。イズモのプレジデントは代々世襲だ。たしか今のプレジデントはまだ十二歳くらいのはずだ。だからそもそも権力もなく、それこそ追っ手などありえ——」

「ははっ！　権力が無い？　シルバさ、見た目とか常識なんかは左右されない方がいいよ。リュウキュウ出身のあたしからしたら、いまのイズモや世界の異常さが良く分かる。シルバもアカネも、その一端を垣間見たから、今ここにいるんじゃない？　予想だけど」

「そ、うだ、が……」

レンは冗談の一切無い笑みを見せた後、真面目な表情でさらに語る。

「ならさ、今ある現実なんて何も信じちゃ駄目だ。この世界の仕組みも、イズモもだって当然だし、それに関わる全ての人達も含めて、全部嘘さ。目に見えるものは嘘だらけだよ。リュウキュウに行くといい。あたしの口から色々聞くより、理解が早まるよ。現実がどうなっているのかね。まあ、あたしが教えてもいいけど、実はあたしはそんなにイズモについても、詳しく知っているわけじゃないんだ。興味なかったし、そういうの」

シルバは思わず押し黙り、現状の認識を改めようとする。そして、リュウキュウへ行くことの必要性を再確認した。

「わかった。詳しい話はリュウキュウへ行ってみよう。元よりそのつもりだったんだ」

それがいいと思う。レンは言って頷く。

「最後に、一つゾツとする話をしてあげる。あたしが小さい頃、あのジジイ、プレジデントはリュウキュウによく来てた。見た目通りの高齢でさ、今にも死んじまいそうな感じだった。だからあたしにとってはイズモのプレジデントはジジイさ。でもね、ケルマディックに来てたあいつは、確かにシルバが言うとおり、十二歳くらいの少年だったよ。世襲で新しい世代に企業を受け継いだと言えばそれまでだけどさ。じゃあ、なんであの子供のなりをした奴が、小さい頃のあたしと会った事を話すんだろうね」

「……………」

老人と少年の差異。シルバはレンがした話について、これ以上考えるはいけなような気がした。それは危機感でもあり警戒心でもあった。海を奪ったイズモの異常性は、トップに君臨する人間の異常性にも繋がっている。自身やアカネの求めている答えは、想像を絶する終着点にあるのかもしれない。そう、思った。

お互い沈黙する中で、レンは場の空気が変わるよう、大きな声で一度ため息をついた。

同時に表情を崩し話しを続ける。

「胡散臭い話はもうおしまい。あとは自分で答えを探しなよ。話しがそれたけど、聞きたいことはレースでの事でしょ？ 何で飛行機の搭乗者登録にシルバとアカネの名前を使ったか、知りたい？」

「ああ、何故だ？ 本来なら、私とアカネはカインの飛行艇に乗るはずだった。カインの機体に私たちの名前を使うのなら、君が敵だったと判断が付くが、逆は理解できないな。私たちの正体を知っていたと言ったが、君の行った行為は囹そのものだ。私とアカネを追っ手の攻撃から守るかのようにな。だが、その理由は無いだろう」

シルバはレンを敵だともう思っていなかった。不可思議な点はまだ幾つもあったが、それでもレンの明かした話は、敵だった場合話してはいけない情報だったからである。それに、今までの行動を共にして、すでに敵とは思えなくなっていた。だからこそ、変な疑

いは晴らしておきたくて聞いたのだ。

まっすぐな目で真実を見抜こうとするそんなシルバに対し、レンは視線を空へ向ける。星々の輝きによって照らし出されている濃紺の夜空を背景に、レンは少し恥ずかしさを滲ませるような小声で呟く。

「カインの飛行艇、カラス号はさ、あいつの親の形見でもあるんだ。カインからそんな話し聞いてる？」

頷くシルバ。

「ああ、両親の残していった機体だそうだな。言ってよいのか分からないが、あまり両親の事をよく思っていないみたいだった」

シルバの話を聞いて、レンの瞳の中に僅かな悲しみの光が流れる。「そう、かぁ。うん仕方ないかな。あいつ親のやった事で苦労してたからな」

——ごめん、カイン。

レンは心の中でカインに謝る。寝る前にするのと同じように。

「でも、親の形見に変わりはないでしょ？ だから、壊されたくないかったんだよねあの飛行艇。ジジイから、墜落した水素艇の搭乗者に追っ手を差し向けるって聞いて、最初はどうでもよかったんだ。あたしには関係ないって。でも、まさかカインが巻き込まれてるなんて思わなかったからさ。焦ったあたしはすぐにカインの所に行こうとしたよ。そしたらすぐにシルバたちに鉢合わせときた。だから真っ先にカインの注意をそらそうとしたんだ。レースどうすんだーって。そうしたらあいつ馬鹿だから空気も読まず、レースに勝つか言い出すし、終いには形見の飛行艇まで提供して。んで、見てられなかったわけ」

シルバは話を聞いて、正直呆れてしまっていた。

「では、カインの飛行艇を守るためだけに、自身の機体に私たちの名前をつけて飛ぶ気だったと？ それがどんなに危険か分かってやったのか？」

レンは珍しく顔を赤らめふて腐れた表情をする。

「だって、他に方法ないじゃんか。それに実際はあたし、さっさとリタイアするつもりだったんだよ。んで、飛行機置いてさっさと逃げれば、あとはシルバとアカネが乗った機体は自由になると思ったんだ。なのに今度はカインが飛行艇を操縦する事になるし、あいつ嬉しそうだったからついあたしも止めれなくてさ。もしかしたら、あのジジイの事だから、実際の搭乗者まで把握してるかもしれないとか考えちゃって。これはリタイアなんて出来ない。完全に囿をやるしかないーってなったのさ」

ソップを向いたレンに対し、苦笑いをしながらも、シルバは頭を下げた。

「そう、か。済まなかった。カインを巻き込んで、必然的に君まで巻き込んでいたんだな」

レンはそんなシルバを見据えながら、

「いいってことさー。騒動大好きレンちゃんにはちょうどいいイベントだったよん」

いつもの無邪気な笑みで答える。そして、顔を上げたシルバに対し、

「たださ……これから先の事で、カインを……いや、やっぱいい。

まあ、レースもこれからだし、気を吐いていこうよ」

こう答えた。

シルバはレンの伝えたかった事。その事を考えながら、レンに返答をする。

「ああ、まだ追っ手もあるだろう。あの二人に危害が加えられないよう、最警戒で進もう」

二人をそれからしばらく沈黙し、明日へ備えて寝る事にした。そろぞれの思惑を胸に抱きながら。

第二章 拾巻

巨大下水施設跡に潜ったカインとアカネは、施設の人工照明を頼りにトンネルを進み続けていた。機体を飛ばすことなく、滑走する方法だったので速度こそ出てはいなかったが、確実に中間地点であるエアーズロックへと近づいていく。

しばらくの間はそうやって進み続けていたのだが、人工照明は太陽電池の蓄電で稼動していたようで、徐々に施設内の光量が減少してきていた。カインはトンネルの中間地点を越えた辺りでこれ以上の走行は危険と判断して機体を停止。レン、シルバ同様に本日の工程を終了させた。

停止させた機体から降りたカインは梯子を降りると、すぐに機体側面のハッチを開き、簡易テント、寝具、食料等々、必要な道具を地面のアスファルトへ広げてゆく。手早く作業をこなさねば、上方からの光が無くなり、何も出来なくなると思ったからだ。横ではアカネが手伝うにも何をしたら分からないでいるようだったので、カインは声をかける。

「アカネ、悪いけどコクピットの中にあるランタンを取ってきてくれないかな？ もうすぐ暗くなって手元が危うくなりそうだ」

声をかけられたアカネは慌てつつ、どこか嬉しそうに返答して行動を起こす。

「わ、わかった。すぐ持ってくるから！」

言われたとおりコクピット内からランタンを取り出したアカネが、スイッチを入れて明かりを灯す。辺りはランタンの光を明るく感じる程には暗くなっており、アカネは少し慌てるようにカインの元に向かった。

「大分暗くなったわね。ここのエネルギーは太陽光発電でまかなっているのは知ってたけど、ここまで早く照明が消えるとは思わなかった。太陽電池の逐電量が落ちてるのかも」

「ふーん。まあ、どっちにしてもランタンの光だけじゃ限界があるか……そうだ、ランタンを貸して」

話しながらテントを組み立てたカインは、アカネが持ってきたランタンを受け取り、辺りを照らす。飛行艇が入るぎりぎりの幅で広がるトンネル内の壁がランタンで照らし出され、カインやアカネの陰を不気味に揺らす。カインはその中を歩き出し、

「ねえアカネ、このトンネル内に、燃えるような物とか無いかな。あれば凄く助かるんだけど」

アカネに今欲している物について問いかける。

少し上向き加減で考えるアカネは、飛行訓練での話しを思い出す。「そういえば、トンネルの壁内は水流の音を防音するために、大量の人工綿が埋め込まれているって聞いたことがあるよ。たしか大戦時、密かに水素の原料になる海水を流す為だったはずだけど」

人工綿。カインは考えて頷く。

「うん、それなら燃えるな。でも壁の中か……壊して取り出すのは厳しいなあ」

「それは、大丈夫じゃないかな。ここが稼動していた時代は整備も完璧だったかもしれないけど、今は放棄された施設だし、結構亀裂とか入ってると思う。それに軍事目的で車両や飛行機の運搬なんかに使われてる場所だから、けっこうボロボロだよ」

どんどん暗くなる中で、ランタンに照らし出されるアカネは明るく答える。カインはアカネに言われて、足元のアスファルトをブーツの踵で軽く踏み込んでみた。たしかにアスファルトは風化しているのか、簡単に碎けてしまう。

「本当だ。これなら綿を取り出せるかも」

「なら急ごう。結構暗くなってきたわ。そのランタンだけだと亀裂を探すのも大変になっちゃう」

カインは頷くと、アカネと並んで壁面へ向かい、亀裂の入っている壁面をくまなく探していった。

程なく亀裂は見つかり、カインは手を突っ込んで内部に詰まった

人工綿を取り出してみる。手の上にのった茶色く汚れて変色した人工綿は、幾重にもかさなりからまっていた。

水分は含んでおらず、乾燥していたのでカインはこれならば燃えそうだと思い、さらに人工綿を取り出した。手元が一杯になると、アカネにそれを渡してさらに取り出す。二人で両手一杯に抱えると、少しこぼしながらもそれ飛行艇の近くまで運んでゆく。二回ほど同じ事を繰り返す頃には、辺りはランタン無しでは歩けないほど暗くなっていた。

「く、暗いわね。ランタンが消えたときの事を考えると、すこしゾツとする」

率直なアカネの感想だけが暗闇で聞こえる。表情が見えなかった事で、カインは確かにと思った。

一通り人工綿を山積みにして、カインは一部を分けて地面へと置いた。アカネは置かれた人工綿の前に座る。同時に機体から運び出したシオルダーバックの中からカインがライターを取り出し、火傷をしないようにゆっくり人工綿に火をつける。熱せられた人工綿はあまり燃えることなく、しかし暖色を帯びた光を生み出し始めた。光は弱くとも、辺りが完全な闇であつた為に、十分な明るさと言えた。

照らし出されたアカネは解り易く表情に安心した感情をこめて息を吐く。カインは光を見て、

「意外と燃えないなあ。でも長時間光を出してもらうには、むしろちよいどいいか」

楽観的に現状を評価した。前に座るアカネは、人工綿の焚き火に目をやり、天井の闇に視線を移す。

「暗いね。昔ここに来たときは昼の間だけだったから、照明が夜に落ちるなんて知らなかった。ごめんねカイン」

「いや、アカネが謝る事じゃないよ全然、全く。それよりお腹空かない？ 実は俺、結構お腹空いてるんだ。ご飯にしようよ。それで元氣出して、明日に備えよう」

少し落ち込み気味のアカネを励ますように、カインは明るく振舞う。こんな暗闇の中では誰だって気落ちする。そう思って気持ちだけでも明るくしようと考えたのだ。

アカネには、カインのそんな分かりやすい配慮がよく伝わり、思わず笑みを浮かべる。

「私も実はお腹が空いちちゃった」

二人で軽く笑いあい。カインは食料を入れた密封ケースの中から燻製にされた肉や、水分のあまり無いカチカチのパンを取り出して、半分ずつに分ける。それをアカネに渡す。

「肉を火であれば味が出ておいしいと思うんだけどさ、この人工綿の熱であぶっていいもののかな。少し不安になるよ」

言いながら肉をあぶろうとするカインを、アカネが止める。

「止めた方がいいんじゃないかなー。そのままでも十分食べれるよ。ほら、むぐ、うん美味しい」

肉をほおぼるアカネを見ながら、カインは手に摘んだ肉をそのまま口の中に放り込む。決して美味しくはなかった。

それでも二人は光一つ無い空間の中で、楽しいとは決して言えなくとも、温かい気持ちになれる食事続けた。一通り食べ終わって、食後の水を味わいながら、アカネがカインの様子を伺うように話しかける。

「ねえ、カイン。一つだけ聞いてもいいかな」

「うん？　なに、答えられることなら何でも答えるよ」

少し空腹を満たされたカインは上のジャケットを脱ぎつつ、両足を伸ばしリラックスした座り方をしながら、アカネの声を聞いている。聞いた。

「その、なんでここまで私、いや私たちについて来てくれたのかなって思ってた……私ね、カインを巻き込んでしまっただけに申し訳なく思っているの」

カインは少しだけ考える風に両手を頭の後ろで組む。でも、すぐに答えは出てきた。

「そういえば、ケルマディックを出発してその日の夜、シルバにも同じような事言われたな。アカネ、レース前に今が楽しいって言っていたよね。不謹慎かもしれないけど、俺も今すごく楽しいんだ。レースは緊張で吐きそうだし、飛行機での空中戦では死にそうになるし、とてもそんな状況ではないと分かってはいるんだけどね。でも楽しい。シルバにも言ったけど、俺が自分で決めた事だよ。アカネやシルバについてきたのは。だから巻き込まれたんじゃないからさ。気にしないでよ」

そう、満面の笑顔で答えるカイン。アカネは恥ずかしそうに、でも同じように笑顔になる。

「私も、楽しいよ。レース前に言ったけど。楽しい。レースに参加した事もそうだし、こんな暗闇の中で食事する事も、怖いけど楽しい。それに……こうやってカインと話をするのも……楽しいよ」

カインはアカネの台詞に少し赤面する。別にアカネにとっては何の含みもない発言だと言う事が分かってはいても、妙に恥ずかしかった。それと、同時にシルバが話していた事を思い出した。アカネは人付き合いが苦手だということ。正直話していて、そんなイメージはカインには全くなかった。確かに慣れていない人には敬語だし、人見知りな所はあるのかもしれない。でも、それだけで、知り合いがあまりいないと言う状況になるのだろうか。そんな疑問が頭をよぎりつつ、カインは答える。

「俺もさ、アカネとこうやって話せるようになってよかったよ。まあ、初めて話したときは、ははっ、蹴っ飛ばされて、とても仲良くなれるとは思わなかったけどね」

「そ、そのことは忘れて！」

アカネは少し頬を膨らませつつも、屈託の無い無邪気な笑顔を見せていた。その表情はとてもカインより年上だとは思えず、可愛らしかった。

そして、その表所を見てやはりアカネが人付き合いは苦手で、知り合いが少ないというのはおかしいと思った。ふと同時にカインは、

敵から襲撃を受けた際の、言わされた台詞をなぜか思い出した。

「ねえアカネ。自分も一つ聞いていい？」

「うん、何？」

カインは通信で意味の分からなかった台詞を思い浮かべる。そしてその台詞の直後、敵機はカインとアカネの乗る機体へ攻撃を仕掛けてきた事を。

「敵機がレンたちを襲ってた時さ、『鍵』の運び手って表明させたよね。『鍵』って何？」

「……………」

アカネは沈黙する。長い沈黙だった。それは迷いをあらわし、アカネの表情を暗くさせる。カインはまずい事を聞いたかもと慌てて撤回をしようとするが、その前にアカネが口を開いた。

「イズモにとって、最も重要な事業は、雲を管理する事なの。その管理には巨大な水素機関が使用されているのは知っているよね？」

「あ、ああもちろん知ってる。貴重な水資源を世界で均等に有効活用する必要があるんでしょ？ ケルマディックにも定期的に雨を降らす為に来ていたよ。巨大な飛行船が何機も」

カインはケルマディックの空を飛行する、多数の巨大な飛行船が水を撒き散らしながら進んでゆく光景を脳裏に思い浮かべながらアカネの話を聞き続けた。

「そう、それ。私からしたら、自らが世界から海を奪っという何が均等なのかと言いたい所だけど……まあいい話がそれちゃうしね。少し昔話になるけど、その水素機関を開発した人間たちは、機関が世界を変えれる力を持っている事を重要視して、同時に警戒もしたの。自分たち以外に使われると、戦争を助長しかねないって。当時は大海戦の真っ只中だったし。だから彼らは雲を回収する為の、戦争を終わらせる為の水素機関に『鍵』をかけたの。自分たちだけがその機関を操作しえるように。つまりは世界を操作できるように。それが今に続くイズモカンパニーの登場と始まり」

アカネが話した内容に登場する『鍵』の単語。それがどう今日の

戦闘中に発せられた言葉と繋がるのか、カインにはまったくわからなかった。しかしアカネは話を続ける。

「話を今に戻すね。現在イズモはプレジデントを筆頭に、三人の幹部が企業を管理しているの。そしてイズモは起業当初から今に至るまで、プレジデントを含めた四人の職務は皆、血縁者による世襲によって就任されると決められている」

「つまり子供が親の跡取りになってるって事？ それとアカネの言う『鍵』と何の関係がるのさ」

カインは的を射ないような説明に、素直に疑問を呈す。

アカネは分かっていると言うような目でカインを見つめる。

「今の話と『鍵』には関係があるの。また少し昔話。そしてなぜイズモの重役は血縁者の世襲制なのか。答えは簡単なの。雲を回収する水素機関を開発した彼らは、自分たちにしかそれを使えないように、自分たちしか持ち得ない『鍵』を使った。遺伝子情報という『鍵』をね。だから機関は彼らにしか反応しなかったし、今では――」
「そういう事か！」

アカネが言う前に、カインの中で話しが繋がった。思わずリラックスしたように足を伸ばして座った状態から、焚き火越しにアカネの前へ乗り出す。

「つまりイズモのトップに立つには雲機関の管理が必要不可欠で、それは開発者の遺伝子情報持っている子孫じゃないと駄目って事だね。だから世襲制になっていると。じゃあ『鍵』ってのは開発者の遺伝子情報って事だったんだね。俺はてっきり玄関を開けるみたいな鍵を持つてるのかと――あれ？ 今の話からすると、さっきの戦闘で俺に『鍵』の運び手とか言わせたけど、それって……」

瞬時にカインの中で限りなく正解の予想が立った。『鍵』とは何かを質問し、雲機関の開発者の遺伝子の話しになり、つまり。

アカネはゆっくりと、でも力強く、少し悲しい表情で、

「うん。私は雲機関の開発者の子孫で、現イズモカンパニーの三幹部の一人、ライカンIIクロウサーの娘なの」

肯定を示すように一度だけ頷いた。

予想外の展開にカインは、慌てるように考えをまとめようとした。過去イズモが行った行為に対する疑問から本部を飛び出したアカネとシルバ。執拗なイズモの追跡。数名しかいない『鍵』の遺伝子を持った存在。その日を生きてきただけのカインには、ただの壮大な作り話のように思え、しかし、現状自身が体験している敵襲や目の前のアカネの存在が実態となって証明を訴えかけてくる。

目を大きく見開いて、時を停止させてしまったかのようなカインを他所に、アカネはさらに続けた。

「私の父は十年前に飛行機の墜落事故で死んだのね。それで、今はイズモに『鍵』を持っていて、使える人間はプレジデントを含めて三人だけ。そして親族も『鍵』の存在は伏せられていて、役員へ就任したときに『鍵』の存在を知らされる仕組みになっているの。私は……私には兄弟は居なくて、だから、父が事故死した後に『鍵』の存在を教えられた。いずれ……私が引き継がないといけないからって」

「だから、あんな執拗に追っ手が攻撃を仕掛けてきたのか。『鍵』の秘密が外部に漏れるのを恐れて。信じられないような話だけど、納得、したよ」

カインはどんな反応を示しているのか分からず、神妙な表情をみせざる終えなかった。そして同時に胸を締め付けられるような思いに襲われる。想像もつかない程の重責に将来対面しなければいけない事実とは、一体どれほど苦しいものなのだろうか。そして事実には納得がいかず、謀反を起こしたらどうなるのか。答えは目の前の座る、とても年上には見えない少女だった。

アカネは優しく、そして悲しそうにも見える表情で微笑を浮かべていた。

「だからカインの質問に対する答え……『鍵』っていうのは私のことなの」

アカネの顔を見ていることが出来なかったカインは、目の前の人

工綿が発する光をただ眺めた。まるで言葉を忘れてしまったかのよう
にカインは黙り続ける。

「でも！ 私は『鍵』でよかったって思うんだ。『鍵』だったから
知り得た事もあるし、自分で出来る事もあるんだから。同情だけは
……しないで。したら怒るから」

顔を上げると、アカネは頬を膨らませる仕草で怒りを表現してい
た。その顔がなんだかとても可笑しく思えたカインは、思わず笑っ
てしまう。

「は、はは……わかったよ。同情なんてしない。俺もアカネが『鍵』
を持って生まれた事を喜ぶよ。それのおかげで、俺はレースに参加
して、デス・スウェルも越えて、こうやってアカネと一緒に真っ暗
闇の穴の中で不味い飯を食われてるんだから。こんな面白い事って
ないよ、普通」

アカネもカインに釣られて笑顔になる。

「そうよ。中々無い経験よ。私だってイズモ本部を抜け出す切っ掛
けになったし、水素艇は墜落するし、飛行機のレースにまで参加し
て、暗闇の中楽しくおしゃべりだもの。こんな事になるなんて、イ
ズモにいた頃には考えられなかった！」

本当によかった。カインは素直に思った。空気の上でんだケルマ
ディックの坑道に毎日向かい、日がな一日穴を掘ってきた事を考え
れば、この刺激が強すぎる数日間が夢のようであった。先のことな
ど全く分からない。けれど何かが起こる予感が常にある。これから
そんな日々が続けばいいなど、願わずにはいらなかった。

そんな自身の心のうちを感じ取っていたカインとは逆に、アカネ
は本当に言いたい事を言えない自分が情けなく、悲しかった。

「よっし！ 話しはこれくらいにして、明日に備えてもう寝よう。
太陽が昇るころには、ここの照明も復活するでしょ？」

色々と納得のいったカインはゆっくりと腰を起こし、元氣よくア
カネに対面する。

「え、ええそうね。太陽光が少しでもあれば、照明も稼動するはず。

そうすれば、後は一気にエアーズロックを目指すだけだわ」

アカネはカインに合わせるように立ち上がり、簡易テントへ向かった後を追う。

骨組みにシートをかけただけのテントの中、隣り合わせに並べられた寝袋へ、カインが先に入り、ついでアカネも中に入る。辺りは音の一切しない闇で、少し離れたところで人工綿が燃えている。カインはランタンの電源を入れて、明かりを最小に調節する。

「これでよし、あとは寝るだけ。なんか、緊張のしっぱなしだったけど、こうやって横になるとすぐに寝れそうな気がするよ」

カインは中腰で座り、隣で同じような格好をするアカネに声をかける。

「明日、本当にがんばらないと。おやすみ、アカネ」

仰向けになりながら目を瞑る。

アカネは横向きに体を丸めながら、ランタンの僅かな光に照らされたカインの顔を見て答える。

「うん、おやすみ、カイン。本当に、今日はお疲れ様。明日もがんばろうね……一緒に」

音はない。光は僅かで心もとなく、思わず大空に広がる星々の輝きが恋しくなる。アカネは目を閉じないで横を向く。視界に入るカインは目を瞑り、呼吸を整えながら眠りにつこうとしていた。その表情をしばらく見続け、そしてカインの呼吸が静かになり、緩やかな眠りへ入った事を確認して、呟いた。

「カイン、私たちと一緒に――」

決して望んではいけない僅かな願い。聞き入れたのは光の届きそうも無い、どこまでも深い闇だけであった。

第二章 拾貳

レースが始まって二日目の開始を告げる、早朝の日の出により目を覚ましたシルバ、レンと同じ頃、カインとアカネは、その朝焼けがもたらした太陽エネルギーを介した、人工照明の点灯によって目を覚ましていた。お互いなれない環境での一夜を過ごし、若干の倦怠感を体を感じつつ、目覚めの挨拶も少なめに、レースの参加者として、気持ちを引き締めていく。

「おはよう、アカネ。よく寝れた？」

「う：ん？ うん」

カインは起きて早々に、早速簡易テントなどを手際よく機体に収納し、出発の準備を急いだ。自身を照らす人工照明の光は、一日の気力を呼び起こす光としては弱い。なので体を動かす事で、眠気を飛ばそうとしたのだった。逆にアカネは収納されていく物の中から簡単な朝食を二人分見繕い、作業中のカインに渡した。そして自分の分を口に運びながら、フラフラとおぼつかない足取りで収納の作業を手伝う。アカネは朝が苦手だった。

一時間ほどで全ての準備を終えた二人は、すばやく機体へと乗り込み、滑走によるレースを再開させた。

狭いトンネル内を、留まった空気と共に押し出すかのように、黒い機体が轟音を響かせる。両翼を調整しながら、機体にかかる揚力を抑えつつ操縦桿を押し込む。

順調に進み始めた中で、カインとアカネが今後の動向についての確認を行う。

「アカネ、目は覚めた？ ここを後どのくらいで抜けれるのかな」

アカネは自身の寝起きの悪さを恥じながらも、まだ眠いという感想を心の中で呟き、カインの質問に答えていく。

「ごめんね、私ってどうも寝起きが……いや、忘れて。えっと、ここから出口までは、今の速度を維持して行けばさして時間は掛から

ないと思う。たぶん午前中にはここを抜けて、中間地点のエアーズロックまでいけるよ」

カインは出会ったばかりの、寝起きで突然暴れ出したアカネを思い出して、アカネに見えないように笑った。

「了解！　じゃあ今日も一日よろしく」

「よろしく、お願いしま……がんばろうね」

アカネは油断すると閉まりそうになる瞼に、嫌気が差しながら、答える。

そのような調子で始まったレース二日目であったが、どこまでも続く直線だけのトンネルは横を流れる景色も灰色一色で、時間の感覚を二人から奪ってゆく。決して広くはない道幅なので、集中力を切らす事が出来ない。カインにはかなりの重労働になった。

目の覚めたアカネは、ナビらしく定期的に話しかけた。集中を切らさないようにという配慮からの事だった。

始めの内は、

「今レースの順位はどの位だろうね。俺からすれば、エアーズロックに到着できる目途が立っている事だけでも奇跡みたいな話しかけど……優勝を目指すとなるとね、意識してないと」

「悪い順位じゃないと思う。夜間の飛行は基本どの参加者も避けるから。状況はいっしょのはずよ。それに、私たちはほぼ真っ直ぐ中間地点に向かっているから、序盤の遅れを取り返して、トップ集団のすぐ後ろ位の位置だと思うよ」

などと、順位の話し、レース後半戦の確認等々を行っていた。

ただ、話す事もなくなってきた二人は、

「アカネは何か趣味とかあるの？　学校はどんな所？」

「うーん。趣味は特には……楽器とかは弾けるかな。学校は、正直苦手かも」

などと世間話を始め、完全に集中力を切らした段階に入ると、

「やっぱり俺、穴に入るのは好きじゃないみたいだ……。いまそれを痛感したよ」

「私も、空のほうがいいかな……」

愚痴に近い会話をしながらすごしていた。

無言になってくる機内に明るい声が響いたのは、人工照明の明かり以外の光源が、トンネルの遙か先に見えてきた時であった。

「ア、アカネ見て！ 外だ、太陽の光だよ！」

操縦中なので後ろを振り返ることはしなかったが、アカネの声でカインは表情を読めた。

「やったねカイン！ ここを出れば、すぐにエアーズロックへ着けるわ！」

カインの表情も自然と綻ぶ。遙か先の微弱な光源が徐々に大きくなって行く、それに合わせて、機体の速度を上げてゆく。流れる景色はさらに早まり、機体の振動も心地よく強まってゆく。

「カイン、トンネル通過と共に、機体を離陸させて。トンネルの先はあまりいい滑走路とは呼べない状況になってるから」

「了解」

アカネの指示の元、さらに機体の滑走速度を上げてゆく。広がってゆく太陽光。人工照明の光が、圧倒的なその光量に負けていく。トンネル内は凄まじい光に包まれ、カインはウインドシールドを遮光モードに切り替え、ホワイトアウトに備える。

「アカネいくよっ！」

カインが言葉を発すると同時に、機体が地面から離れてゆく。一気に加速した機体はトンネルを出た瞬間、開放されたダムの水のように、勢いよく飛び出していった。

眼前に広がる昼前の澄んだ青空を目にし、カインも、アカネも笑みになる。下を見れば黄土色の岩々と、どこまで続く隆起を繰り返したような大砂漠が広がっている。カインは振り返らず前を見据え、アカネは抜け出した旧水道施設跡の穴を確認した。

カインの目には、波打つ砂の海の中で、悠然と聳え立つ巨大な岩が、遙か地平の先に見える。息を呑むその光景は、類まれなる操作技術と飛行経験を有した者のみが見ることを許された景色。オース

トラリア大砂漠大陸の中心にして、ARRの中間地点。エアーズロックがそこにはあった。

言葉を失ったかのようにただ無心でその景色を眺めるカインの背後から、アカネが優しく声をかけた。

「おめでとう、カイン。目標は優勝だとか言っただけ、ここまで来れる人……そんなに多くないんだよ。さあ、行こう！」

「りよ……うかい。了解！」

声が震えないだろうかと心配になるほど、カインは不安と高揚感で満たされていた。そして、ゆっくりと操縦桿をエアーズロックへ向けていった。

目視出来てからの飛行は順調そのもので、エアーズロックを見下ろせる所までの飛行は一瞬の事であった。遠くから眺めれば巨大な岩であるエアーズロックは、現在上部の平地に展開された、各参加者の関係者が準備した補給設備、レースを管理する人間たちの設営基地、観戦に訪れた人々の喧騒によってごった返していた。近郊の空域では、レース参加者と思える飛行機が少しずつ着陸を試みている。カインもそれに続く形で、エアーズロックへ着陸をした。岩肌に設けられた灰色の長い滑走路へソフトランニングを行う。着陸と同時に、大砂漠から運ばれてきた砂が噴射によって撒き散らされる。浮遊から開放された肉体が徐々に重さを帯びてゆく。それは生きている事を実感させる、飛行士独自の感慨深い感覚である。

「着いたね」

「ええ」

機体を降りて、カインとアカネは呆然と眼前を眺める。遠くからジープに乗った何者かが近づいてくるのが、陽炎により風景へ溶け込むように霞みながら見える。おそらく、レースを管理している人間が、機体と搭乗者のチェックに来たのだろうと当たりをつける。それがエアーズロックの、レースの中間地点に到達したのだという実感を、徐々にカインの中で膨らませさせた。

「い、やっつたあああー！ 着いた！ 着いたんだっ！」

気が付いたらカインは、大声で叫びその場で飛び跳ねて回っていた。アカネはその光景を見て、喜びが伝染してくる事を感じる。

「さあ、キャラバンみんなの所へ行こうカイン！ シルバやレンを待たない」と

頷き、カインとアカネは近づくジープへ向かって歩き出す。

年に一度、最も人がエアーズロックに集まる一大イベントとあって、世界各地域から、裕福な者、酔狂な者、一儲けしようとする者などが訪れ、機体の着陸する滑走路の周辺は出店と喧騒で溢れかえっていた。カラフルなパラソルが幾重にもかさなる様は、さながら飴玉をテーブルに散らばせたかのようで、祭りの様相を呈している。

ジープに乗せてもらったカインとアカネは、その喧騒の中にある一角、参加者と関係者が集まる大型のテントの中にいた。

「がははは、すげえぞカイン！ その年でここまでくりゃ上等もいい所だ」

豪快な笑い声を響かせながら、シンセイは自身より一回り小さいカインの癖毛をくしゃくしゃにするよう、頭を撫で回していた。

「こりゃ、レンが悔しがるな！ あいつらとは連絡を取っていたのか？ うん？」

カインは頭を揺さぶられすぎて、軽くふらふらしながら答える。

「途中までは一緒だったんだ。問題があって別ルートに行くことになったけど、たぶん大丈夫だよ。なにせシルバがついているし」

襲われた事をあえてはぐらかした。心配をさせたくないし、理由を問われた場合、言えない事が多すぎた。事情を知るアカネが、話を逸らさせるように、会話に入る。

「別れた場所からして、おそらく若干の迂回をしたと思います。でも、難所を抜けた後だったから、実力からして問題ないのではないかしら……。もう間もなく到着すると思います」

丁寧語で答えるアカネを見て、カインは噴出しそうになる。同時に、自分に対しては気兼ねなく話しかけてくれるようになった事を、

改めて嬉しく思った。

——誰に対しても、いつものままでいいのに。

そんな事を思われているとは思わないアカネは、カインの視線に気が付くと、不思議そうな表情で顔を傾げた。

「なるほどな。じゃあ、あいつらの到着の準備もしとくか」

言って動き出したシンセイの向かおうとする先は格納庫で、現在キャラバンのメンバーがカインの機体ライジンのメンテナンスを急ピッチで進めていた。

「あの二人、大丈夫かな……」

信じてはいても、一抹の不安を覚えるカインは、思わず考えを漏らす。なるべく考えないようにしてはいたが、深紅の水素艇に襲撃を受け、ギリギリで地下に逃げ込んだ後、そのまま敵が引いたとは言いい切れないのだ。標的を再度レンたちに変えたのではないかという嫌な考えが脳裏をよぎる。

「大丈夫だよ。カイン。レンの操縦技術は凄いよ。それにシルバがついてるから。私たちが作った時間さえあれば、逃げ隠れる事は出来たはずよ」

気丈に答えるアカネの表情も、決して優れたものではなかった。むせ返るようなテントの中で、不安の募った沈黙が二人の間を流れる。大丈夫、レンに限って想像するようなことにはなっていない。カインは思い。気を取り直して明るめにアカネへ声をかけようとした、その時、

『レース管理委員会より報告です。えー、レース速報、レース速報。ただいまエアーズロックの上空にて、搭乗者、シルバ、アカネ様の機体を確認。着陸次第、誘導を行います。関係者の方は、機体整備の準備をお願いします。繰り返し連絡します。レース委員会より——』

機械音で拡張されたアナウンスの声が、テント天井に設けられている、古ぼけた黒いスピーカーから流れてきた。同時に、カインとアカネが顔を見合わせる。

「レンたちだっ！ よっし、二人とも無事到着したんだ。でもあれ？　なんでアナウンスはアカネの名前を答えたのさ」

カインが喜びと共に疑問を投げかけ、

「さあ、間違い、じゃないかな。あるいは登録を間違えたとか。でも、今はそんな事どうでもいいじゃない！　迎えに行こうカイン」
アカネが漠然と返答をし、それ所ではないという身振りでカインの手を掴み、走り出す。半ば引っ張られる形で、カインはアカネの後に続いた。

テントの外に出た二人は、刺し込むような太陽の光を肌に感じつつ、自身たちの時と同じように、ジープに乗ってくるであろう二人をまつた。いつもと変わらず、何も遮るものの無い空をバックに、乾燥した風が大地を撫でるように吹き荒れている。すぐに噴出してくる汗をぬぐいながら間もなく、二人を乗せたジープはゆっくりとカインとアカネの待つテント前へ向かってきた。

止まるジープ。開いた扉からは、車内からカインたちが見えていたであろう、シルバが軽く右手を上げている。カインが走り、次いで今度はアカネが後を追う。

「シルバ！　無事だったん——」

駆けつけたカインが言いたい事を言い終える前に、車から飛び出したレンが飛びついてきて、カインの口を胸元で塞いでしまう。

「よし、よし。一人にしてごめんなさいねえー。お母さんの変わりに先生の胸でたんとお泣きい」

レンはそのままカインの背に手を回し、締め付けるように圧迫していく。呆然とするアカネとシルバを他所に、急な攻撃に全力で体を引き離そうと、精一杯の力でカインがレンを押し戻す。

「んんっなにしてんだっお前っ！　保育士かっ！　はーなーれーろーっ！」

ひとしきりカインを抱きふ倒したレンは、満足してカインから離れる。

「おや？　カインじゃないか。お前透けてるぜ？　ははあ、さては

死んだなお前。かわいそうに……」

「誰が透けてるだこら！ 今お前が絞め殺そうとしていたのは誰なんだ？ え？ まったく、心配したらこれだ。はあ……なんだか喉乾いた。さっさとテントに行こうシルバ、アカネ」

カインは呆れた顔で、無然とテントへ引き返す。その背中を見ながら、レンは呟いた。

「心配したのはこっちだったの。よかったよ本当」

聞いたアカネは微笑み、シルバは言葉で促す。

「さあ、私たちもテントへ行こう」

三人は並んでテントへ向かい、四人は再開する事ができた事を、それぞれの表現で喜んだ。

第二章 拾参

テントの中に入り、レンとシルバは整備専用の部屋へ向かう。一
通り、キャラバンの皆に経過報告と機体の整備を依頼して回る為だ
った。埃っぽい部屋は錆の臭いが充満し、いかにも作業場という様
相を呈している。先に入庫されたカインの機体が整備されているせ
いか、地面には工具がいたるところに置いてあり、また金属をぶつ
け合うような作業音が響き渡ってもいた。その中で指示を出すシン
セイに無事であった事の報告をした二人に、

「おう、よくたどり着いたな。任せとけ！ レース再開時には、万
全の準備をしておいてやらあ！」

と、豪語し了承をする。

シンセイが中心に立ち、キャラバンのメンバーが忙しく動く。

二人は皆に聞こえるように言葉を発つする。

「よっし、任せた！」

「宜しく願います」

尊大な態度のレンと礼儀正しいシルバが挨拶を終え、皆が手を上
げたり、声をかける等で労いをしてくれる。

皆に挨拶を終えた二人は、機体の整備を行う部屋から出ると、テ
ント内の金属製テーブルと椅子の設けてある場所で、先に座りくつ
ろいでいるカインとアカネに話しかけながら座る。

「二人とも無事で何よりだ」

シルバは言葉をカインに送り、同時にアカネの顔を見る。眉間に
皺を寄せながらであり、アカネはその表情にたじろぐ。レンは何度
も頷きの動作を見せている。

「な、なにシルバその顔……」

「まずは助かったと言っておこう。だが、いくら私たちが襲撃を受
けていたとは言え、昨日の行動は推奨しかねるな。なぜあのような
真似をした？」

アカネは一瞬気まずそうに視線を逸らし、だが考えを変えたのか、シルバに負けじと反論する。

「何よ、そっちだって自分たちを犠牲にしようと飛行していたじゃない。大体シルバ、貴方だけならまだしも、レンを巻き込んでんな飛行させたのは納得がいかない。何を考えているの？」

「そうだ、そうだ！ 何考えてるんだ！」

レンが冗談交じりにアカネの言葉に同調する。

「お前はいいから黙ってる！」

カインはレンの頭を叩き、二人の様子を伺う。二人は睨み合い、お互いにため息をしていた。

「まったく。少しか自身の立場も考えてだな……」

「そう言っただけでも代わりにシルバが飛び出していくんじゃない」カインの目には、どうも険悪な雰囲気ではないように見えたし、実際にそうだとも思えた。だから仲裁に入る

「まあ、よかったんじゃないかな。お互い無事だったんだし。あの時は最善の選択をしたんだよ」

アカネはその言葉に嬉しそうに微笑み、シルバは頭を下げた。

「カインの言う通りよ。犠牲が出なかったんだから、最善の選択だね」

「すまなかったな。まさか襲撃されるとは考えていなかった。少し今後の対策を講じねばならないな」

「いやいや、という仕草でカインは頭をかく。それをレンが茶化しに入る。

「また格好つけてやがる。これ以上格好良くなっちゃってどうする気なんだよ。何が目的だ？」

カインはサラリと無視をして、話題を変える。

「それよりさ、せっかくエアーブロックまで来れた事だし、少し外を見て回らない？ 上空から見たと思うけど、結構賑わっているみたいだしね」

カインは着陸の際に見た光景を思い出した。実は少し見に行っ

みたいと考えていたので、皆を誘ってみる事にしたのだ。

「いいね！ 私も見たい。以前来たときは訓練だったし、人なんていなかったもの」

カインの提案に、アカネがまず賛同する。席を立ったカインに続き、アカネも席を立った。

その光景を見たレンが少し軽蔑の視線をカインに向けつつ、

「なんだよ、ずいぶん仲良くなってんじらんか。まあ、いいけどね

……」

「なんか言った？」

誰にも聞こえない程度で、愚痴を漏らしながら席を立つ。

最後にシルバは少し考える仕草をしつつ、

「今後の話もすべきだが、まあ息抜きは必要だな。この後の道程はより困難になるだろうし」

歩き出す三人の後に続いた。

テントを出た四人はそのまま平らな岩肌を歩いて、周囲に展開されている出店の数々と集まった人々によって成された喧騒へ向かう。少し先を歩きながら、カインとレンがいつもの調子で楽しそうに怒鳴りあっている中、エアーズロックの景色を物珍しそうに眺めているアカネに対し、神妙な表情で横を歩くシルバが声をかける。

「アカネ。少し話がある」

「ん、なに？」

笑顔で振り向くアカネ。シルバの表情を見て笑みを消してゆく。

シルバがこのような表情をするときは、何かを考え至った場合が多いのだ。

シルバもまた、アカネの予想通り、ずっと考えていながら、今まで決断できないでいたことを話し始める。カインとレンが少し離れている今がちょうどいいと思った。

「これは私の予測の範疇の話ではあるが、私たちの行動が、完全に把握されている。イズモに」

「……どういう事？」

訝しげなアカネに対し、シルバは表情を崩さない。

「あの襲撃のタイミング。ケルマディックでの墜落を生還し、同時にARRに参加している事までが筒抜けになっているはずだ。でなければ通常、あんな追跡は不可能だろう」

アカネはこの灼熱の大地の中で、暑さとは関連性のない汗が滴り落ちるのを感じる。

「それは、確かに対応が早すぎるとは思ったよ。でも何故なのかしら……」

「何故、だろうな」

イズモの最高責任者が動いている。この情報をシルバはアカネに言わない。情報をもたらしたレンは、何故簡単に追跡されていたのかを知っていて、言わないでいた。裏切り行為と非難されるような状況でも、カインを守ろうとした彼女の意思を尊重すべきだとシルバは思ったのだ。アカネならば、裏切りなどと考える事は無いだろうが、気を使わせる必要も無いと考えたからでもある。

その上で、シルバは話を続ける。

「どちらにせよ、これからの後半戦、少し考えねばならないだろう」

シルバの言葉に軽く眉をひそめるアカネ。

「考えるって？」

「このままレースを続けるか否かを、だ」

アカネは思わず歩みを止めてしまう。シルバの言っている台詞が、何故だかとても理不尽に感じられてしまったから。自分でも不思議なほど、感情の波が押し寄せてくる事を感じ、声に出す。

「続けるか否かなんて、続けるに決まっているじゃない！ 移動手段を手にはしないといけないから、ここまでがんばって辿り着いたんだから。それに順位だって――」

「行動を完全に把握されていると言っただろう。私たちがレースに参加している事が知られているのならば、もはや優勝を狙う意味が無い。むしろ危険でさえある」

首を横に振り、アカネの言い分を否定する仕草を見せながら、シ

ルバは静かに語りかける。

たしかに、とアカネは心の中で納得をする。シルバの言う事は至極もつともだと。レースに参加している事が相手に把握されているのならば、後半戦はもつと激しく、それは危険を伴う事を前提として、当然のごとく妨害の襲撃が行われるだろう。たとえ妨害を乗り越えて、優勝したとして、イズモが絡んだ時点で飛行機を手にできる確証などすでに無いに等しい。わざわざ逃げるための翼を誰が渡すと言うのだ。

レースから離脱するほうがいいかもしれない。シルバはそう言いたいのだろう。当然だった。思考は冷静にシルバの意見に納得する。何があっても、生き残らなければならない。世界を知り、見渡し、行き着いた先で、与えられた運命の『鍵』を使わねばならない。そのためには、リスクをなるべく回避して行動せねばならないのだ。

だが、分かっている。アカネは冷静な思考とは裏腹に、体の内から湧き出る感情を抑えられないでいた。

「……折角、ここまでこれたのに。カインだってあんなにがんばってっ！ いや……ごめんなさい。シルバが正しいと思う」

先を歩くカインとレンの楽しそうな後姿を見ながら、もう追いつけないのであろうかと、錯覚を起こしてしまう。手にしたものを見失いたくないあまり、アカネは思わず駆け出しそうになるのを必死にこらえる。

「これからどうするか、判断はシルバに任せる」

シルバも冷静に判断を下そうとし、だが本当に正しいのかと自問自答をしてしまう程度には、心を痛めていた。

「わかった。もうしばらく考えて、その上であの二人にどうするか話そう」

追いついてもしようがないかもしれない。思いながら、二人は足を速めた。

カインとレンに追いついてしばらく、四人は数々の出店やそこを見て回る人々の中に紛れ、辺りを見回しながら歩いていた。一種独

特の香りを漂わせる肉の串焼きや、安そうな作りをした飛行機の模型の数々を陳列した屋台。エアーズロックをいろいろな角度、時間、季節で捉えた写真などを扱う露店。店舗の並びや密集度などはケルマディックのキャラバンに近い感じがあったのだが、扱っているものは全くの別物であった。ケルマディックでは、生活に必要なものを扱った市場だが、ここに展開されている物や食料の数々は、どう見てもお土産などが中心であり、やはり催し物だという認識を四人、特にカインとレンにさせた。周りを歩いている人々も、何処と無く気品のある格好や仕草で歩いている所からして、ケルマディックに來ているキャラバンや、住む人々とは違う。このような辺境の地にレースの観戦にこられる時点で、それなりに裕福であることが伺えるのだ。ゆえに四人は浮いていた。

「なんか、同じような人だからでも雰囲気が違うなあ。ケルマディックの方がゴミゴミしているって言うか……」

カインはそれら光景を前にし、若干浮き足立ちながら感想を漏らした。レンも回りを見渡しながら同調する。

「確かにー。あたしみたいな、内から気品が溢れ出すような感じの人が多いわ。育ちや環境の違いかねー。ゴミ、いやカイン、泣くなよ？ 気品の欠片もないあんたでも、あたしは見捨てない。関係は変わらないからさ」

「泣きそうだよ！ てか泣かすぞお前っ！ 何処に？ ねえお前の何処に気品とやらが溢れ出しているの？ そもそも育ってきた環境も俺と一緒にだろうが！」

二人は呼吸をするかのように軽快に言葉を交わしていた。少し後ろを歩くシルバが、あえて静かに解説を入れる。

「ここに来ている人間は生活にゆとりのある人々ばかりだ。イズモに居たときも、このレースの観戦はかなり人気だったからな。おそらく旅客機にでも乗って観光気分で金持ちが来ているのだろう」

「へーそうなんだ」

「まあ、あたしは心にゆとりがあるからねっ！ 同じ同じ。金持ち

ならぬ、心持ち！」

「……………」

シルバの話しに納得をしつつ、レンに対して悲哀な視線を送りつつ、カインは今を楽しみながら歩みを進めた。しかし、ふと皆を見回すと、レンは馬鹿で、シルバは冷静でありながら、なぜかアカネは浮かない表情で俯き加減であった。心配になって声をかけてみる。「アカネ、どうしたの？ あんまり楽しそうじゃないね。もしかして疲れてる？ テントに戻ろうか。そんなに目を引く物がある場所でも無さそうだし」

はっとして顔を上げたアカネは、気を使ってくれているカインに、手を突き出しながら左右に振って断りを入れる。

「ご、ごめん。ちょっと考え事をしてて、疲れとかは無いの、うん全然。だからもっと色々見に行ってみよ」

そう言つて、急に早足になって歩み出す。カインは不思議そうにその後を追い、シルバは少し悲しそうな目をしつつ、カインに続いた。一番後ろで何となくやり取りを見ていたレンは、少し複雑な表情を見せ、すぐに隠して一步を踏み出す————その時、カインたちの向かう方向とは少し外れた先、洒落た格好で着飾った紳士淑女の行きかう中、あどけない子供たちがエアーズロックの岩肌を走り回る横、レンにとって見慣れた少年、いや少年の格好をした人物が、穏やかな表情で視線を送って来ていることに気が付いた。

レンは踏み出そうとした一步をもとの位置に戻してしまう。飄々としたいつもの表情は失せ、変わりに顔を敵意と憎悪にまかせて歪ませる。しかし少年は表情を変えず、一瞥だけレンに向けて、その場を去っていった。レンは俯き、こぶしを握り締める。少年はレンに対して用があるのだ。だから目の前に現れた。レンには分かる。その人物が気まぐれや偶然で姿を現すことなど有り得ないと言う事を。

事を皆に悟らせてはいけない。レンは満面の笑みを浮かべる。そして止めていた一步を踏み出して、一気に駆け出す。三人に追いつ

いて話をせねばならない。マリオネットのように操り人形として、三文芝居を演じなければならない事を隠しながら。

第二章 拾肆

駆け出したレンは、連なって歩くカインとアカネの間に割って入るかのように、両の腕を二人の肩に絡める。勢いをつけて飛びつく形になったので、二人は前のめりになりそうになる。周りを歩く人の事などお構い無しの行為だったため、周囲から軽く視線を浴びた。「おっ二人っさん！ と、お兄さん。あたしちょー重要な用事があったの思い出したんだわあ。少しばかり別行動をとるけど許してちょうっ！」

いつもの軽い口調で皆に対して話すレン。カインは訝しげにレンを見る。いつものレンらしいおどけた様な表情である。カインはその表情に思う所があった。

「なんだよ用って。また悪だくみか？」

にっと笑うレン。

「違う違う。これからの後半戦を考えてさ、絶対にあたしが勝つ為にライバルの機体を蹴落しとこうと思ってね。そろそろライバルとなりそうな黒い機体の整備が終わるころだし。ひひっ」

「誰に絶対勝つ気だ！」

「冗談だよ、冗談。ここで仕入りたいモノがあるんだよ。あたしも一応キャラバンの人間だからね。いいネタを見つけたんだ。手土産の一つでもあれば、皆だって喜ぶだろ？」

本当かよと思いつながら、カインは渋々了承する。

「わかった。でも早く戻れよ？ スタートに遅刻とか洒落にならないから」

そして隣でカインと共に、肩をがっちり固められているアカネは残念そうに言う。

「そう、ですか。皆でもっとここを見て回ってたかったのに」

了承を得たレンは二人の肩から手を離し、三步ほど後ろ歩きで三人から離れる。そして演劇の舞台役者のように、大げさな仕草で会

釈をする。

「それでは皆様、残りの時間をゆっくりお楽しみくださいませ。もう？時間はあまり無い？ゆえ、あたしは失礼させていただきます」

レンは顔を上げ、強調した言葉と共に、視線をカインでも、アカネでもなく、シルバへ送る。無言で様子を見ていたシルバの表情は変わらない。変えない。

踵を返したレンは、一人雑踏の中へ消えてゆく。灼熱の太陽が生み出す陽炎が景色を不透明にしてしまうかのように。

カインは少し考える仕草をしながらも、特に疑問をいだく事は無かった。頭を切り替えてから、次に考えた事は鼻腔を刺激する存在の確認だった。

「まあいいか。あいつが居ないなら、それはそれで平和なもんだ。それより、折角だから出店の物でも食べてみようよ。さつきから良い香りが漂ってる」

レースから離れるかもしれないという話しが出ていたので、なるべく皆で一緒に居たかったアカネは心底残念に思いながらも、カインの話を聞いて香りの元に興味を引かれていった。

「確かに、いい香り……」

「ね、食ベに行ってみよう！」

笑顔で誘い、アカネは頷き返す。カインは出店の前に現れている人の列に視線を送りながら、シルバにも声をかける。

「さあ、シルバも行こう」

「ああ……そうだな」

動き出す二人の後を追う形で、シルバも歩き出す。そして考える。

レンの言葉に含まれた意味。

？時間はあまり無い？

レンの言う時間、シルバは後半戦が始まる前の、今の事を指しているのだと考えていた。自身に向け、レンは後半戦の参加はすべきではないと言いたかったのではないか。行動を共にする時間はあまり無いと伝えてきたのではないかと思った。まるで自身の考えを、

後半戦に参加しないほうが良いという判断を見透かして発言したかのように。

この考えが事実だったとして、では何故レンがそう考えるに至ったのだろうか、シルバは思考を巡らさずにはいられなかった。イズモに行動が把握されている事を伝えてきたレンのことだ、何かを掴んだに違いない。

シルバは、楽しそうに出店の列に並ぼうとする二人を見ながら、漠然とした情報を下にはあるが、明確に、このエアーズロックからの離脱をする決断を内心で下した。

三人と別れ、出店の列でカイン達の順番が回ってくるのと同じころ、レンは人波を掻き分けながら、先ほど少年が去っていった方向を素早く進み続けていた。露天商人からかけられる声を見無視し、自尊心の高そうな男や、虚栄心の塊のような女とぶつかりながらである。

しばらく進むと辺りの雰囲気は少し変わり、出店や人はまばらになり代わりに高性能な大型旅客機が多数止めてある、広々とした滑走スペースへ出ていた。観光客向けの機体を止めてある場所だった。どの機体も富を持っている者のみが入手し、また施す事が可能な装備が搭載されている。岩肌しか見えない景色に溶け込まないそれらは、まるで別の世界から現れた未知の生き物のように、違和感を撒き散らしている。

何となくではあるが、レンは少年がどこへ消えたのか察しがついていた。喧騒を離れ、このような飛行機群の中に向かうと言う事は、このどこかに、少年が乗ってきた機体が存在しており、おそらくはそこに少年がいるのだ。

やや歩調を遅め、注意深く辺りを見回していく。個人名の記載された機体を候補から外し、大人数を搭乗させることのできる機体も少年の物ではないと判断する。しばらく歩き回ったレンは、一機の機体の前で足を止める。

これだ。そう、思った機体が目の前にあった。複座ではあるが、数人しか乗れないようなサイズ。空気を切り裂くように尖ったコクピットを先に、楕円形に広がるおおよそ飛行には適さないのではと思えるデザイン。少年が大人数で移動するとは考えられない。そしてイズモのトップを乗せるのであれば、有事の事を考慮し、圧倒的な飛行性能を有する水素金属を使った機体であるはずなのだ。水素金属の機体であれば、形など問題ではない。空気抵抗が少なければいい。目の前の機体はまさにその条件にピッタリだった。

レンは確信を持って機体に近づいていく。人気の無い滑走路では無音が辺りを支配し、眼前の機体を鈍重に演出して見せる。沈黙を破る為に、レンは思いっきり機体に蹴りを入れてやろうと、右足を振りかぶった。だがその足が機体を蹴りつけることは無く、その前に、レンの予測を正解だと言わんばかりに、自動で機体のハッチが開いていった。中から階段が自動で降りてくる。

レンは迷うことなく下りてくる階段に飛び乗り、駆け足で機体の内部へ入っていった。

内部に入ると、青白い人工の光が、無骨な灰色の金属壁に反射して機体内を眩しく照らし出していた。外の太陽光とはまた違った光の刺激に、一瞬レンは眩みを覚え頭を左右に振る。また、外気とはどれほどの差があるのかと思ってしまうほど、ひんやりとした空気が部屋には充満していた。

その機体の内部の中心に、少年は立っていた。まるでショーウィンドウにディスプレイされている人形のように。

蠟で固められたような白い肌に笑みを浮かべながら、少年は言葉を発す。

「やあ、よくこの機体までこれましたね。後で遣いの者に内密で連

れてきていただこうと思っていたのに、おかげで手間が省けましたよ」

レンは少年に負けじと表情を消し、対応する。

「白々しいやつだ。目の前に現れておいて。どうせ予定通りの展開なんだろう？」

「いえいえ、予定通りではありませんよ。少なくとも貴方がここに現れるのは少し早すぎです」

「……言え、何をしにここまできた。何が目的だ？ アカネとシルバを捕らえる事なんて簡単だろ。わざと泳がすような事をしてどういうつもりだ。それでいて襲撃なんかしやがって」

レンは感情を抑えながらも、一步、一步と少年に近づいてゆく。

「うん。少し予定が遅れたからね。本当は、あの二人はケルマディックを脱してすぐリュウキュウ地区、君の故郷に向かうはずだったんです。君の大切な者の飛行艇を借りるか、奪うか、同行願うかしてね。なのにARRに参加する事になってしまいました。飛行機が目的なのだろうけど、その方法は時間が掛かりすぎます。だから教えてあげたんですよ。私達は貴方達の行動を把握しているとね。二人はきつとすぐにでも方向転換をしてくれると確信しています」

饒舌で少年は隠すことなく事情を喋り続けた。まるで価値の無い情報だと言わんばかりに。それでもレンは臆さない。明確な答えを聞き出すために、思考の軸をぶらす事は致命的である。

「答えになってないぞ。昨日の襲撃で十分あの二人には伝わっているはずだ。レースに参加する意味が無くなってしまった事をな。あたしもあんたの事を教えたし、その事だってどうせ予測済みだろうが。ここに来る必要なんて全くないはずだろあんた」

少年はペン先で分厚い洋紙をつつくかのような含み笑いを漏らす。「別に大した意味はありません。貴方達の計画には、副賞の飛行機が必要なんでしょう？ だから、僕が持ってきてあげたんですよ。これを」

おもむろに少年は自身の足元を指差す。レンも思わずその先を見

てしまう。床ですなどという空気ではない。

「この飛行機を？」

「そうですよ。副賞より全然いい代物です。きっとお気に召してくれます」

意図が全く読めない。レンはそう感じざる終えなかった。そもそもアカネ達を捕らえるつもりなど、ないのだろうか。でなければ、なぜ飛行機を渡そうとするのか。そしてもし捕らえる気が無いのであれば、どうしてケルマディックの上空で水素艇を墜落させるように攻撃を仕掛けたのか。矛盾ばかりの行動にしか思えなかった。

混乱するレンを気にもせず、少年は話す。ただ、その内容で状況が一変した。

「ただし、また少しだけ予定が狂いました。さっきも言った通り、貴方はここにくるのが早すぎました。本当はね、ことが終える際にも来てもらうつもりだったんです」

「こと？」

「ええ、この飛行機を円滑に使って頂く為の演出です。だって素直に渡したって使わないでしょう？」

確かにと納得しながらも、まるで、誕生日のプレゼントを渡すかのような軽い話しに感じてしまう自身を律する。

「何をする気だ」

「する気だったが正解ですけどね。まあ、呼ぶ手間が省けたのと、機体を独力で当てたご褒美だと思って教えます。まもなく、エアーズロックをイズモの空軍が攻撃します。反乱分子が紛れているとしてね。嘘ではないです。まあどっちでもいいですが、とにかく攻撃します。それに乗じて、この機体をあの二人には強奪してもらうつもりでした」

簡単に、積み上げた砂山を子供が崩すと判断するかのように、攻撃の事実を少年は口にした。レンは心の中で激しい恐怖に襲われる。目の前の少年は、少年に見えるだけの者は、壊せる物の次元が違う。青ざめた表情のレンを気にすることなく、少年ははじめから変わるこ

との無い笑みのままで言葉を口にしていく。

「なので、このまま貴方がだまっけていても結構ですし、全てを放り出して逃げてもかまいません。ただ、出来る事ならば協力をお願いします。攻撃が開始されたら、二人をここまで誘導してください。貴方とはこれから仲良くしたいですからね、攻撃に巻き込まれて欲しくないんですよ。この機体と場所は攻撃対象に含まれていませんから、安全は保障しますよ」

両手を広げて、安全をアピールする少年。レンには、協力せねば安全の保証は無いという脅しにしか聞こえなかった。

皆に対する完全な裏切り行為の強要。今まで少年の存在をだまっていたのとはわけが違う。シルバとアカネを、逃れようの無い一方通行のルールに乗せるのと同じだった。レンは葛藤で思いつき叫びたいという衝動を必死に抑えつける。悔しさとこれからずっと苛まれる後悔で、今にも大きな瞳から涙が零れ落ちそうだった。

もうレンは答えなかった。少年の顔を見ることが無く、振り返ることも無く、飛行機のハッチへと向かう。扉が開き、自動で閉まる。冷え切った空気から、蒸せるような空気が肺の中に取り込まれてゆく。焦燥感に包まれた表情で空を眺めたレンは、雲ひとつ無い晴天の空に、これから雲のような大量の飛行部隊が襲来し、雨のように爆薬を落としていく光景が、全く想像できなかった。

それでも、レンは走り出した。

？時間はあまり無い？

自身が先ほど言った台詞を心の中で何度も反芻する。両腕を必死に振りながら、走りぬける。

レンは走りながら、これから行うことを、起こることを顧みて、決断を下した。

第二章 拾伍

もう間もなく開始されるであろう、あまりに一方的な襲撃の事など知るはずもなく、レースの観戦に訪れた人々は後半戦に向けてのボルテージを上げていく。踊り、笑い、上流階級に属する人々でありながら、羽目を外せる催しに多くの人々がこぞって参加した。陽気な音楽が辺りを華やかに彩り、カラフルなテントの出店と無骨な岩肌のコントラストが晴天の色に溶け込んでいる。

カインたちも同じように、人々の波に逆らうことなく辺りを散策していた。飛び交う声のやり取りを潜り抜けるかのように、少し大きな声でカインは話しかける。

「すごい盛り上がりだね！　もう間もなくレースが再開されるってのを感じざる終えないや」

レースの再開、その言葉にアカネの心は酷く沈む。ただ、カインに悟られないようアカネは作り笑いを浮かべてしまう。

「そうね、凄い熱気。私もテレビでは見たことが何度もあったけど、参加しているのと、映像でレースを見るのとの違いにびっくりするよ。実を言うとね、私あんまりこのレースの事好きではなかったの。飛行機で早さとか競って何になるのだろうって考えてたんだ。飛行機はそんな目的で作られた訳じゃないのによって不満だった。でも、今はレースの楽しさが分かったよ」

作った笑顔で、しかし言葉に偽りは無かった。楽しくて仕方が無い。もっと飛びたい。自由に、誰よりも速くこの空を制したい。次から次へそんな願望が心を埋め尽くしてしまう。

だが、それは叶わない。アカネは腕に巻いている金属製の時計に目をやり、時間がもうあまり無い事を確認して、シルバを見る。

シルバはアカネの言いたい事、決して望んでいるわけではない決断を受け止め、軽く頷いてカインに語る。

「カイン、そろそろ時間だ。もうドックに戻った方がいい。今後に

ついて話しておきたい事もあるから」

シルバの真剣な声も、カインにはレースに対する決意からくるものと感じ、そろそろ時間だという台詞も、言葉通りレース後半戦の開始を意味するものと受け取った。

「そっか、じゃあ戻ろうか。色々楽しかったけど、そろそろ気を引き締めていかないと、ね」

「そうだな……」

「……………」

楽しかった。カインの言葉に終わりの意味を感じてしまうアカネは、思わず声を出して否定の言葉を発したくなる。もう一つの感情、カインも一緒に……という言葉と共に。

三者三様の空気の中で、ドックへ向かって歩き出す三人。その前を、突然現れた人物が遮る。

「はあ、はあ。おいおい冷たいじゃないかあたしを置いて行くなんてさ。はーん？ さてはあたしより先に帰って、飛行機に細工でもする気だな？ 甘い甘い！ 貴様のカラス号にはすでに細工を施してあるっ！ 一步先をいく女と呼んでくれ」

「さっさと一步先に逝っちまえ！ それからカラス号はやめろっ！」
息を切らしながら、冗談を言うレンに対し、カインはいつも通り対応をしてから、質問をする。

「で、用件はすんだのかよ。俺たちはもうここら辺一带は見て回ったから、そろそろドックに戻ってレースの準備をしようかと思っ
いたんだ」

両手を膝について肩で呼吸をするレンは、額から滴り落ちてくる汗を腕で拭いつつ、言葉を発する。間違わないように、一つのミスが致命的に運命を歪めてしまうという事を意識しながら、それでかつ、冷静に事を運ばねばと決意をする。

「うん、用件は終いだ。いい土産が手に入った。ただ、ちえ、あたしももう少しここを楽しみたかったな。なあ、アカネにシルバ、少し提案」

突然話しを振られた二人は、何かとレンに一步近づく。

「なに……ですか？ レン提案って」

息が整ってきたレンは、ようやく膝に手をやっていた状態から腰を上げ、全力の笑みと共に答えてゆく。

「いい話を聞いたんだ。これからね、レース後半戦の開始を祝う催しとして、花火を打ち上げるんだってさ。だから、さ、これから四人で見に行かない？ 時間はあまり無いんだけどさ。もう、ここに来る事もないかもしれない、だろ？」

レンの提案に、アカネは心が熱くなるように喜んでいる自分に気が付く。最後の瞬間、短い間だけ共に飛行をした仲間と過ごせる時間。アカネには何よりも変えがたい物であった。だから、シルバの方を向く。一生のお願いなどという不確かな安い事を言うつもりは無い。ただ、わがままを言う自分を許してほしいという願いのみだった。絶対に見に行きたいと。

アカネの気持ちを察していたシルバとしても、レンの提案は喜ばしいものに感じられた。幼いころから、自身の事情により一人でいることばかりだったアカネが、ようやく手にした仲間との時間。もう会えないかもしれない者たちとの最後の思い出を残してやりたかった。

「花火か、久しく見ていないな。時間は無いが私も見てみたいな。どうだろうアカネ」

シルバは、アカネが判断しやすいよう、やさしく決断を促す。

「うん、私も見てみたい。皆で……」

少し恥ずかしそうに、だが嬉しさを隠さずにアカネが答える。

突然現れて、花火を見に行こうなどと言い出したレンを不思議そうに見ていたカインは、特に思う事もなく話しかける。

「お前どっからそんな情報聞いてきたんだよ。例の土産とかのついで？」

レンはアカネとシルバの方からカインに向き直り、

「まあ、ね。いい情報……だろ？」

少し大人しめに答える。

「お前にしては、だけどな。でも昼の花火ってどうなのよ？」

「綺麗なんじゃん？ 知らないけどさ。でも見てみる価値くらいはあるっしょ」

「見てからのお楽しみって？ じゃあ、早速行きますか。で？ 場所はどこなのさ」

「……ここを真っ直ぐ行った所に大型の旅客機が止めてある滑走路があつて、そこが絶好の見物スポットらしいよ」

レンは場所を述べて、案内をするかのように一人歩き出す。三人は花火の打ち上がる光景を想像しながら後に続いた。

レンの言った通り、周りの人々も話をどこから聞きつけたのか、花火の打ち上げ場所へ向かって歩き出し始めた。カインたちもその流れに乗る形でどんどん進んでゆく。場所もそこまで遠くは無く、さして時間も掛からずにレンの後に続いた四人は、広く開けた滑走路にたどり着いた。すでに多くの人々が花火の情報を聞きつけ、地べたに座り込んだり、どこから借りてきたのかパラソルと椅子を用意している者もいる。

カインたちはレンの後に付いていき、人だかりから少しだけ離れた何も無い滑走路に腰を下ろすことにした。

見渡す限り何も無い滑走路では、時折吹く風の音と、遠くから響く飛行機のエンジン音が木霊している。四人はそれぞれが向き合うような形で座り、空を眺めたり、岩の亀裂を目で追うようにして、花火の始まる時間を待った。

だが、時間はそこまで無い。四人にはそれぞれ違う意味での時間があった。カインにはレースまでの時間であり、アカネには別れまでの時間。シルバには更なる逃避への時間であり、レンにとっては決断の時間だった。

だからこそ、その中で誰よりも時間に追われているレンが、皆の時間を一気に奪い去る。

レンは、すまなそうにカインを見て、言葉を選びながら話を始め

た。

「あのさ、カイン。その、言い辛い事があるんだけど、聞いてもらえる？」

いつに無く真面目な感じのするレンの態度と声に、カインは少し驚く。

「え？　なんだよ改まってお前らしくも無い」

少し間をおいて、レンはシルバとアカネに視線を送り、そして喋り出す。

「多分、予想だけどさ、四人でレース続けるの無理なんじゃないかって話し」

カインは口を閉ざす。冗談ではなさそうだったから。

「だってそうだろう？　このままレース続けてもさ、危険は増すばかりだし。シルバとアカネが参加していることも追っ手にはばれてる訳じゃないか。それに、相手がイズモならきつと優勝しても飛行機は手に入らない。シルバ、アカネ、違うか？」

二人は肯定を示すように、沈黙を続ける。逆にカインは驚きをもつてレンに問いかける。

「お前、二人がどういう立場だって知ってたのか？」

レンはカインに悟られない程度で、シルバにアイコンタクトを取る。

「うん、昨日の夜、シルバから全部聞いた。だからこそ、あたしの言ってる事、正しいと思うんだ」

レンはそれ以上何も言えなかった。カインがレースを真剣に取り組んでいる事を誰よりもわかっていたから。

カインもレンの言った事をしっかり考え、シルバとアカネに答えを求める事にする。

「もう、決めてるんだねきつと。レースを辞退するとして、これから……どうするの？」

アカネは申し訳ないという気持ちと、辞退したくななどないという願望とを交錯させながら。カインを見つめる。今にも涙が零れ落ち

そんな瞳で。

「ごめん、なさい。カインに無理をさせて参加してもらって、命まで賭して戦ってもらって、それなのにこんな勝手な――」

「いいんだよ。全然。前も言ったけど、これは俺が決めた事なんだから。アカネに悪い所なんて何にも無いよ」

アカネの顔を見て、耐え切れなくなってカインは言葉を被せる。全部聞いてしまったら、やるせなくなってしまう気がしたからでもあった。だからこそ気丈に、現状に立ち止まることなく、次を考える。

これからの事について、シルバは今考えている事をそのまま話す。今更隠し事など何も無い。そう考えていた。

「レース開始後に、旅客機に忍び込もうと思う。見たところ個人所有の飛行機がいくつかあるようだし、内部チェックの無い機体があるはずだ。それに紛れてここを離れようと今は考えている」

言われて辺りを見回す。確かに高級そうな機体がいくつも存在していた。どれも民間機と違い、積荷や搭乗者の確認などなさそうな機体ばかりだ。

シルバは流石だなと考えているカインに、アカネが小さな声で、話しかけてくる。

「カインは……これからどうするの？ レースの後半戦に挑むの？」正直、分からなかった。レースを完航するのは夢であったし、そこに変わりは無い。だが、二人の為という目的が無くなった今、レースを続ける意味を見出せずにいた。あるいはこのまま二人の為に一緒に、そこまで考え、自身の誇大な考えを鼻で笑う。カインは滑走路に座った状態から、大の字になって空を見上げる。

「どうしようかなあ。ゴールは、したいけど気力が湧かないや」アカネは一方的な願いを口にはしない。これ以上は巻き込めない。思いを察してか、シルバがカインに詫びを入れる。

「本当にすまない。ここまで協力してもらい、感謝の言葉では恩を返せない。いつか、必ず君の元を訪れる。その時は、もう一度私た

ち四人でレースを攻略しよう」

シルバの言葉に、カインは胸が熱くなる思いだった。もう会うことはないどこかで考えていた。カインは勢いよく上半身を起こしてシルバと、アカネと、レンを見る。

「うん、じゃあここで約束しよう。絶対にまた四人でここに帰ってきて、後半戦に挑もう」

シルバは大人びた表情を子供のような笑みで崩し、アカネは今にも泣きそうな表情のまま、しかし必ずここに帰る事を決意する。

その中で、レンだけは沈んだ心を悟られぬよう、必死に視線をそらしていた。

辺りでは、花火を打ち上げる最終準備を行っているのか、大型のトラックから降ろされた機材と思われる物が屈強そうな男たちによって運び込まれてゆく。周りの観客も増えていき、言葉が行きかっていた。この花火が打ち上がる前に、決意を定め、実行に移さねばならない。レンはこぶしを強く握り締める。もう後戻りは出来ない事を、レンは心の中で受け入れた。

カイン、シルバ、アカネが座る中、レンはゆっくりと立ち上がる。一度だけ変わらない澄みすぎた空を見据えた後、笑みなど一切ない表情で話し始めた。

「三人に話があるんだ。聞いてくれるかな？」

急に立ち上がったレンを不思議そうに眺めたカインが続きを促す。

「な、何だよ急に……」

レンは一度だけ悲しそうに微笑み、話を続ける。

「うん、まずカインとアカネにはごめん、先に謝っておくけど、話しがどこで出てきたのかわかんないかもしれない。時間が出来たら説明するから」

名指しで言われた二人はきょとんとしながらレンを見る。シルバだけが今の台詞で状況を理解し、顔をしかめる。

「シルバ、私が二人の為に話せる最後の情報を手に入れたから。冷静に聞いて、的確な判断で行動して欲しい」

「例の者からの話か？」

レンは頷く。

「そう。だから、これはさっきシルバが話した今後の行動に大きく関わる」

「……………」

シルバは黙る。

少し間をおきながらレンは深呼吸をし、一瞬で考えが頭の中を巡る。これでいいのか。後悔はしないか。覚悟が出来ているのか。それらを全て確認した上で、懇願する思いで言葉を発す。

「一刻も早くここから離れてくれ！ もうすぐ、イズモの大部隊がここを襲撃するんだ！ 二人も、皆も殺されちまうよっ！ あたしが……飛行機を用意するから……！」

第二章 拾陸

レンの突拍子もない言葉は、周囲の催しに対する雰囲気とあまりに温度差があった。三人にはそれが一種の冗談のように聞こえて、どうしても言葉通りに対する反応が出来なかった。引きつった表情のまま、カインがレンを茶化そうとする。

「いや、お前それは無いって。もう少しまともな冗談——」

「冗談を言ってる場合じゃないんだよ！ 本当なんだ……」

間髪いれず、しかし力ない声でレンがカインを正す。いつに無く真面目なレンにカインは背筋が凍る思いだった。真実だと考えた時の恐怖が脳裏をよぎる。岩肌の平地で空中から晒されているエアーズロックに、何機もの飛行機が爆撃を仕掛けてくる光景が容易に想像できてしまった。

カインとは別で、何を言っているのか理解が追いつかないアカネ。だがシルバは洩い顔にならざる終えなかった。プレジデントの情報を教えてくれたレンの台詞には、必ず真実が含まれている事を知っていたから。

「すでに、決定している事なんだな。その情報は」

シルバが落ち着いた口調で確認を取り、レンは静かに頷くのみ。二人の中にある共通認識が一致する。つまりは、プレジデントからの情報だと。

二人の反応に、今度はアカネが慌てて反応を示す。焦燥感に支配された反応だった。

「そ、んなっ！ イズモの部隊がここを攻撃するですって？ 私たちを捕らえる、いえ消す為だけにここにいる全てを犠牲にするっていうの？ そんな話して無いわ！」

「それほどの相手だという事だ。私たちの認識が甘すぎたようだな」焦燥感から絶望感へ変わりながら、暗い表情でうつむく二人を他所に、カインは悪い想像を打ち消すかのように思いを言葉に変える。

「馬鹿みたいな話だ。本当なのかよレン！　どうしてお前がそんな事を知っているんだ！」

「話すよ、でも今は時間が無いじゃないか。そんな話しをしている場合じゃないんだ既に」

確かに。カインはそう思いながら話しを続けようとする。

「なんとか……しなくちゃ。運営側に話すか、ここで騒ぎでも起こすか、とにかく何とかして最悪な事態を防がないと！」

「そんなこととしても、間違いがきたと思われるのが関の山さ。誰がそんな証拠も無い話を信じるのさ。あんたが今言った通りだよ馬鹿みたいな話だ」

レンは冷たくカインの言葉を否定する。そんなレベルで解決できる話ではないのだ。もう、選択肢などほとんど無い。レンにも、皆にも。

全員がその場で押し黙り、周りの喧騒は一段と大きくなってゆく。どうやら花火を打ち上げる為の点火が行われようとしているみたいだった。カインも、冷静なシルバも、花火を楽しみにしていたアカネさえすでに花火へ意識を向ける余裕を無くしていた。その中で、場違いのように、またはその場において当然の行為を行うように、レンだけが点火の瞬間を今か今かと心待ちにしていた。最後の賭けに打って出る為に。

レンはもう時間が無い事を悟り、少年との約束を果たすべく、アカネとシルバに最善の提案をする。覚悟を決め、言葉を杯から押し出すように喋った。

「アカネ、シルバ、二人はなんとしてこのことから離れるんだ。もうそれしかないよ。二人がここにいないということを追っ手の連中に知らしめるしかない。襲撃が無意味だと悟らせるんだ」

レンの台詞に、アカネとシルバは顔を上げる。二人とも同じような表情でレンを見る。責任という重責を背負う、覚悟を持っている者の表情だった。

しかし、カインは立ち上がり乗り出すような格好でレンに掴みか

かろうとした。怒りに任せた行為だった。レンの台詞が信じられなかった。

「お前っ！ 二人を犠牲にしようってのか！ 二人を差し出して、それで殺さないでくださいって命乞いでもするのかよ。ふざけんなっ！ 俺はそんなこと絶対許さな——」

「カイン！ 私たちはそれでいいの！ 私たちの行動だけで、ここまでの犠牲は出せないわ。関係ない人達が殺されてる中で、何とか逃げ延びようなんて、絶対に出来ない！」

アカネは、力強くも震えるような声で、カインを制す。立ち上がり、声同様震える足で立ち上がりながら、カインの肩に手をかける。シルバも立ち上がり、一度だけ頷く。

「そうだな。私たちが的になればそれでいいのだ。無駄に犠牲者を増やす事など無い。第一、ここにおいても大部隊の攻撃で一人残らず殺されてしまう。それなら一か八かでも私たちだけで逃げた方が助かる可能性はあるはずだ。幸い攻撃が行われるのを事前に知れたのだ。まだ打つ手はある」

シルバはあくまで冷静に、もっともな事を言って嘘をついた。逃げ切れる可能性が全く見出せなかった。それでもやらねばならないので、自然と言葉が口から出た。覚悟を決めたのであれば、一刻も早く突き進むしかない。

「すぐに、ここを離れよう。この、滑走路の機体を一台借りるしかない。アカネいいな？」

シルバの声と行動で、アカネも悟る。四の五の言っていられないことを。

「うん、人が大勢死ぬくらいなら……盗みだって何だってやる」

二人の言葉に、カインは無力感しか感じなかった。ここまで脆弱ではあっても力になってあげていたと、カインなりに考えていた。でも際の際では、自身は何もする事ができない。

それぞれ三人の行動を見ながら、事が予想通りに運ぶ様をレンは背筋が凍る思いで見ていた。あと一言。決められた台詞を言えば事

は終わる。レンは間を置きながら、心の中で何度も台詞を反芻し、

視線を一度三人から逸らし、花火の点火を確認する。そして言った。

「さっきも言ったけど飛行機なら……あるよ。あたしが用意できる」

「そう言っていたな」

「レン……」

「お前どういう——」

それは完全な裏切り行為だった。レンにとってのギリギリの綱渡りだった。だが、綱渡りは成功した。それを祝うかのように、花火は豪快な爆発音と共に晴天の空へ打ちあがる。そして巨大な花を咲かせ、周囲の人々皆の視線を空へと向かわせる。

爆発音が響く中で、レンの台詞に反応した三人はそれぞれレンに視線を向ける。レンはもう一度周囲を確認し、言葉を発する。まさに裏切り行為の言葉を。

「みんなよく聞いてくれよ。誰が聞いてるかわかんないし、この爆発音の中でしか言えないからさ。いいか、シルバ、アカネ、あたしが二人の飛行機を用意する。ここの周辺に止まっている飛行機——そんなもの必要ない。クソ喰らえだ。いい？ 二人はあたしの飛行機でここを発つんだ。今から急いでシンセイのところに向かって、そんでフウジンに乗ってここを発てばいい。一言も喋らず、黙ってあたしに付いてきて！」

三人は呆然とレンを見つめる。レンが何を警戒して花火の轟音に乗じて話しているのか、その話しの意味する所は何なのか、完全に測りかねていた。ただ、レンの表情はいつに無く真剣で、緊迫したものであり、三人に、特にカインにとってその表情は信じてみる価値のあるものであった。また、シルバは周囲を警戒するレンの行動を、プレジデントのもたらしした制約があつての事と当りをつける。アカネは言葉通り、自身を逃がす為のレンの心意気として受け取る事にした。

それぞれレンに対し肯定の意味で頷き返し、すぐにその場を離れる為に歩き出す。レンは裏切った。だがその選択は間違いだった事

を知っている。ただ、正しい選択をしていても、決して喜ばない大切な者がいた事がレンを突き動かしたのだった。

四人はそのまま花火が打ち上がる中で、なるべく目立たぬよう素早くその場を立ち去った。終始無言で出店の集まる通りを抜け、早足でシンセイのいるドックへ入っていく、中では既にレースへ向けての整備を終えた二機の飛行機と飛行艇が連なって並んでいる。

「おう、そろそろレースに向けて準備始めろよお前ら！ 飛行機の方は準備万端だからなっ！」

顔を合わせるなり、そう告げてくるシンセイに対し、一言二言だけお礼を述べて、四人はドック内に設けられている休憩室に入る。シルバとアカネはレンの言葉を待ち、カインは説明を求めた。

「レン、お前どういう事なんだよ説明してくれよ。俺ちっとも現状を理解できない。これからイズモの部隊がここを襲う。その前にお前の機体でシルバとアカネが逃げる。何なんだよこれ、意味わかんないよ」

レンはカインの問いに、申し訳ない心情をこめて答える。いや、答えない。

「今カインが言った通りだよ。それがこれから起こる事の全てなんだ。だからこそ時間が無いんだ。後でいくらでも説明する。だから、今は少しでも早くここをシルバとアカネが発てるよう全力を尽くしてくれよ……」

「それは、うん俺に出来る事なら何だってするよ。でも……でも、二人がここを飛び立って、それを相手が知れば――」

「いいのよカイン。さっきも言った通り責任を負うわ。私たちがここを出て、ここにいる人達を犠牲にするような惨劇を回避できればそれでいい」

「そうだな、私たちが招いた事だ。責任を持って私たちが大部隊を引き受けよう」

二人の言葉に、カインは苦い表情になる。どう考えても絶望的な選択にしか思えなかった。絶対数の違う相手を前に、逃げ延びれるとは思えなかったのだ。昨日の襲撃に現れたような、見たことも無い動きで飛行する水素艇が何機も飛んでくるに違いない。それは絶望以外の何にでもなかった。

「今から、皆に事態を伝えても、やっぱり駄目なのかな」

「無駄だろうな。イズモがここを攻撃目標にしている以上、一人残らず徹底的に攻撃をするだろう。事情を知って殺されるか、知らぬうちに殺されるかの違いだ」

シルバは選択肢が無い事を理解し答えた。

皆が悲壮な表情で無言になる。時間はほとんど無い。本来ならば、先ほどの花火会場であった滑走路から二人は飛び立っていなければならぬのだ。レンの行動に違和感を感じて、先手を打たれるかもしれない。

レンはそれを自覚し、急ぐ。

「さあ、行こう。レースの再開に向けて移動している振りをして、そのまま飛び立つんだ。登録上、あたしの飛行機はシルバとアカネが乗っている事になっているし、イズモは慌てて部隊の進路を変えるはずさ。その僅かな時間に、二人は何としても……逃げ切ってくれよ」

無理を言っている。分かっている。レンは二人を鼓舞する。二人も厳しい状況を理解しながら頷き返す。カインは一人押し黙り、自身の無力さを噛み締める。強く唇を噛んだせいで口の中に血の味が広がったが、締め付けられるような心の痛みに比べれば、それはちっとも痛くなどなかった。

それぞれの思いを抱えながら、四人は部屋を出た。シンセイに準備の開始を告げるために。

「よっし！ これから滑走路に出るから準備をしてくれよ！ あた

しの飛行機が先な。カインのは後にしていいから。ってか出さなくてさえいいから。もう壊しちゃえよ実際」

レンがいつもの調子で笑いながらシンセイに声をかける。カインは言葉を挟む余裕が無かった。それには気が付かず、シンセイは豪快な笑みを携えて答える。

「おう！ いい心がけだ。ギリギリまで怠けてる奴に後半戦は戦えねえからな。先にスタート地点まで行って、気合を充填しとけっ！

おいお前ら、出航の準備だっ！」

「了解！」

「オッケー」

「まかしとけ！」

レンの明るい声に反応して、後半戦に期待を込めたキャラバンのメンバーたちがシンセイの指示の下動き出す。機体に巻かれたシートや固定具が素早く外されていき、ドックのシャッターが開け放たれる。台車に乗ったレンの飛行機が太陽の下に晒され、鈍い銀色に輝き出す。はじめにシルバが乗り、後からレンがはしごを上る。その後ろから、カインの機体も運び出される。同じようにカインとアカネが機体に取り込み、誰が見ても後半戦へ向かうかのような様子で、機体をスタート地点へと運んだ。

カインは機体のスイッチをオンにしてゆく。エネルギーを注がれた機器がそれぞれの音を立てて起動して、目覚める生き物のように動き出す。エンジンの出力を少しだけ上昇させ、機体をゆっくり滑走させる。台車から滑り降り開放された機体は、カインが操縦桿を引くのを待つかのように唸りを上げる。機体の少し離れた所で、事情を知らないキャラバンの面々が手をふっているのが見える。前方では先に動き出したレンの機体がまだ、誰も集まっていはいないであろうスタート地点へ向かい始めていた。

後方に座ったアカネが、力ない声でカインに語りかけてきた。

「ごめんね、カイン。本当にごめん。私たちの勝手な行動で巻き込んで、レースまで台無しにしちゃって、どんなに謝っても謝りきれ

ないよ」

カインはその声と言葉を噛み締めながら反論する。

「そんなことはないよ。アカネとシルバと行動を共にして良かったし、本当に……楽しかった」

言って、言葉が過去形になっていることに気が付いた。楽しいではなく、楽しかった。終わってしまった時間を表すかのような自分の言葉に、カインは悲しくなった。また情けなかった。その思いを口にする。

「俺は、本当に情けないよ。アカネがこれから大変な事態を打開しに行くつてのに、何の手助けも出来ない。俺にもっと力があればよかったんだ。そうしたら……」

また一緒に……。カインは最後の言葉だけ言えなかった。言える訳もなかった。単なる足手まといにしかないであろう同行は、ただ、これからの二人の行動をより困難にするだけだから。

それでも、アカネには十分カインの気持ちは伝わった。アカネはこの僅かな期間をカインたちと共に出来た事が何より嬉しかった。だからこそ、自身が心の奥底に押し込んでいた思い、一緒に……。その答えを無言でありながら思ってくれたカインに感謝した。

アカネは最悪を迎える前の状況下の中で微笑み、

「カイン、また一緒にレースに出ようね。そして今度こそ二人で優勝しよう」

今ではない、少し先の平和な時間の中での出来事として、せめてもの願いをアカネは口にする。

「……必ず!」

カインは願望にも似た感情を持って答える。まるで就寝前に見た夢を願うような儚さを抱えて。

対して前方に行くシルバとレンは、別れてしまう前の最終確認を行っていた。

事情を知るシルバにだけ、レンは全てを話す。

「あんたらのボスは、さっき話した襲撃の段取りを行ったあと、用

意させた水素艇へあたしに案内させて二人を逃がすつもりだったんだ」

「なるほど。確実に私たちを生かして捕らえるつもりか……しかし、いいのか？ 君が裏切った事を知れば、彼らは君をどうするかは分からない」

「まあね。でもあたしはキャラバンの人間さ。世界中を移動してるんだ。早々捕まりはしないよ」

「そうである事を心から願う。本当に申し訳ない」
「いいさ」

レンは自身の行ったことに後悔は無かった。シルバに言った通り、世界中を移動していれば捕まる心配は少ない。ただ、それはあくまでシルバを納得させる為の考えで、本当は別の理由があって出来る行動だった。イズモに捕らえられる事はあっても、命は取られない理由。誰にも言っていない秘密をレンは持っていた。そしてその秘密は死んでも言わないと決めている。

代わりに、少しでも希望を含めた先の話をレンはした。

「これからリュウキュウへ向かうんだろ？ だったら飛行機はそこに返しておいてくれよな。あたし取りに行くからさ」

レンの言った簡単な事すら絶望的に感じる事態だったが、シルバにしては珍しく明るい声で返事をする。

「ああ、必ず返す！ その後の進路が決まったら言伝を残そう。また会えるのを楽しみにしているよ」

必ず。そしておそらく四人で。二人は同じように言葉にはしない共通認識を、また一つ増やした。

機体が飛び立つ事が可能な滑走路。あと一時間もすればゴールに向けて飛び立つ飛行機械が所狭しと壮観に並ぶ場所。カインたちは

到着と同時に機体を停止させて滑走路に降りる。辺りはまだ誰もいない。遠くの方で花火が上がり、晴天の空に大きな花を咲かしている。四人はそれぞれが対峙するような形で立ち並び、最後になるであろう言葉を交わしていた。

はじめにシルバが深く頭を下げる。

「すまなかった。ここまで君たちを巻き込んだのは、私の責任だ。今はこの恩を返せそうも無いが、いつか必ず返す。約束させて欲しい」

シルバの責任ではない、そう言おうとするカインの前に、レンがいつものように少し茶化す感じでシルバに絡む。

「まったくだ！ 本当、必ず返してくれよな恩をさ。出来れば近いうちがいいね。そうだな、二人の問題が片付いたら、キャラバンでしばらくただ働きでもしてもらおうかな」

シルバは年相応に微笑む。

「ああ、その時は最高の飛行スピードを君のキャラバンでお見せしよう」

カインはレンに突っ込もうとしたが止めた。レンの言った冗談は、それはそれで素敵な事に思えたから。

そして今度はアカネが心情を言葉にして伝えていく。優しさと力強さ携える大きな瞳に涙を浮かべて。

「私は、二人に会えて本当に良かった。こんな風に喋って、一緒に行動して、楽しんで……。また、会えるようにがんばるから。真実を知りたくて飛び出して、それだけが目的でここまで来たけど、これから違う。また、この数日間みたいな日を一緒に出来るように、私はがんばろうと思う。本当にありがとう」

またレンが何かを言いそうな雰囲気だったので、カインは慌てて言葉を纏める前に喋った。

「約束だからね！ レースにもまた参加するし、こいつの言ったように、キャラバンで世界中を旅するのもそう。あと、へへ……アカネの住んでいる町とか、そういう所にも行きたいな」

それは夢みたいな話だった。四人で旅して世界を回り、今度はアカネたちに町を案内してもらう。今の状況では限りなく夢としか言えない話し。それでもアカネはカインの言葉に対し、今までに無いくらいの暖かい表情で、気持ちで言葉を返した。

「うん！ 約束するよ。あたしの住んでいる家も、あと学校とか、全部見せる。近いうちに必ず！」

その場所がイズモの中心地である。などと誰も無粋な事は言わない。今はただ、絶望的な状況を前に、希望を持って別れる事が望まれた。

花火の音がいつそう大きくなり、それが催しの終焉を伝えていた。間もなくレースは再開に動き出す。そして同じようにイズモの大部隊がやってくる。時間は完全に無くなった。

四人は、一人も欠けることなく笑みで最後の挨拶を交わした。

「では、また」

「必ず会おうねカイン、レン！」

「辛気臭いねえ、どうせすぐに会うんだから」

「二人とも、がんばって！ 俺次会う時までにもっと操縦巧くなってるから！」

四人はもう一度、それぞれの思いを胸に見つめあい。そして別れる。シルバとアカネは背を向け、灼熱の太陽の下輝くフウジンへと乗り込んでゆく。その光景をカインとレンは静かに見守る。着々と離陸の準備を進めるアカネはコクピットに乗り込んですぐに機器を確認し、動作の確認をする。シルバは特殊な機構であるフウジンを確かめるように機器を操作し、エンジンの出力を上げてゆく。

ふと思いついたかのように、シルバは腰ベルトに括り付けていたケースを手に取り、それをカインに向かって投げた。飛んできたケースを慌てて受け止めるカイン。ずしりと重いそれは、何かと思えば出会った時に渡された、高純度の水素金属を入れたケースだった。エンジンの出力が上がっているため、叫ぶようなシルバの声でようやく、カインの耳に言葉が届く。

「カイン！ それを君にあげよう。君の機体、ライジンの内部ユニットにそれを使えば、製造当初の機能が復活するはずだ！ 何かあったとき、それを解決の糸口として使ってくれ！」

それだけ言うとしルバは親指を突き立てて、操縦桿を握る。カインは渡された水素金属を強く握り締めて笑い、二人に聞こえるように大きく叫んだ。

「ありがとう！ 二人とも生きて！ 必ず生きてくれよ！ 絶対だああああ！」

その声を合図に、フウジンは一気に滑走路を走り出す。カインとレンはその一瞬の中で、悲しそうに手を振るアカネの顔を見た。

そして飛び立ってゆく。地上から解放された機体は見る見る上昇し、小さくなり、晴天の空へ消える。

ただ眺めている二人。無事を祈る事が今出来る全てであると理解し、ただ遠くを見つめた。

ふとレンはカインの方を見る。足元の、乾燥しきった整備された岩肌に、一つ、また一つとシミが出来ていく。カインの瞳からは涙が流れ、それが頬を伝い地面に落ちていた。

「俺、言えなかった！ ついて行くなって、二人の手助けをしたいって言えなかったっ！ 情けない、情けないよ……俺にもう少し力があればっ！」

カインは涙を拭おうとはせず、ただ飛び去った方向を見続けた。レンはその横顔を見て、押しつぶされそうな気持ちになった。カインが泣いている。こんな時、自分は何をしてあげられるのだろうかと考え、自分を本当の馬鹿だと思った。そんな事は一つしかなかった。

「お前調子にのるなよ？ あたしらがあの二人にこれ以上何が出来たってんだよ。十分すぎるくらいやったろうがっ！ レースに参加して、死に物狂いで襲撃を回避して、ここまで送ったじゃないか。上出来だろうあたしたちのレベルを考えたら。他に何が出来る？ 一緒に付いて行って、世界の真実とやらを見るか？ あの二人はと

てつもなく大きなもの背負ってんだ。あたしらなんかじゃこれ以上助けにはならないよ」

厳しい、でも現実としてある事実をレンは次々とカインにぶつけた。カインは心底レンの言うとおりで思った。でもそれを肯定し、受け入れるほど大人でもなった。

「わかってるよそんな事っ！ だからこうして見送ったんじゃないか。俺の実力なんてたかが知れてるし、世界の真実なんか触れようも無い大きすぎる話さ。でも、納得できないんだ。頭にくるし、悲しいし、涙も止まらなくて、もうどうしていいか解ないんだよ！」二人はにらみ合う。しばらくそうしていた。だが、ふとレンが空に視線を向けた為、カインもつられて空を見る。代わり映えない。生まれる前から同じ晴天が広がっているだけだった。

お互い空を見上げながら、穏やかな口調でレンが語る。

「カインさ。この先どうしようか。レースに参加し続けるか、あるいはケルマディックに帰るか。カインが望むならさ……シンセイに言ってキャラバンのメンバーに入れてもらってもいいよ。それとも……あの二人を追うか？」

最後のレンの言葉に、カインは思わずレンを凝視してしまう。今までに見たことも無い、やさしい表情でレンはカインを見つめていた。

「あたし思うにさ、いつものカインだったらすぐに諦めてたと思うんだ。仕事も、実際嫌気さしてたら？ 時間の問題だったよ絶対。今だってそうさ。実力がないって諦めたら。それがカインなんだ。だから、もう諦めちゃえよ。楽になっちゃえよ。無理して二人から離れようとなんかすんなよ。諦めて、カラス号に乗って飛んじゃえ！ 頑固なお前が気持ち押し込めて、二人との旅諦めれるわけ無いじゃん。それとも諦めずに、実力が無い事受け入れて、今までの生活に戻るのか？ そんなカッコいい男になったら、あたし本当にお前の事大好きになっちゃうからな！ 約束通り結婚してもらおうぞ」

カインはレンのあまりにも馬鹿げた言葉の数々に呆然とした。そ

して、口の端が釣り上がるのがわかった。心に何か暖かくなっていき、力強いものが灯ったように感じた。

「誰が結婚なんかするかつ！ てか約束してたみたいに言うんじゃないよ！ 行くよ！ あの二人を追うよ！ 元の生活にお前と逆戻りなんてストレスばかりでやってられるか。世界を敵に飛び回った方が百倍もましだ！」

それだけ言って、カインは涙を腕で拭った。すぐに駆け出し、エンジンのコクピットへ上って行く。

レンはその後姿を悲しそうな表情で、気持ちで、見続けた。やはり、少年の示した方向が正しかったのだと思う。襲撃を受けて、緊急的に二人を用意された水素艇に乗せていれば、カインは二人についていこうなどと思わなかっただろう。襲撃を受けたショックで、足がすくんでいたに違いない。でも、もし自身がカインを守るためだけに、残酷な判断を下していたら、きっとカインは許さなかっただろう。もう今までのように、話は出来なかっただろう。だから自ら誤った方向に進んだ。もう後戻りは出来ない。世界を動かす歯車の一つに組み込まれてしまった事を自覚する。そして、この先何があってもカインを守り続ける事を改めて誓った。

カインはシルバからもらった水素金属をコクピット内のハッチを開け、燃料と直結するエンジン部に取り付ける。かちりとほまったそれは、まるで今までもそこに存在していたかのように、違和感なく、飛行艇の機関の一部となった。すぐにハッチを閉め、シートに座る。機器のスイッチを入れていき、機体は生命を吹き込まれたかのように動き出す。カインは準備を終えると、大声で叫んだ。

「何してんだレン！ 早く乗れよ！ お前の機体返してもらいに行くぞ！」

レンは、心の中で渦巻く思いを全て仕舞い込み、満面の笑みを携えて走り出す。

「おうっ！ 利子もばっちし付けて返してもらわないとな！」

すぐに機体に取り込み、アカネが座っていた後部座席へ腰を下ろ

す。すぐに飛行のための準備を完了させた。カインが操縦桿を引いていき、機体は徐々に加速する。二人の体に圧力が掛かり始め、離陸の瞬間を迎えると、一種独特の浮遊感が襲う。景色は水流よりも早く流れ、機体は晴天の空へ上昇して行く。

この雲ひとつ無い空の延長線上に、いったい何が待ち受けているのか、それはカインにも、多くを知るレンにも分からない。ただ、飛行艇はどこまでも上昇していけるような、どこへでも連れて行ってくれるような、そんな気持ちを二人に与えていた。

終章

二機の飛行機械が飛び立った頃、少年は置き去りにされた一機の水素艇の中にいた。その機体内にはスクリーンが設けられており、複数の人物の顔が映し出されていた。少年はスクリーン越しに話しかける。

「やはりこうなったね。僕の思った通りだ。全ては順調すぎるほど早く進んでいるね」

映し出されている、白い髭と禿頭が特徴的な人物が、顔をしかめて言葉を発す。

「随分と悠長ですな。あの二人の外に、イレギュラーが二人。これは指し示された方向には存在し得ない事象であった。私たちの目的を達するのに、決して好ましい状況ではないはずだ」

男の指摘に、少年は含み笑いをしながら返答をする。

「確かにね。でもそのイレギュラーは、僕たちにとって好材料でもあるんだから、そんなに目くじらを立てなくてもいいんじゃないかな。あの二人は、確実に事象を早めるカンフル剤に成りえる。それに……」

少年は台詞を一端きり、沈黙を置いて、重要な事を強調するように仕向けた。

「それに『鍵』は別に彼女でなくてもいいんだ」

スクリーンの中で動揺が走る。そしてまた別の、今度はメガネをかけ、髪を後ろに結っただけで、化粧っ気のない若い女が少年に意見する。

「まってください。『鍵』は私たちが作り上げてこそのものでしょう？ 部外の代替物を使用したのであれば、いずれ語られるであろう叙事詩に影響を与えます」

「そうだね。でも、それは別に構わないんじゃないかな。外部の力も必要だよ。まあ、示された道筋に沿って進むのが一番ではあるん

だけだね。どちらにしても、僕たちの目的が叶う事が全てなんだ。イズモが誕生して、多くの偶然と可能性が費えてきた。でもここに来て事が収束を始めている。そして事象の完結を促してくれているような、イレギュラーまで生まれ始めている。僕たちが天へ昇る時は近いよ」

スクリーンの中の人々が皆押し黙る。少年の言葉の重みを噛み締め、進むべき方向を再認識していた。

少年は心から喜ばしいかのように、朗らかに言っただけ。

「彼女たちが世界を開放するよ。そして僕たちは旅立つんだ。大丈夫。宇宙の四分の三は水素なんだから。僕たちはどこへでも行ける」

ハイドロゲンく雲となり、雨となるく 第一部 完

ハイドロゲンくされど空の高きを知るく 第二部に続く。

終章（後書き）

これで第一部は終わりです。あとがきが続きますが、基本謝罪と今後についてだけです。内容に関係はありません。ここまで読んでいただきありがとうございました。

＊注意 第二部 ハイドロゲンとされど空の高きを知るゝ掲載します。で、よければ引き続きお読みくだされば幸いです。

あとがき、および謝罪

まず始めに、この作品は空想科学祭2009の参加作品であり、未完のまま期間を過ぎてしまった作品でもあります。ですので、このような形でだらだらと書き続けた事を、企画関係者様を始め、参加者様、読者様にお詫び申し上げます。

しかも、ここまで読んでいただいた方ならご理解いただけるように、作品自体まだ終わっていません。第一部が終わっただけです。十万文字が制限であったにも関わらず、それを越えた上に終わらない。参加すべきではなかったと反省しております。

少し話を変えて、この作品はプロットとして、三部作で完結をする予定となっています。本当はダイジェストのように話のスピードを上げて書くつもりだったのですが、書いているうちに、あれもこれもと詰め込み、このような文字数となってしまいました。（二部三部も一部と同じ文字数が必要となりそう……）自己満足で書くにしても長すぎですよ。ですので、あえて第一部完という形を取りました。

また、この作品を書き続けるべきなのか迷ったという理由もあります。はたして読んでくださった方は一体何人いるのだろうと疑問に感じたのです。アクセス数からして、ほとんど居ない様に見受けられます。正直お気に入りにしてくださっている数名の方がいたからここまで書けたと言っても過言ではありません。

それにしても長すぎですよ。素人の趣味作品を、しかもこのクオリティーであと二部、三部がありますなんてとても言えないです。ですので、二部を書く前に、一度第一部であるハイドロゲンを精査しなおして、再構築しようかと考えています。このまま書いても、駄作の延長にしかない気がしますし、そんな作品を読み続けていただけるとは思えませんし、自信ありません。

続きは必ず書くつもりです。小説家になろうで書くか、ほっそり

とホームページでも作成して書くか、あるいはPCのファイルの中だけの存在となるか、それは分かりませんが、書きます。

ですので、また続きを読んでくださるという方が一人でもいるのであればいいと思います。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。それと申し訳ありません。この二つの言葉を使わせて頂きます。それでは、第二部、または全く新しい新作を書きましたら、また読んでいただける事を励みに、がんばらせていただきます。もう一度、本当にありがとうございました。

追伸

第二部 ハイドロゲン(されど空の高きを知る) を掲載開始しました。もし読んでいただけたなら喜ばしい限りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691h/>

ハイドロゲン～雲となり、雨となる～

2011年5月8日19時42分発行